

---

# 漆黒の鎧兵団

怪人紳士サノブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒の鎧兵団

### 【Nコード】

N4225T

### 【作者名】

怪人紳士サノブ

### 【あらすじ】

一人の少年は油断から命を落とした。はずだったが彼は二度目の生を得る

彼はこの外史をいかに生きていくのか？

少年は外史に甦る（前書き）

こんな話があればいいなあと、愚かにも二次創作に手を出したサ  
ノブです

誤字脱字が目立ちますがそれでも生暖かく見守って頂けると幸いです  
それでは一話始まります

## 少年は外史に甦る

ある一人の少年がいた

代々軍人、警官、自衛官を輩出する一族に生まれた少年は親戚に一族の技術、今となつては無用にすら思える技術、そのすべてを仕込まれながらも一人の人間として日常を謳歌していた

「社よ…覚えておくといい、我らは今でこそ警察へ輩出されるようになっていくが…かつての一族は人を殺す剣だったことを」

「剣…？」

「不義を許さず…一族に伝えられてきたこの教え…これを守ろうとするがゆえに我らは誰かの代わりに断罪し、斬り捨て、葬ってきた…一族の技の数々は全てが血塗られているのだ」

「じゃあ何故俺に人殺しの技を、剣を教えたのですか」

「技は力、力は必ず誰かを傷付けるもの…だが力がなければ一族の掟は守れん」

「そうは言っても不義を許さずなんて守る機会があるんですか？」

「生きていれば嫌でも目につくさ　社、その時にお前は不義を見逃せるかい？お前は正直な男だ　見逃すわけがない」

「そうは言われても…」

「お前が不義に立ち向かうその時に一族の技は必ず力になる…一族最強だった私が言うんだ　私を超えたお前なら教えのひとつやふたつぐらい守れるさ」

「そういうものですかね…王手」

「な！？少し待ってくれないか…！？」

師と過ごした日々を胸に残して少しだけ人とは逸脱しているが、今日も学校の友人と共に普通に笑って生きる

ただそれだけのことの筈だったのに

今日だけは違っていた

友人と別れたその少年はいつもの帰り道の途中、路地に複数の男達に連れていかれそうな一人の少女を見付ける

その少女の服は自分が通う高校の制服を着ていた

少女の名前なんて知らないが、一族の教えを思い出した少年は呟く

「ち、屑共め…」

路地に置かれた鉄パイプ二本を持つと彼らを追いかけていく

事務所の入り口らしき場所まで来たあとは、彼の行動は早かった

教材の入った鞆を男の頭にぶつけて仰け反らして両手に持つ鉄パイプで殴打

突然の乱入に男達が油断し始め、その隙に少女を拘束していた男の顎をパイプでかちあげて一撃で昏倒させる

「早く逃げる！」

「こ、このガキいつ！」

少年の叫びに少女は逃げ出し、男達は怒声をあげて少年に襲い掛かった

「ふんっ…雑魚が」

しかし、少年の力量を見抜けなかった男達は皆返り討ちに遭い皆横たわる

もう歯向かうものがないのを確認してパイプを捨てる

そして帰ろうとしていたときに

ズブリと

肉をえぐる感触が

ごぶつと口から血が噴き出し、自分の体に視線をうつす

「ゆ、油断したな…は、はは、はははっ！大人を甘く見てるからだ」

「…の…！」

倒したと思っていた男が長ドスを少年に刺し貫いている

少年は最後の力を振り絞り、肘打ちを男の顔に当て相手の腕をとり壁に叩き付けた

早業に何をされたのか分からぬまま気絶した男を暫くの間、ぼうつとした目で見つめ続けていると少女が警官を連れてこちらに来ているのが見えた

「あつちです！早く！」

助けた少女が読んだんだろう

無事だったことに安堵し少年は倒れた

「！救急車を呼べ！」

「…！」

「……！」

意識が遠くなる、体もどんどん冷えていくの感じながら少年の視界は暗くなっていった

そして、この日

一族歴代最強に登り詰めた少年

紫芝 社は命を落とした

しかし彼の人生は終わらない

彼は二度目の生を受けることになるのだから

S I D E 社

「がふっ！ごぼごぼっ！」

途端に息苦しさに襲われる

急いで顔をあげるとそこは誰もいない夜の泉だった

「は？」

俺は一体どうしたというのだ

確か、自分の学校の生徒を助けにいった

男たちを蹴散らした後に俺は刺されて死んだはずだ

なのに何故俺は生きている？

ここはどこなんだ…

とにかく泉から岸に泳いで上がる

服は制服のままだが、肩の重みに気付く

「鞆まで持ってきてたのか…？でも何故泉なんだ？」

確かに格好は完全に帰宅時のままだった

とはいえ、ずぶ濡れだったせいで中身の教科書とか全部濡れていて台無しになっている

いや、一つだけ台無しにならなかったものがあるか

鞆の奥に仕舞われた二本の剣、小太刀よりやや長い刀と普通の刀よりはるかに長く、大きい刃の刀のそれぞれが大事に袋に収まっていたのを見て安堵する

これらは紫芝一族の人間としての紫芝社にとって一番大事な相棒だふと鞆を探る手を見てあることに気付く

何か、手が小さくなっている

そういえば声も普段のものより高かったような…

嫌な予感がしたので泉に駆け出し、水面に映る自分の顔を見てさらに驚いた

「若返っているだと…」

俺は高校三年生だったはずなのに小学生くらいにまで縮んでいた

はあ…一体何が起きているんだ…

月明かりだけで他に明かりになるようなものはもろくないし、泉以外は木ばかり

夜の森を歩き回って熊に襲われたくはない…

こんな子供ボディでは熊にすら苦戦しそうだ

仕方がない、さつさと火起こしして野宿するか

幸い紫芝一族の人間は皆、野営術は叩き込まれているので必要な物を集めてさつさと火をつけてしまおう

服も濡れたままでは風を引きかねんな

「野うさぎの一匹も見付けられなかったか…」

腹ごしらえにと近場を散策したが食料になり得そうなものは、ひとつも見付からなかったことに少しだけ凹む

日課の鍛練ぐらいしかやることが無さそうだが、そんなことで体力を減らしたくない

とりあえず精神統一ぐらいか

あの時刺されたのは緊張を緩めるといふ油断がまねいた結果だ

一度精神を鍛え直す必要があるだろう

剣をそれぞれ柄尻を合わせ組み合わせる

そうすることで薙刀へと早変わりするのだ

紫芝一族の基本はこうした二つの武器を組み合わせ別の武器に切り替えるという性質を持つ

俺は一族でもっとも強いと言われたこの双剣と薙刀の型を修めた

まあ修められたと言った方が正しいんだろうけど

とにかくそれを顔の前に長刀の方を立てるように顔の前に構える

そして暫く精神を統一していく

「ふう…本当にどうなっているんだ…」

しかし、今回のあり得ないことに中々心が落ち着かないな

一晩寝て探索するしかないか

状況の詳しい把握は明日にして剣を抱えるように眠りについた

「む…朝か」

まだ朝日も登りきっていないがその分一日を長く使える

荷物を纏めて俺は泉を後にした

森の中を歩くわけだからベルトに刀二本ともに挿しておく

この先何があるかわからないからな

途中にある山菜を食べながら暫く歩き続けるとこの森の果てについた

開けた景色を確認すると水墨画のような山々が連なり、どうやら山奥に位置する場所にいたようだ

眼下には村のようなものが見える

「やっとまともなものが食べられそうだな

山菜では限界がある」

俺は意気揚々と降りていったがその村のような場所についたときその光景に啞然とした

「なんだこれは…」

村のようなものは村だったものだった

家は焼き焦げ、村人を全然見かけないのだ

気配はあるがどうも警戒されてるようだな

何がこの村に起きたと言うのだ…

そんなときに数人の男達がやってくる

どうも見た目からしてあまりよろしくない

手には抜き身の剣を持ち、拭き取られていない血が固まって黒くなっていた

服装もどこか中国にある衣装のような物を着ているな

そして俺の存在に気付いたのか迷わずこちらにやってくる

数人の男達は皆下劣な笑みを浮かべてこちらを値踏みするかのような目でこちらを見ていた

じろじろ見られるのはあまり心地よくない

「おい小僧、死にたくなきゃてめえのその剣と身ぐるみ全て置いていきな」

「いきなり何を言うかと思えば…図に乗るなよ雑魚どもが、俺の前から失せる」

抜き身の剣を持っているからろくな連中ではないと思っていたが、ただの雑魚だったか

「なんだとてめえ！」

「死ねよ餓鬼が！」

血の気の多い奴らだな

まさに獣へと身をやつしたといったところか

剣を振り上げてくる相手に対して小太刀を抜き、手早く一閃させる

「…遅い」

「がはっ」

「ぐえっ」

小太刀を払うのと同時に剣ごと雑魚を切り裂く

「なっ！？何しやがった！？」

「ただ力任せに振っただけだが？さて次は誰が死に急ぐ？」

「くそっ！お前ら一旦引くぞ！」

「へ、へい！」

ただ二人を斬っただけだというのあっさりと逃げ腰になって村から出ていった

なんだか拍子抜けだな…とにかく村の状況がアレだからな

朝食などをとれるような状況ではないか

「お、おい…その」

「ん？」

この先の予定を思案していると村人らしき人たちが数人、現れた

皆の服装が古めかしいし、何より服はどこか焼き焦げている

そのうちの一人が前に出て話し掛けてくる

「お前さんは旅のものかい？」

「…ん、そうだな」

泉からやって来ましたなんて頭がどうかしてる人でしかないだろう  
返答に困ったが旅人ということにしておいた

「そうかい…ならあんたは、なにも知らないでその人でなしを斬  
つちまつたようだから言っておくよ」

「あの山賊達が必ず報復しにくる…命が惜しかったら早く出ていっ  
てくれんか？」

ふむ

暗に追い出そうとしているがこの村人の目からしてどうもそういう  
わけでは無さそうだな

村がこんな状況でも俺を気遣うか

まあ見た目が完全に子供だからな

少し訪ねたいこともあるから質問しておく

「あまり聞くべき事ではないのだが…さっきの山賊とやらがこの村  
を？」

「そうさ…皆、重税に苦しめられて、徴兵で働き手が少ないときに  
奴らは来たんだ」

「俺達も何とか守ろうとしたけど…やっぱり無理だった…」

「これ以上犠牲は出したくねえ…あんたも早く出ていくんだ」

「ここまでお人好しとはな」

「ならばこれを見てみぬふりをする方が不義だ」

俺は言いたいことだけ言ってどこかへ行こうとする村人達に声をかけた

「すまないが、俺は出ていけないぞ？知らなかったとはいえ山賊を呼び寄せる原因を作ったのだからな」

「な、なにいつてるんだ！坊主は死にたいのか！？」

「腕には自信があるし、奴らは相手にならん…俺が何とかしてみせる」

「だ、だが…山賊は百人以上いるんだぞ！？」

「渋る村人につくづく優しいのだなと心のなかで呟く」

「百人以上か…それぐらいは何とかなるはずだが体が子供のままだから苦戦するのは間違いない」

「…そうだな…この村で戦える者は？」

「…、五十人だが…」

「それぐらいいけば十分だ…山賊はどれくらいで来る？」

「何時もは三刻程だ…」

刻？古い時間の数えかたをするな

今は気にしてる場合ではないが

「五十人を直ぐに集めてくれないか？この村の周囲の地理を知る者もだ」

村人は時間が無いこともあり急いで呼びに行ってくれた

そこで残った村人が俺に話し掛けてくる

「坊主は勝算があるって言うのか？」

「さあな…だがこの村を守るぐらいはしてみせるぞ」

「連れてきたぞ！」

呼びに行った村人は直ぐに駆け付けてくれた

その面々を見る

やはり鍛えられている訳ではないせいか、不安が残る

しかし、一人だけが明らかに他の面々より遥かに実力の高いものがいた

見た目は少女であるが場馴れしているのも一目瞭然だった

「そこのお前」

「は、はいなんでしょうか？」

俺はその少女に近付いて

「！な、なにを！？」

「ふむ、いい反応速度だ」

手加減しながら蹴りを顔に目掛けるが、それを見切り捌いて見せてくれた

やはり彼女だけ実力が違う

「よし、お前にはちょっとした小隊を率いてもらおう」

「わ、私ですか！？」

「そうだ…地理を考えて奴らを策に嵌めて殲滅する時に活躍してもらう」

「は、はあ…」

さてと、俺は色々準備をするとしてようか

他のものに指示を次々と出していく

そんな中先の少女がこちらにやってきたのが見えた

「さっきのか、俺に何か用か？」

「何故、旅の人の貴方がこの村の為に立ち上がるのですか？」

「…不義を許さず…俺の一族はこのただひとつの教えを胸に生きて  
いるからだ」

「不義を、許さず…」

「俺は自分のしでかしたことが招いたことの尻拭いしてるのもあ  
るが…そうでなくとも俺はこの村の為に立ち上がったただろうな  
見て見ぬふりこそ不義に違いないのだから」

「ここがどこだろうと一族の教えを守りたいしな

それだけ話して俺も歩き出そうとすると

「あ、あの…！」

「ん？」

「私を！私を側に置いてくださらないでしょうか！」

「な、ま、待て　いきなり何を言うんだ」

突然の発言に俺は思わず転びそうになった

この少女は見た目子供の俺に仕えたいと言ってるのか？

「私は本気です！」

「本気と言われてもな…済まないが今はこの話は置いて貰って  
いいだろうか？」

「…わかりました」

あからさまに落ち込む彼女に少しだけ罪悪感が出来てしまうな

どうしよう…

「そうだな…名は何て言うんだ」

「は、姓は徐、名は晃、字は公明と」

「…は？」

今、この子は何て言ったのだ？

この子は自分を徐晃と言ったのか？

徐晃と言えば三国志に置いて魏の有名な将じゃないか

その功績はほぼ常勝と言ってもよく、樊城の戦いに置いては蜀の関

羽を破っている

「あの…どうかなさいましたか？」

「あ、いや何でもない…俺は紫芝社という　紫芝が姓で社が名前だ　気軽に社とでも呼んでくれ」

「それでは社様とお呼びしますね　それにしても変わったお名前ですね？」

「ん？ああ俺の住んでいたところはこんな名前だからな」

彼女の名前からしてここは完全に日本ではないはずだ

しかし普通に考えれば徐晃は男のはず…そもそも現代に徐晃なんて…ん？

「済まないが徐晃…今の皇帝は誰なのだ？」

「はあ、霊帝ですが…」

なんてことだ

薄々とだが俺は時代が違うんじゃないかと思っていたが、本当にそうらしい

徐晃や霊帝、ならばここは三国時代の前か

死ぬはずだったこの身が生き長らえたとはいえどうしてこうなったのだ

しかも徐晃は女性とただでさえ意味のわからない状態だと言つのに…

とはいえ生きているのだから仕方ないか

今はやるべきことがある

それに集中するしかないな

少年は外史に甦る（後書き）

や、ややや、やっちゃった！

恋姫の二次創作作っちゃった！

でも後悔はしてません

それなりにオリジナルキャラがわざわざと現れます

ところでまだ何処のルートに入るかとか決まっていなとか言う無計画なところがあります

キャラ的には蜀が呉になる可能性が高いです

オリジナルルートもいいんですがそこまで俺に出来るだろうか…

ちなみに先に主人公の武器とかは究極幻想12の段ボールを被つていそうな声の某ジャッジマスターからきてます

というかここまでいけば主人公とかタイトルの鎧兵団とか完全に某ジャッジ軍団だとかまさしくその通りです

一応アレンジはたっぷり入ってますが、だいたい某ジャッジ軍団を

思い浮かべながら読んでくれると嬉しいです

一気に三話まで連投します

ついでですが、サノブのもうひとつの作品もちらりと見てください

それではしきげんよう

## 黒鉄の双刃は力無き者の為に

S I D E 社

「手筈は整ったか」

「これで本当に大丈夫なのか？」

「もしも時は俺が全て始末してみせるさ」

準備を整えた俺達は武装して広場に集まっていた

やはり不安と怯えが入り交じっているものが多い

初めて武器を持った者もいる以上仕方ないか、そこは全て俺がフオ  
ローしよう

「皆、聞いてくれ」

俺が前に出てくると視線が集まる

少しだけ緊張するな

とはいえ鼓舞するためにそんなことは言っていられないが

「俺のような村の部外者、ましてやこんな餓鬼の言うことを聞いて

くれたことに感謝する　だが俺はこの村の危機にこんなことしかしてやれないことを許してほしい　だからこそ俺は皆に代わって前線で戦う…俺は弱者に仇なす不義を許さない、この村をこれ以上侵される訳にはいかない！皆もこの不義を許すな！そしてまたこの村を建て直す為に生きて帰るぞ！」

いい終えてみると恥ずかしいものだな

こんなことしか言えなかったが、少しは効果があったようだ

皆覚悟を決めた目をするようになった

俺は皆の勇気に答えるだけだ

そして偵察として出した一人の若者が帰ってくる

「奴らが見たぞ！全員で来やがった！」

「全員配置につけ！賊を討つぞ！」

「「「応っ！」「」」

村人達は走って森のなかに入っていた

俺も引き締めていかねばな

村を出て森の中に入っていく

奴らはこの森を通って行軍する為、いくつか罠を置いた

村の焼けた家屋を壊し、その木材を持って柵を打ち立てたがそれだけではなく木材を尖らせて杭にして木の中に吊るしておいた

振り子のように飛んでくる木材に当たれば少しは数を減らすぐらいはできる

更に、道中に油と乾いた木片、藁を置いて来てある

木材に当たらなかつた者のために火計で更に追い詰めていく

更に逃げ場になりやすいところも小さな掘りや、木にくくらせた縄などで足元をおぼつかせなくなっている為弓矢で狙いやすくした

「む、引つ掛かつたな」

森の中から聞こえる悲鳴に俺は刀を抜いて走る

後は俺が賊を斬っていくまでだ

本来ならしかけを動かすために半分に分けた村人達が合流し賊を叩くのだができる限り戦わせたくない

俺が先に叩き潰さして数を減らそう

更に俺が敵の頭を討っておけば士気を下げさせることも可能だからな  
走っていくと混乱している山賊達を見つけた

「はあああつー!」

飛び掛かって、一気に三人の賊を斬り捨てていく

俺の存在に気付いた奴らは我先にと斬りかかってきた

それを見て俺は剣を振るう速度を上げていく

黒い刃が走るたびに血飛沫が飛び散る

俺の剣を防ごうと剣や槍を盾にするが全てそれらを纏めて叩き斬つてやる

「く、くそっ！なんだこの餓鬼！めちやくちや強ええぞ！」

「てめえ！あの時の借りを返してやるぜ！皆困んで斬り伏せる！」

あの時の賊が叫んだときに他の賊は俺を囲うように立つ

少しは頭を使ったようだが…

「力無き者に俺は殺せん！」

長刀と小太刀を合わせて即座に双刃の薙刀へと変えて体を軸に尻ぎ払うように振り回した

切っ先に触れるものは一瞬でバラバラに成り果て、腕を、足を跳ねられて地獄絵図へと化する

回りにいた賊は皆一瞬にして死に絶える

手元に薙刀を戻して俺は前方の賊を睨み付けた

「ひ、ひいい！待ってくれ！命だけは！」

「貴様はそう言った者達を何人手にかけてきた？」

賊の使っていた槍を拾い上げて力任せに投擲する

槍は吸い込まれるように賊の心臓を穿ち、賊は仰け反りながら倒れた

「てめえ…よくも俺の弟を…」

「か、頭！」

野太い声が響き視線を向けるとそこに一人の大男が現れた

顔立ちが若干似ていたので間違いなくさっきのやつのだらう

しかも頭自ら来てくれるとは探す手間が省けたな

「死にやがれえ！」

大斧を振り上げてこちらに突貫してくる

中々の踏み込みだったが素人同然だな

「死ぬのは貴様だ」

薙刀の小太刀の部分で斧ごと腕を跳ねて更に体を捻る

そして横薙ぎに一閃を繰り出して頭の首を断ち切ってやった

ごとりと頭が地に落ちた拍子に回りの賊は一斉に悲鳴をあげて逃げ出し始めた

「頭は俺が討ち取った！投降するものは武器を捨てろ！」

俺の叫びと共に現れた村人達がいたせいで賊は投降し始めていく

とはいえ投降したのは僅かで一部は未だに挑んでくるものも多かった

しかし、士気など無いに等しい賊に抵抗らしい抵抗が出来ぬまま村人達に次々に成敗されていく

気付けば投降した賊以外の敵は誰一人立っていないかった

村人も軽傷こそあれ、誰一人として死者は居ない

「か、勝ったのか？」

「お、俺達勝ったんだ！」

「「「うおおおおっ！」「」「」

勝鬨をあげる村人を見て俺は安心していると徐晃の姿が見えないことに気が付いた

まさか賊にやられたわけではないよな…

村人に帰る前に賊の武器などを回収するように頼んだ後に辺りを探してみる

すると、木の影に隠れてうずくまる徐晃を見つけた

「大丈夫か徐晃」

「あ、社様…」

胸を押さえて苦しそうにしていた少女は顔を青ざめている

俺は一つの事に思い至り、徐晃に訪ねた

「人を斬ったのが初めてだったか…」

「…はい…ううっ」

人を斬る嫌悪感に吐き気が止まらないのだろう

俺は彼女を抱き締めて背中をさすってあげた

「大丈夫か？これぐらいのことしか出来ないが、心が休まるまで」  
うしてやるが」

「だ、大丈夫です…お手を煩わせてすみません…」

「とはいえ、腰が抜けてるのか？」

「…は、恥ずかしいことながら…」

ふむ、無理もないか

この体の俺と同じぐらいの少女が人を斬っている経験があると普通は思わん

「何も恥ずかしがることはない　俺も初めて人を斬ったときは吐いてしまったさ」

「社様がですか…？」

「俺の一族は内部の派閥争いが酷くてな…宗家を守るために師匠と一緒に初めて護衛についたときに人を斬った…」

あの時の瞬間は今でも思い出せる

相手が俺を殺そうとしたとき恐怖で動けなかった俺を師匠が殴って正気に戻したからな

人を斬ったあととも気持ち悪さに血を吐くまで嘔吐した時に俺を落ち着かせたのも師匠だ

そして今は俺がかつての師匠のように徐晃に同じようにしてやって

いる

「いいか？これが命を奪うということだ 命の軽さと重みを実感  
したお前ならその尊さがわかるはずだ」

「はい…」

「ならば忘れるな、この経験を…次からは強くあれよ」

「はい！」

「よし、では村に帰るとしようか…と、その前に」

確か徐晃は腰が抜けて立てないんだっとな

仕方ないので掬い上げるように持ち上げてやる

所謂お姫様抱っこというやつを実践してみたんだが

「顔を赤くしてどうしたんだ？」

「な、なな、なんでもございません！」

「???しかし、軽いな…ちゃんと飯は食っているのか？」

「た、食べてますよ！」

何だか茹で蛸の如く顔が真っ赤になっているので熱でも出たのか驚  
いたが、違うようなのでさっさと村人達の元に歩いていった

しかし、これからどうすべきだろうか…時代も場所も違うどころか、性別まで違う徐晃

こんなにも頭の痛い状況の中、俺の今後を考えなければな

村に近づく直前に徐晃を下ろして村に入ろうとすると何やら立派な服を着た人物が複数いた

そのうちの一人の無駄に高価そうな装飾を身に付けた肥え太った男がこちらを見ると早足でやってくる

「おお、貴方が旅の者ですか？」

「い、いえ！隣の彼が旅の方です」

徐晃を見て勘違いした男はこちらを見ると何やら若干嫌そうな顔をした

…この手のタイプの人間は俺の嫌いな人種かもしれないな

「ふむ…君がこの村を苦しめていた山賊を討伐してくれたのか…これでも持って早く消えたまえ」

いきなり何かを詰めた袋を投げ渡してきたので受け取り中を開くと、

この時代のお金が入っていた

男はというと投げ渡すだけ渡して再びさっきの集まりの場所に帰っていく

なんだあれは？あれがこの国の役人の態度か？

入れ違いにさっきの人物とは違う女性がやってくる

腰に剣を差しているところから護衛か何かか？

「上の者が失礼な真似をして済まなかった…」

さっきの人物と違い、いきなり頭を下げた事に少しだけ驚いた

「いや、貴方が気にすることはありません　ですので頭をあげてください」

「そうか…最近の漢王朝はああいう者ばかりなのだ…本当に済まない」

…三国時代に入るまえを思い出すと確かに腐敗が進み、民を苦しめていたことが多かったからな

実際にこの目で見るようになるとは思わなかったが、どうやらこの問題は想像以上に深刻そうだな

それにこの時代を考えると腐敗によって貧困の村が増加し、賊に襲

われやすくなる

そして村を奪われた者達が新たな賊へと身をやつしていく負の連鎖が続く

やがてそれらは黄巾の乱へとなっていくのだから始末に負えないな

「ここまで事態が悪化しているのに未だに権力争いが続いている…民を省みない者を上に据えても良くはならないと言つのに…」

「しかしまだ貴女のような方が憂い、改善しようと動いていらっしやるのだから？」

「それでも老害ばかりで回りは敵だらけさ…どうか貴方のような者が居れば少しは変わるだろうな」

「それは遠回しに仕官しろと？」

「…すまないな…今はそれだけ身動きできんということだ」

この女性の苦勞と疲勞は相当なものだろう

それでも諦めない姿勢は尊敬できる

「申し訳ないが俺は仕官する気にはなれません…」

「そうか…だが貴方のような者と会えて良かったそれではこれで」

女性は一礼し俺も倣って一礼する

女性は頭をあげると足早にさっきの男のところに戻って行った

「まだあのような方がいるのですね」

「だが、彼女はあの魔窟の中では生きられないだろうな」

「魔窟…ですか？」

「民を食い物にする畜生のはびこる場所では彼女はどうかいても  
食い物にされる」

「そんな…」

ああいった人物をあそこに置いておくにはあまりにも惜しい

引き留めてやりたかったが、彼女はあの場所から動かないかもしれ  
ない

それだけ芯の強い瞳をしていたのだから

彼らが帰るのを見届けると残った村人達は怒りに顔を染めていた

先程の山賊を討った喜びはどこへいったのだ？

「何があつた？」

「ああ…君か…あの役人どものせいさ」

「あいつら、山賊の脅威が無くなったから徴収できなかったぶん  
の税とまとめて納めるように言ってきたんだ」

「こんな荒れ果てた場所をもう一度建て直すのに精一杯なのに高い  
税をさらにあげて来やがる…これじゃ俺達の村は結局冬も越せない  
…」

成る程、あいつらも不義を働く輩か

見た目からして良くなかったが最低なのはデフォルトか

「なあ、あんたさ…村がこんな状況なのに言うのも何だが、一度こ  
の村に足を落ち着けてくれないか？」

「この村にか？」

しかし、迷惑では？と口に出かかると遮るように喋りだす

「税は血が滲むほど頑張れば平気さ　　だけど、疲弊した村をまた  
山賊みたいなのに襲われでもしたら今度こそ焼かれちまう…あんた  
には村の用心棒になってほしいんだ！それにあんたはこの村の恩人  
だ　　なのにまともな恩を返してないんだ　　せめて返すぐらいさ  
せてくれ…」

その村人達は次々に俺に向かって膝をついていく

啞然としていると隣の徐晃まで膝をつきだした

「私はこの村が好きです…一度じゃなくて何度でも守りたいのです…どうかお願いします社様！」

「徐晃」

参ったな…ここまで頼み込まれては断るに断れない

一度見聞を広めようと思ったがこの村を考えると離れられそうにない

仕方ないか

「分かった 俺にどこまで出来るか分からないが我が黒鉄の双刃はこの村の刃になるう」

こうして俺はこの村にいつく事になった

何故生きているのかとか疑問につきないが、俺は目の前の者達を見捨てるほど屑ではない

不義を許さず

この教えを胸に俺は生きる



## 鎧兵の誕生

月日は流れて冬

謎の蘇生を遂げた少年、紫芝社は村から少し離れた、開けた場所に立っていた

目の前には村の若者達が木刀片手に倒れ伏している

「どうした？俺のような餓鬼一人振り伏せられないのか？」

社が木刀を片手に見渡していると一人、長い棒を杖に立ち上がる少女がいた

「はあ…はあ…まだ、まだ！」

「茜か、お前は相当痛め付けてやった積もりだがまだ立ち上がったか」

「い、痛め付けたって…」

「安心しろ　次はもう少し強めに行く…精々耐えて見せる！」

「ひ、ひいいい！」

社は木刀を構えて駆け出す

茜と呼ばれた少女、徐晃は棒を咄嗟に構えるが死神の如く迫る社に  
数合打ち合っただけで敢えなく沈められた

「よし、体を十分に休めておけ　明日はゆっくり休んでいいぞ」

「……ありがとうございます！」

各々痛む体を押さえながら村に向かって帰っていく

何も社は村人達に袋叩きにされそうになったわけではない

彼は村にいつく時に緊急時に山賊等に対応できるように鍛えていた  
のだ

とはいえ端から見たら一人で無双しているようにしか見えないが

「手を貸そうか？」

「だ、だいじょうぶねす……」

「全然、大丈夫じゃないな」

「やしろさまが、てかげん、しないからじゃないですか……」

「それでは強くなれまい」

ボロボロな徐晃を抱えあげると村人達に混ざって帰っていった

村は完全には言えないが、以前はあったであろう長閑さを取り戻していた

徐晃を下ろした社は村の若者達に振り向いた

「皆、聞いてくれ…俺は鍛冶屋の主人に無理をして皆の鎧を作り上げてもらった　それを皆に託そうと思う」

「鎧…ですか？なら今あるものでも十分では？」

疑問に思った茜は訪ねると社は首を振る

「俺の記憶にある鎧だ　次からはそれを着て走り込みをしてみよう」

「はあ」

「従来の鎧より頑丈で傷を負いにくい、その代わりに機動力を奪う

程の重さがある　これからさらさらにはしゃみになるぞ？気を引き締め  
ていけ」

「はっ！」「」

彼らは村の鍛冶屋に辿り着く

社は中の主人と会話して二人で店の奥へと消えていった

そんな社の後ろ姿を見送りながら茜こと徐晃は昔を振り返っていた

S I D E 茜

フラリと見慣れぬ服を着た旅人、紫芝社様

私は彼の人柄に心惹かれていた

何より彼の一族の教え

不義を許さず

それに生きる彼を私は心のそこから尊敬し、とても眩しく見えたのです

彼がこの村に住むことになったときに、村の皆が用意した彼の住居へ案内しているとあることを訪ねられた

「そつえば聞きたいことがあるのだがいいか？」

「なんでしょうか社様？」

「よく村人達の名前の他に混じって別の名で呼んでいるのだが…あれはなんだ？」

「社様は真名をご存じないのですか？」

「…俺はこの国から東の海を越えた島国から旅をしているのだ俺の国では真名という概念は無かった」

なんと、社様は異国の方だったのか

真名が無いとは変わったお国なのですね…

「真名とはですね、その人を表す神聖な名前なのです　これは許された方しか呼ぶことはできず、もし呼ぶことを許されていないものがその人の真名を呼ぶことは非常に失礼なことなのです　仮に斬り殺されたって文句は言えません」

「相当大切なのだな…ありがとう、知らないままでしたら俺はつまりその人の真名を言って斬り殺されていただろうな」

異国の方であるからこの事を知らないままでしたら大変な事になっていた

もしかしたらまだ知らないことがあるかもしれないから私がお教えしなければ

「そういえば徐晃は、俺に仕えたいとっていたな」

「はい、そうです」

「何故俺なのだ？仕官するなりすれば良かっただろう」

「いえ、私はあなたこそ仕えたいと思っただのです」

「…俺は見た通りまだ餓鬼だ 仕えたいと思わせるほどの覇気なぞ持つてもない、腕がたつだけの小僧に心酔するには値しないと思うが」

何だか今の言い方は変な風に聞こえた

自分がどれだけの力を持っているか把握しきれていないのでは？

「社様は己を卑下しないでください…あの山賊に立ち向かう勇気を

くれたのは社様です　貴方がいなければ誰も山賊と戦いこそすれ、勝とうと思わなかったはずです！私は貴方がとても眩しく見えましたが　私はあなたの内にある教えを共にしまいたいのです」

「徐晃…」

気付けば社様のこれからの住まいに辿り着いた

今は質素だが、こつそりと裏では立派な家をたてる計画を進めていることを私は知っている

それだけ村人達には大切な仲間になったのだから

覇気が無いなど間違いだ

部屋に入ると、無事だった寝台すら置かれている

それ以外は何もないがこれから増えていくだろう

…折角この人に仕えるのだ

私は膝をついて頭を垂れる

「じよ、徐晃？」

「我が姓は徐、名は晃、字は公明、改めて紫芝社様に我が真名、茜

を受け取っていただきたい」

突然の事にまた慌てているのがわかった

それでも私は本気なのだ

私は生涯この方を支えたい

少し考えていたのか長い間の後に社様は口を開いた

「…わかった…まずは頭をあげてくれないか？」

「は…」

頭をあげると少し困ったような表情をされている

このまま断られてしまわないか不安になってしまう

「…徐晃…君の真名、確かに受け取ろう　しかし、さっき話した通り俺には真名のように大切なものを託せそうに無い…そうだな…」

一旦言葉を区切ると先程振るっていた武器を前に出した

「俺はこれの名前でもある『鉄羽』の名を名乗る…これは神々廻一門分家、紫芝家の長、紫芝社のもうひとつの名だ…長は代々鉄羽の

名を受け継ぐ事になっている…そしてこれから社を真名としてお前に託す」

「…は、確かに鉄羽様の真名、社を頂きます…」

彼は双刃を元の双剣に戻すと壁に立て掛けて私に立ち上がるように言ってきた

しかし、ひとつ聞きたいことがあるので訪ねてみる

「しかし、これからは紫芝の姓は名乗らないのでしょうか？一族の大切な姓では？」

「それに関しては大丈夫だ　鉄羽とは名前でこれから紫芝鉄羽になるだけだ…名前を変えたのは俺の覚悟と捉えてくれ」

こうして私は彼の臣下になったのだった

暫くはお金の価値や言語の書きなどを教える日々になる

そして、あの役人の徴兵に守る手段の無い村の為に村の若者達から義勇兵を立ち上げた

さらに冬のこの日になるまでに小規模の山賊を投降させたり村を失った難民を迎え入れることで村人と義勇兵を増やしていく

また彼はあの役人の部下であるあの女性に頼み込み、徴税を減らして冬を迎えられるようにしてくれた

社様がこの村に住み初めて数ヶ月だと言つのに村はめざましい速度で復興していく

やはり社様は凄いのだ

S I D E o u t

茜がこれまでの思い出に浸っていると鍛冶屋の主人と共に社は戻ってきた

「これからこれが俺達の正式な鎧だ」

「しかし鉄羽様のところのこの鎧は無茶苦茶ですな…この重さで動けるので？」

「なに、これでも軽い方だ 俺の着ていたものはこれ三つ分だからな」

鍛冶屋と雑談しながら彼は一人の若者を呼ぶ

「一度試着してくれ 重さはともかく見た目に反して体は動かし

やすいはずだ」

「はいっ！」

若者は四苦八苦しながらも初めて着るタイプの鎧を何とか着終えた

茜達はそのさまを見て溜め息を漏らした

全身を覆う暗い鉄の鎧姿

間接部は黒い布地が覗き、すね当ての他に腰をすべて覆う鎖帷子はまるで外套が靡いているようだ

指から肘まで覆う大型の籠手は、刺々しく、体術も用いて戦うことも必要なのだろう

そして顔の全てを覆う兜に最も目を引かれる

無表情な異形の顔を模した顔は相手に感情を見せることがないぶん恐怖を煽る

「やっぱり普段より重いですね…」

「だが、これを着て十全に戦えるようになればそこらの有象無象の官軍より精強になれる…皆の分もあるので明後日の調練と訓練には着てくるように」

若者達は恐ろしくも何処か惹かれるその漆黒の鎧を次々に受け取っていった

そんな中、茜や女性の義勇兵は所在なさにいた  
たまらず、一人の女性兵が手をあげる

「あ、あのすみません！私達女性兵の鎧は何処にあるのでしょうか？」

「ああ…すまないな、まだ数が揃ってないのだ　出来るかぎり急いでいるが…それに茜は専用の鎧を使ってもらうしな」

「専用の鎧ですか？」

社は頷くと手を叩いて、はしゃいでいた兵達を注目させる

「皆に聞いてもらいたいことがある」

静まり返り、社に注目すると茜の手を引つ張って皆の前に連れ出した  
茜はいきなりのことにあたふたしていると社が鍛冶屋から一振りの  
戦斧を持ってきた

「我々、義勇兵は本日を持って総勢を四百人を超える人数までに至った…そこで部隊を分けようと思う」

「わ、私が引つ張り出されたの何故ですか？」

「それは茜　お前を部隊長にするからだ…その為にこいつを就任祝いに渡す」

社のいきなりの部隊長就任任命に呆然とするなか戦斧が手渡された  
他の義勇兵達は祝いの言葉を次々に投げ掛けるが、暫くの間復帰し  
そつに無い茜を見て苦笑しながら社は説明する

これからは部隊を四つに分けて交代で村の守りにつき、一つは村の  
畑仕事と未だに続く復興の手伝い

残った隊は、訓練、もしくは村の周辺を回り、賊がないかの偵察  
になった

部隊長に茜を入れた三人と社が率いていくことになる

そして後に英雄たちに知れ渡る漆黒の鎧兵団

その前身が結成された

力の在り方、心の強さ（前書き）

4話アツ！

力の在り方、心の強さ

「何をやっているんだ！踏み込みが甘いつ！」

「はいつ！」

巨大な戦斧が轟音をあげて振るわれる

一撃で命を刈り取るその勢いは黒鉄の双刃に阻まれて火花を散らす力を失った斧を蹴りで弾き、今度は双刃が暴風の如く怒濤の連撃を加え始めた

何とか捌き始めるが次第に追い付かなくなっていく

「ま、まだ速くなる！？」

「この程度の速さぐらい凌ぎきれ！」

「うぐっ！」

刃と刃がぶつかり擦れる金属音が最高潮に達したとき

一際甲高い音をたてて斧が弾き飛ばされた

斧は宙を一回、二回と舞い離れたところに突き刺さる

「…くっ」

「…ふう、今日はこれぐらいにしておこう」

その言葉を聞いて斧を振るっていた少女、茜は肩の力を抜いてその場に仰向けになった

今になって最高潮になっていた疲労感がまだ体の出来上がっていない彼女を襲ったからである

「はぁ…なかなか勝てないものですね」

「それでも俺は一族最強だったんだ…得物に馴染んだ程度の茜には負けはせん」

茜と刃を交えていた社は水の入った竹筒を持って側までやってきていた

そんな二人を囲うように見ていた鎧兵達は口々に先程の戦いの感想を漏らしていく

「お館様は子供の身でありながら相変わらず恐ろしく強いな…」

「しかし、徐晃隊長も凄く強くなったよね」

やんややんやと話す鎧兵の言葉に耳を傾けていた茜は社に訪ねた

「社様：私は強くなれたのでしょうか？」

「む？そうだな、以前は戦斧に振り回されていたが、今では得物の性質を理解し更に効率良く立ち回って見せている」

「そうなのですか？実感がないです」

「俺とばかり模擬戦をしているからな…だが、お前は部隊長の中では最も強いんだぞ？この国の将兵がどれだけの強さを持っているのか分からないが、俺ならば一武将に任命する」

「おおっ徐晃隊長べた褒めではないか！徐晃隊長良かったな！想い人に認められたぞ！」

他の部隊長がからかいながら言うと茜は一気に顔を赤くして立ち上がる

そんな姿を社は呑気にさつきまで立てないほど疲れてたんじゃないのか？なんてことを考えていた

一方、羞恥に顔を真っ赤にした茜は狼狽えながらからかってきた部

隊長に怒っていた

「わ、わわっわた、私は別に社様とは家臣の間柄であって…その、想い人なんてっ」

そんな彼女の慌てぶりを見ていた社はちらりと部隊長に視線をあわせると部隊長が頷いたのを見た

それに社はニヤリと笑い、彼も茜いぢりに参加した

「ふむ、以前家でお慕いしていると言っていたがそういう意味ではなかったのだな…」

「ち、違っいや、ある意味では違いませんがあっあのですねっ！」

「そうか、俺はそんなに魅力がなかったんだな…」

「ええっ！？社様は魅力ありますよっ！私だって貴方に惹かれて… あっっそうじゃなくてっ！」

茜があたふたしている様をニヤニヤと見ている社

この男、結構ノリノリである

実のところ、茜は完全に社に対して好意を抱いている

無論、社は主としてでなく一人の男として好意を抱かれているその事に気付いていた

初めは妹のように感じていたが、だんだん茜から彼に歩み寄ることが増えて共にいる時間が長い

さっきのように褒めれば彼女はとても嬉しそうになるのだ

次第にそれは露骨になっていき中のいい兄妹に見えていた筈なのにやたらと積極的な少女になっていった

そうなれば彼女の露骨過ぎる反応は、部隊を筆頭に鎧兵達の間にあつさりと知れ渡る

…実のところ、村人達にも知られてるのだがその事実を茜は知らない

逆にそれを全て知っていたりするのが社だ

この男確信犯である

散々からかった後で社は茜の頭を撫でてやり、話を戻した

「とはいえ、力を求めることを止めてはならない　まだお前は未熟だし強くなれるのだから尚更だ　研鑽を怠るなよ」

「はい…」

未だに顔の赤さが残るがある程度落ち着いていた

常々、冷静であれと口酸っぱく言ってきたお陰だなと考えていると  
一人の鎧兵が訪ねてきた

「お館様：ひとつよろしいですか？」

「なんだ？」

「お館様は、ことあるごとに力を求めることを止めてはならないと言っています。ここまでに求めるのは何故でしょうか？」

その問いに一部の鎧兵も疑問に思ったようで少しざわつき始める

それを見ていた社はゆっくりと口を開いた

「…この世はどうしても力があるものしか生きられないいわば弱肉強食のようなものだ。山賊の持つ暴力、腐った役人の権力：力がひしめく今の世で何かを守りたいと誓うならば何者をも寄せ付けない力を得るしかない：力無きものは守ることなど出来はしない、何も守れはしないのだ。どんな力であれ力が無ければ、守りたもののほど守れはしない：違うか？」

その問いに何人かの鎧兵は確かにと頷く

一部の者は実際に経験し、一部は山賊に身をやつしたから良く分かっていた

社はそれを見て続ける

「…かつて、俺の紫芝一族は宗家に近いぶん他の分家から相当敵視されていた…一族を滅ぼそうとさえ出てきた分家がいる程だ。そしてある時に一度、本当に壊滅寸前に追い込まれた事がある。その時に俺は一族には武力が足りないと感じた…だから極限まで力を鍛えて、才の頂きまで技を磨きあげ、徹底的に高めた…全てを圧倒し、搦じ伏せる力までに…！」

社の言葉と共に滲み出る威圧感

茜達は戦いに慣れるために何度か社の壮絶な殺気を体感したことがある

それとは違う、まるで体が軋みをあげるような錯覚を感じるほどの威圧感

しかし、唐突に威圧感は消えて重かった空気は軽くなる

「そして俺は紫芝一族を再興し、二度と敵対する気にならないよう外敵を叩きだし、一族の他の者の力を高めてやった…一人だけ強くあっても全てを守りきれとは思わん。それに力は傷付けるものが多い、俺は鍛えた力を悪戯に振るわないように自分で押さえ込ん

だ：力は方向性を変えれば守ることも出来るし、必要が無ければ俺のように封じることすら出来る。何も力に貪欲であればと言わ無いが、自分の力の無さに後悔はしたくはないだろう？」

その言葉に鎧兵達は同感だった

皆、村や家族に友人、恋人など守りたいものがある

口々にもっと己を鍛えようと互いに言い合う光景を見ていた社は穏やかに笑っていた

「さあ、休憩は終わりだ。最後に走り込みをして今日の訓練は終わりだ。明日は他の隊と調練をするから今回はいつもより二週減らす、そのぶん手を抜くなよ！」

「「「応っ!」「」」

鎧兵達の結束は高まっていくことを感じながら社は全速力で駆け出しました

走り込みを終えて村に帰ってくると村長が俺を待っていた

「社殿お待ちしてましたぞ」

「どうした？俺に何か用か？」

「実は、あのお役人様が貴方に話があると…」

あの男が…

ろくでもない話だろうことは目に見えている

とはいえ、会つのを断るわけにはいくまい

「社殿…わしは貴方をあのような男に会わせたくございませぬ…」

「村長の言いたいことは分かる…だが、相手はあれでも国の役人だ」

「しかし…」

「俺を信じてくれ」

村長だけでなく茜や他の部下達も心配してくれるのは分かっている

だが、信じてもらうしかないのだ

一度自宅に戻り、鍛練用の鎧を脱ぎ捨てて、はじめから着ていた学校の制服を着る

村長に言われた通りにあの役人が待つ村長の屋敷の客間に向かった

客間の前にはあの役人の護衛と思われる兵が立っていた

そのうちの一人が俺に気づくと立ち塞がった

「小僧、ここはお前のような者が来るところではない」

「俺はこの部屋のお役人様に呼ばれた者だ　お目通り願いたい」

「お前が、紫芝鉄羽だと？こんな童なわけがないだろう！」

「大人を馬鹿にするな！さっさと失せろ」

俺のことを知らないのか？

元々、俺は気が短くないし嫌なやつに会いたくなど無い

これを言い訳に立ち去ってしまおうか？

そう考えていると、隣の廊下からあの女性が現れた

やれやれ、これでは立ち去れないか…案の定彼女は俺に片手をあげて話しかけてきた

「やあ、貴方が　部屋の前で何を立ち尽くしているのか？」

「何、お呼ばれたのに部屋に入れてもらえぬのだ」

俺達が親しげに話す姿を見て何を思ったのか、先程の兵が突っ掛かってくる

「おい小僧！言葉遣いに気を付けろ！」

「何を親しげに話しているんだ身の程を弁えんか！」

「と、言うことだ」

俺は彼女を見ると肩を震わして怒っていることに気が付いた

彼女はづかづかと兵に歩み寄ると盛大に怒鳴り散らす

「馬鹿者！彼は主が呼ばれたここの義勇兵を率いる紫芝鉄羽殿だ！お前達が身の程を弁えぬか馬鹿者ども！」

「な、しかし彼は子供ではないですか」

「年齢など関係あるか！見た目で判断しおって…彼に頭を下げる！」

「皇甫嵩殿、この見た目で言められるのは慣れている…そこまで叱らなくてもいい」

「しかしだな…」

「義勇兵を率いても村人に変わりはせん…それぐらいにしてやってくれ、それに人前で部下を叱るのは感心せん」

「そうだな…だがこのもの達の非礼、私が変わりに謝っておく済まなかった」

彼女、皇甫嵩は直ぐに怒りを納めてくれた

彼女の怒りに萎縮した兵が憐れに思える

俺は皇甫嵩と共に部屋に入って行った

皇甫嵩は俺を呼びに行つて入れ違いになつたらしい

そしてあの場面に遭遇してしまつたと

彼女は義理堅い人物であると交流を深めた時に分かっていた

…皇甫嵩すら女性であつたとは驚いたが

ただその謝り癖はなんとかなら無いだろうか

彼女が現在仕えている相手が相手なだけに謝り癖がついてしまったのかもしれない

「ふん、来たか…さあ嵩將軍こちらに参れ」

「…はっ」

入るなり客人用の椅子にふんぞり返る豚は皇甫嵩を近くに呼びつける部下である以上逆らえない…か

近くに呼ばれた皇甫嵩の足を嫌らしく触る豚に嫌悪感が募る

皇甫嵩も叩き斬ってしまいたいだろうに、嫌な顔を表に出さずに目を瞑って毅然としていた

「さて…わしは色々忙しいので…単刀直入に言うと、お前、わしの駒になれ」

「…駒…ですか…」

本当にろくでもない話だな…

そんなに権力なんてものに媚びへつらい、手に入れるのが好きか

純然たる暴力の前にはなんの意味を持たぬと言うのに

「聞けば、そこらの山賊を蹴散らす程の勇猛さを持つと聞く…その力でただわしのために邪魔者を消せばよい…相応の働きをすれば金もやるし、税も軽くしてやる…どうだ？わしのために忠を尽くせば良いことずくめじゃぞ？」

本当に救いようの無い奴だなこいつは

生きているのが不思議なぐらいに殴り続けてやりたい

自分のその衝動を抑えて俺は口を開いた

「…申し訳ございません…私はこの村の盾にして矛でございます  
あなた様がどれだけの恩賞を積んでくださるうと私は仕えること  
はございません」

「…ふん…まあ、無理強いしてやるつもりはないがな…仕えれば相  
応の地位もくれてやるし、女を侍らせてやるぞ？」

「私は地位も名誉もましてや女を求めてございません…村人の笑顔  
を守り、己の信ずる義に生きる…それだけで十分なのです」

「ちつ…思い通りにならぬ屑なんぞいても損害だけだな…」

どつちが屑だ豚め

思い切り罵倒してやりたくなるが我慢しなければ

豚は飲みかけのお茶を持って何を思ったのか俺にかけてきた

「わし直々に出向いてやったと言つのに断るとは馬鹿な餓鬼め  
わしの頼みを蹴ったことをいつか後悔することになるぞ…邪魔した  
な、將軍や帰るぞ」

「…は」

豚が出ていくのを見計らったあとに皇甫嵩はこちらにやって来た

「…すまない…」

「…謝るな…貴女のような方が居るだけで俺は我慢できる」

「…どうして、私には力がないのだ…私は何のために将をしている  
のだろうか…」

「皇甫嵩殿…？」

彼女は、泣いていた

今の皇甫嵩の姿は昔の俺じゃないか

力なき自分を呪ったあのときの俺そのものだ

「っ…すまない…こんな姿を見せて…」

「皇甫嵩殿…辛ければ俺の軍に来ればいい…まだあそこに居続けても、貴女の力が無駄なことに振るわれるだけだ」

「それでも私は…」

「將軍！何をしている！早く帰るぞ！」

「…すまない鉄羽殿、またいつか会おう」

「ああ…」

皇甫嵩はあの豚と共に帰っていく

俺は暫く客間にてその様子を見守っていた

手を差し出すだけでは皇甫嵩をあつ魔窟からは救えない

手を伸ばし、無理矢理引きずり出すぐらいでしかないダメか

「くそっ!!!」

手を思い切り机に殴り付ける

机は大きな音をたてて壊れていく

部屋の扉が開く音がしたかと思うと茜がそこにいた

「社様!?!どうかなさいましたか!」

「…なんでもない…わけがないか…」

「社様…服が…」

茜の不安そうな表情に自分の平常心を取り戻そうとする

その時に、茜は俺の両手を掴むと優しく包み込んできた

「…血が滲むほどに握っていらして…それほど怒りがあったのです

ね

気づかないうちに手のひらからは血が出ており、茜の両手を紅く染めていた

屋敷のものに包帯と傷薬を持ってこさせた茜はその場で俺の手の治療を始める

「やっぱり何かあったのですね」

「…あの豚に仕えている人、皇甫嵩を救えない自分に嫌気が指してな…」

「…社様の力では救えないのですか？」

「力では、彼女を救えない…彼女はあそこに残る決意が固いのだ  
彼女の心を痛めながらも諦めていないからな…力はな、心を魅了することはあっても勝ることはない どれだけ力があっても心の持つ力には叶わないものさ」

そうさ、力を極めた俺は紫芝一族を守りたいと心から願ったからだ  
心が強くあれたから力に溺れず、屈しない

彼女は似ているからあの魔窟にも居続けられる…

だが、いつまでもいられるわけではない

前に言ったように彼女は食い物にされる

ならば俺は

「茜」

「なんでしょうか？」

「いずれ、腐敗したこの国は戦乱に飲み込まれるはずだ…その時に皇甫嵩殿が酷使されるのは目に見えている…その時に、彼女を魔窟から引きずり出すぞ」

「わかりました」

あの豚の場所にいつまでもおかせてたまるか

この国が倒れることが分かっているならあの黄巾の乱までに力を蓄えておく

そしてその力で

あの豚を倒し、皇甫嵩を救ってみせる



## 力の在り方、心の強さ（後書き）

勢いだけでどこまでかけるかな…

皇甫嵩の字はこれであってましたっけ？

ちよつと自信無い…

後、仮面ライダーになりたい…

恋姫なんで18禁にしてしまおうか悩みましたが他の上手な方の作品のようにちよつとそういうことがあった程度にしようと思います  
まあ、主人公はまだ子供ボディなので今いる徐晃といろいろといたすと、子供同士とか言うむちゃくちゃアグネスに喧嘩売る内容になるので二人がしっかりと成長するまで待つてください

徐晃の戦斧はハルバードとかバルディッシュを思い出せばイメージできるかと

主人公と徐晃を始め、兵の武器は見た目色が黒と灰色ぐらいしかないので他の勢力のような華々しさはありません

皆っついです

しかも戦いの時は全身鎧で誰が誰だか分からない…

この中では結構異質な軍団に成り果てます

さて豚さん（笑）打倒を誓ったわけで、ここらで少年篇は終了です

次回から黄巾の乱が始まります

お楽しみに

あ、一刀君出すつもりだけど何処の勢力に入れましょうか？

八年の月日、鉄の翼は羽ばたき始める（前書き）

「5話...だと...？」

## 八年の月日、鉄の翼は羽ばたき始める

S I D E 皇甫嵩

「將軍！敵將は降伏しました！」

「うむ、皆の者！勝鬨をあげよ！」

「「「おおおおつ！！！」」」

私は、あの少年、鉄羽殿に笑われないように未だに踏ん張り続けている

軍を率いて各地で賊を討伐し続けてこれで六回目の遠征になるだろうか？

あの時の村の訪問から八年…

彼の前で見せた弱さをもう見せぬと心に誓い、政務に追われながらも民の為に動き続けた

しかし、事態は更に最悪なものになる

ある日、鎧などに黄色い布を身につけた暴徒の集団と交戦した

元々は山賊の寄せ集めなことあつてか、たいした強さもなく犠牲なしに鎮圧してみせたが、この暴徒達はなんと国中に現れていた

私も上から鎮圧の命を受けて大軍を率いることになる

その際に幾度となく鎮圧したお陰である男より地位が上がりやつと束縛から解放されるかと思つたが…

あるうことか、あの男は私より上の者に賄賂を送り再び私を配下にしたのだ

あの時の男は自分よりも上を行った私を許さずに更なる屈辱的な仕打ちをして悦に浸っていた

挙げ句、部隊長も殆どが奴の息がかかった者達ばかりが就けたおかげで悪戯に兵と兵糧を浪費する

前も滞在した町で狼藉を働きその処理と謝罪に追われた

ここまでこの国は墮ちるとここまで墮ちたものだ

「これでは何のために私は…」

「將軍…大丈夫ですか？」

「やはり、あの男が…」

「大丈夫だ…まだ私は頑張れる…」

側近の二人が心配してきてくれる

それほどまでに追い詰められているのだろうか私は…

彼らはあの訪問の時に怒鳴ってしまった二人だ

彼らはあのあと自分の隊に引き抜いて補佐に任命

彼らも私に賛同し、優秀なもので今では隊の古参として腕を振るって  
てくれている

彼らに心配させてはならなかったが…余計にかけさせたか

「將軍…貴方はこの軍にいるべきではありません…」

「やはり、鉄羽殿の元に降るべきでは…？」

「私を思ってくれるのは有り難い…しかし、鉄羽殿に迷惑はかけられん…さあ、帰るぞ！」

そうだ、私を信じてくれたもの達に顔向けできなくなる…  
まだ諦めるわけにはいかないのだ

S I D E   o u t

皇甫嵩が遠征をしている頃、とある山中の廃砦

そこには皇甫嵩が戦っていた者達と同じ格好の集団が根城にしていた  
しかし、そこでも黄色い布を身につけた者達は一方的に葬られていく

「ち、畜生！なんなんだあいつら！」

「全然歯が立たねえ！砦に撤退するぞ！」

我先にと逃げていくのは黄色布を身につけた者達、黄巾党と呼ばれる集団である

しかし、砦の周辺はその黄巾党の骸がさらされていた

というのも原因となる者達が砦の前に陣取っていたからだ

全員が表情すら見えない兜と鎧を纏った異様な軍団が次々に立ち向かう黄巾党を葬っていく

この戦いが始まる前、砦の前線に出ていた黄巾党は初め、官軍でもなければ恐れる必要は無いとその数に任せて挑みかかった

むしろその見たこともない鎧を奪い取ってしまおうという気概でいたのだ

だが、いざ始まればどうだろう

一人一人が鎧とそれぞれの武器と籠手を生かした鉄壁にして苛烈な攻撃を前に命を散らすのみ

倍以上居た筈の黄巾党は、もはや半分以下にすら追い込まれていく

そして前線を維持していた黄巾党の隊長の大男は敗走の色の濃い戦いに焦りが募る

「ば、ばか野郎！なんで一人も殺せねえんだお前ら！逃げんじゃねえ！！！」

「ふ、ふざけんな！あんたについてたら殺されちまつ…！」

部下の一人が最後まで喋ること叶わずに飛来した槍に貫かれて絶命する

顔をあげると目の前の自分の配下も次々に飛来する槍に刺されて行っていた

「な、何なんだよ！なんで誰も殺せないんだ！？」

「教えてやろうか？」

くぐもった声が出た方に視線を向けると他の鎧兵より更に異質な鎧に身を包んだ者が現れた

他の者より複雑に組み合わされた鎧は日の光に黒く輝いている

黒い布地の陣羽織が外套のように鎧に組み込まれ、更に漆黒の外套がもう一枚纏っておりそれが風にはためく

兜すらも怒りの形相を浮かべた、異形の頭蓋のような形と両側から生える大きな角が他の者達と更に形状が異なっている

そして腰に長さが異なる二本の太刀を下げながら両手に針のような黒い鉄槍を左手に二本、右手に一本持ちゆっくりと迫っていた

良く見れば倒された仲間刺さる槍は目の前の男の持つものと同じだ

おもむろに右手の槍を構えて振りかぶると後ろから来ていた仲間が穿たれていく

それを続けて三回投げて次々に命を奪っていく

黄巾党の男は目の前の男が人と思えなかった

槍を失った男は長刀を右手に小太刀を左逆手に抜き放つ

「貴様らが殺せぬ理由はただひとつ……どれだけ賊という力を振るう側になっても弱いからだ」

「う、うるせえええ！この鎧野郎！てめえを殺せば士気は下がるんだ！勢いさえあればどうとでもなる！」

剣を構えた黄巾党の男は駆け出して男に降り下ろした

「殺った！」

「…笑止」

剣は確かに袈裟斬りに降り下ろされたはずだ

しかし鎧にあたった瞬間、勢い良く刀身が折れ飛んでいった

「なまくらで俺を切れると思っていたか、雑魚が」

素早く繰り出された左手の一閃がその黄巾党の男の最後に見た光景だった

その様子を見ていた他の黄巾党は後ずさりしはじめた

「黄巾纏いし者達よ…これまでの不義を働いた罪、今ここで俺が裁く！」

男は黄巾党に二刀をかざして命を刈り取り始めた

「敵将、この徐公明が討ち取った！」

「…向こうも済んだようだな…この戦い、我らの勝利だ！」

「…うおおおつ…!!」「…」

剣を掲げた漆黒の鎧兵達の将、紫芝社の外套は風に揺られてまるでこの黄巾党を覆い食らわんとする翼のように羽ばたいた

S I D E 社

「社様、また大勝利でしたね！」

戦いが終わり、引き返す道中額あてから伸びる二本角の兜を脱いだ茜が駆け寄る

今では彼女は俺達の副将を任される猛将になった

多少気弱な面は未だ治らないがもはや俺を除いた中で誰も彼女に傷を追わせられない程だ

戦斧も手足のように振り回せるようになり、本気でないにしろ手加減抜きの俺と打ち合えるのは彼女だけ

史実道理の名将の片鱗を垣間見てきたが、ここまで成長するとは思わなかった

流石は霸王、曹操に重用されただけのことはある

性別が例え女性であろうと茜は徐晃本人なのだ

「それにしても…ここのところ、こういった賊が増えてきましたね」

「規模も今までの桁違いだ…行商によれば一万にも至る軍団を築いているようだ」

「一万…ですか　我々と言えど勝てそうにないですね」

「俺達は最大で二千が限界だからな　こうして周辺の奴等を叩く

しかないだろう」

「しかし、いくらなんでも数が多すぎです…兵の疲労を考えればいずれは破綻してしまいます」

「わかってはいるんだがな…やはり頭を叩かねば解決しないか…」

どうすればよいものだろうか…

8年という月日がたった今、成長したこの体なら十全に力を振るえるかつて一族に伝わる鎧も再現したのだから、後は封じた力を解放すれば俺は誰にも負けないだろう

しかし、俺が考えていたほど実際はよろしくない

何故なら8年でせめて三千の兵を集めておきたかった

だが、黄巾党の出現によって更に増税と兵糧調達の為の回収が原因で思うように集められなかったのだ

そしてここに来たの誤算が皇甫嵩の出世にある

彼女が大軍を任される將軍に任命された事を祝いはしたが彼女は遠征を繰り返すことになる

ここが、三国志の舞台とはいえ俺の知る歴史通りになると限らない  
皇甫嵩が乱の最中、討たれる危険ができたということだ

しかも最悪なことにあの豚は賄賂を重ねて再び彼女を手元に引き寄せるという暴挙に出る

何度か彼女とは手紙でやり取りはしてきたが、あの豚のことだろうから監視を付けて無理矢理遠征に出しては帰ってくるたびに彼女で弄ぶに違いない

これからは無事を確認するのにも一苦労だ

あの豚の情報を得るべく行商から聞いたがかなりの好色家でもあり、酷いときは若い女性や果ては少女にまで手を出すと聞く

あの時、茜に真つ先に訪ねてきたのは手込めにする気だったのだろう

最近増税により肥えた懐で豪遊しているという体たらくだとか

賄賂さえすれば高官になれる王朝もそろそろ末期だろう

あいつを討つには人手も足りない…時間をかければ良くても8年た

ってこれなのだ

「もどかしいものだな…」

「彼女を救えるのでしょうか？」

「救ってみせる…必ずな」

馬の上に揺られながら沈む夕日を見据えていた

村に帰ってくるとその話題の人物が俺の帰りを待ち受けていた事に  
驚いた

「皇甫嵩…殿…」

「…鉄羽殿…なのか？」

俺は馬から降り、兜を脱いで改めて彼女を見る

俺より4つ程歳上だった彼女は8年の月日に綺麗な女性へと変わったな

だが、少しやつれているような印象を受けるが

「や、やあ…久しいな…鉄羽殿…」

「ああ…あれから8年か…早いものだな」

「実は今日来たのは貴方に頼み事があるのだが…」

彼女は心配そうに俺の後ろの様子を見る

確かに後ろには鎧兵団が控えている

皆、今回の黄巾党討伐に少なからずは疲労を抱えているものだ

「話があるのは俺だけなのだろう？ならば皆はここで各々解散してくれ 今日から二日間の休息を与える」

「では社様の馬は私が馬小屋に」

「ああ、頼む茜」

それぞれが自分の家に帰るのを見届けながら皇甫嵩の元に行く

「何処かに戦いに行っていたのか」

「最近世を騒がしている黄色の賊を討伐にな」

「そうか、なんの連絡もなしに急な訪問をしてすまない」

「将軍が自らお越しになったのだ　義勇兵に過ぎない俺に謝るとはないだろうに」

「そうだな…すまん」

「はあ…」

これは8年たって更に謝り癖が酷くなっているような気がするやつれているのも激務に忙殺されているんだろう

ここは少し、彼女にはちょっとした休暇を味わってもらおうか

「そうだな、こんなところで話すことではないのだろうし何も急ぎでなければ俺の家で話さないか？」

「鉄羽殿の家でか？確かに今は休暇を得てここに来ているが…」

「よし、ならば俺が馳走を振る舞おう」

「鉄羽殿がか？」

「なあに腕なら店に出されるものにひけはとらんよ さあ参ろう  
か皇甫嵩殿」

「ま、待つんだ鉄羽殿…！」

腕を掴んで無理矢理引き摺って俺の家歩いていく

何だか皇甫嵩殿の方から待てやら人さらいやら聞こえるがきつと幻  
聴だろう

ただ

掴んだ腕が普通の女性よりか細く、弱々しかった感触に心が傷んだ

恐らく、近い内に彼女は破綻するかもしれない

そう思うと時間が残されていない事に俺は奥歯を強く噛み締めた

せめて今だけは嫌なことから忘れさせてやりたい

「これは…中々…」

「どうだ？旨いだろう」

「うむ、確かに都の店にも劣らぬ味だ」

「良かった　それと、旨い酒もあるんだがもちろん飲むだろう？」

「いいのか？私なんか飲んでる」

「いいんだ　貴女もよく遠征に行かれるのだから少しは自分に労働することを覚えなさい」

「はははっ　鉄羽殿は私の母親か？」

自ら腕を振るい作った夕飯を食べた皇甫嵩の反応は良いものだった  
旨い旨いと言ってくれるその反応はまるで子供のようにはしゃいで  
くれる

これが本来の彼女の姿なのかもしれない

いつもこうであってほしい

いや、彼女がああ男の目につかず自らの道を突き進められたなら…

「鉄羽殿？何をそんな怖い顔をしているのだ…まさかさつき言った  
事が気に障ったのか？」

「あ、いや、なんでもない…平気だ」

「…それにいい加減にそれは脱がないのか」

そつえば鎧を着たままだったのを忘れていたな

鎧を着たままの俺はさぞかしシユールだったに違いない

「すまんが酒を飲む前に着替えてくる」

「ああ、いくらでも待ってるよ」

自室にて鎧を立て掛けてゆったりとした着流しに着替えて戻ってくる

無論、酒も忘れずに持って来てだ

「さあ皇甫嵩殿」

「うむ、いただくとしよう」

お猪口に一杯注いだものを皇甫嵩に差し出して自分の分も注ぐ

そして互いに同じタイミングで口に運んだ

「中々強いな…しかし、あまりしつこくなくちようどいい…いい酒だな」

「茜と飲むことはあるが…いっはかなり酒に弱くて長く飲めん、普段は一人酒が多くてな…やはり誰かと飲む酒は格別に旨く感じる

特に綺麗な女性と共に、な」

あんまりにも子供っぽいものだから、少しだけ悪戯心がむくむくと鎌首をもたげてきたので…いついっちゃんいちゃっかきを出してしまった

急な事だったからか酒を嘔き出した

…むう、酒がもったいない

「わ、私が、き、綺麗などと…からかっているのか鉄羽殿！」

「くくくっそんなに顔を赤くさせては、可愛らしく見えるぞ」

「これは酒を飲んだからで…！て、鉄羽殿！」

「はははははっ！」

ほんとに童女のようにコロコロと表情を変える

しかし、そんな彼女の表情は暗くなる

「どうした皇甫嵩殿…急にしおらしくなって」

「私を…綺麗と言ったな…鉄羽殿」

「ああ」

「私が綺麗なのは外面だけだ…私はあの男の配下に入った後から来る日も来る日も辱しめられ、いたぶられ、屈辱を味わわれ、無力さを思い知らされ、そして汚された…こんな私が綺麗なはずがないだ…私は…！」

「皇甫嵩殿っ！」

「…っ…！」

机を叩き、声を張り上げる

俺の声に体を震わし、俯いてしまう

「皇甫嵩殿…それ以上…言うな…」

「…すまない」

「…謝るのも…やめてくれ」

「…」

「俺は、そんなあなたを見たくはない」

酒を注いで乱暴に飲み干す

もう一度注いだお猪口を持って立ち上がり、夜風のあたる露台：バルコニーに出て月を見上げていた

「皇甫嵩殿：嫌なことは、酒を飲んで忘れろ　旨い飯を食って忘れろ　馬鹿な話で盛り上がって忘れろ　そして楽しく笑って…忘れろ…そうでない人は、弱いから」

振り返り、両肘を手すりに乗せて寄り掛かり、月の映る酒に視線を移した

「だが皇甫嵩殿：今日、この日の出来事は貴女は楽しかったはずだ　この楽しかった日をしつこく思い出してほしい…人は楽しいことがあつた数だけでもう一度足を進められるはずだから」

「鉄羽殿…全く…貴方の前で二度と弱さを見せないと誓ったが、私は守れなかつたようだ…」

顔を上げると、何処か遠い何かを見つめる穏やかな彼女がいた

「嫌なことは忘れるに限るのだから…でもな鉄羽殿：私は嫌なことを忘れるなんて出来ないよ…嫌なことがあつたからここを良くしよう…と、変えようと思える…その経験があるから、誰かが傷付いた時にどんな思いをしたか触れることが出来る…この負の経験をただ思

い出にしていけない　それを踏み越えるからこそ弱くても人は強くなれるのだと思うよ」

言葉を区切り、酒をもう一度飲み干した彼女は柔らかい笑顔を浮かべていた

張り付けたような笑みではない心からの笑みを

そうか、彼女は俺の一族の教えのように変えようと戦っていた人だ

自分の負の経験があるから

誰かにそれを味わい続けたくない

かつては感謝されたことがあるのだろう

だからまだ心が折れることがなかった

…もう、傷付けるところが無いほどまでにボロボロであるはずなのに

「…皇甫嵩殿…貴女は笑った方がいい」

「なんだ、またからかう気か」

「そうだな…そういうことにしておこう」

月の映る酒を今度はゆっくりと口に含んでいった

「私は二日後に再び軍を率いて遠征することになった」

「また黄色の賊か…」

「だが、これまでの戦いの比ではない大戦になる…上がやると重い腰を上げて、諸侯に討伐の命を出した 黄巾賊との決戦になる」

「…首領の行方が分かったということか？」

「ああ、私達は初めに奴等の兵糧を管理する側を叩く 決まった土地を持たない奴等を一気に弱体化するには兵糧を集め、貯蔵する者を叩く方が早いからな」

「成る程…しかし、そうなると奴らはその分、大軍を形成しているのではないか？各地でも諸侯や官軍が討伐したとして、奴らは敗走し、生き延びた兵を吸収するはず」

恐らく、この時点で曹操、孫堅もしくは孫策、劉備等の英雄達が各地で黄巾党を破っている

少なからず生き延びた奴らがいるはずだ

それらが少しずつであっても集まれば簡単に一万を超える

まさに数の暴力を体現している

「確かに、奴らは私達でも兵差が大きい…そこで私は知人に頼んである人物と協力することになった」

「ある人物？」

「董卓という子だ 彼女の元には神速の異名を持つ張遼という猛将もいる 数の暴力に立ち向かうために精強な兵を借りようと…鉄羽殿どうした？」

「…ん、ああ続けてくれ」

董卓…か…

この黄巾の乱が終わったあとに起こる反董卓連合…

皇甫嵩の口振りからやはり女性のようだが

史実通りであるなら悪逆非道を働くはず

しかし、歴史通りに行くとは思わない

「皇甫嵩殿、この戦いには董卓殿も戦場に赴くのか？」

「実際には戦わないと思うが来ると思うぞ…しかし、どうしてそんなことを？」

「皇甫嵩殿、私もその戦に参加できないだろうか？」

「参加も何も私は今回の遠征に鉄羽殿を誘うつもりだ　今回は流石に貴方に頼らざるを得ないからな」

成る程、彼女の話は俺の参戦の説得か…

好都合だ、懸念すべきもひとつの董卓の人柄を見極める

更にこの戦いで他の諸侯から何名か優秀な者をこっそりと指し抜いてやろう

それに俺が従軍するんだ

皇甫嵩の負担を減らしてやれる

「分かった　ただ、俺は義勇兵として戦わせてもらってもいいか？」

「ああ、私のところにはあの男の息がかかったものが多い　配下になればその分不自由だろう　それぐらいなら無理を通すよ」

「そうか、ありがとう皇甫嵩殿」

「お礼を言うのはこちらだよ鉄羽殿」

皇甫嵩を救いだす

少しでも、光明への道筋が見えた気がした

## 八年の月日、鉄の翼は羽ばたき始める（後書き）

投稿して二日で6000PVをかつ飛んでいきました

驚きのあまり食べてた麻婆豆腐を嘔いた程で回りの人の視線が怖かったです

こんな拙い文章を読んでくれる方がいたことにサノブは読者の皆様  
に感謝します

恋姫の二次創作だから読んでくれるだけだったりしてもサノブは  
嬉しいです

さて、今回はちょっと長さのわりに出来がどうしてもイマイチにな  
ってしまいました…

詰め込みすぎたのが悪かったんでしようが、どう修正しても自分は  
これが限界です

また次回は戦闘描写を多くしないといかんで更に更新不定期が悪  
化するかもしれません

そのところはご容赦ください

そして以前の後書きで感想、意見を下さった方にはこの場を借りてお礼を述べます、本当にありがとうございます

ただ、公式に女好きの一刀君への評価は割れると思ったら…一刀エ…

自分も少なからずそう思っているのでアンチ物を作ろうと思えばボロクソにできてしまいます

しかし、自分は一刀君のそういうところも含めて好きですね

もとを辿ればちょっと強いだけの普通の男子高校生なのですから

この作品の主人公、紫芝社は悪く言えばやたら厳格な家で爺臭く生きてきた人です、ぶっちゃけ若くして化石です、きつと盆栽いじりしてる（笑）

それに彼はポジションは悪人に限りなく近かったりします

一部の人には反面教師、壁として立ち塞がるような人物を目指して社を作りましたからね

そんな彼ですが、遂に黄巾の乱に介入します

終結への立役者までとはいきませんが存分に暴れさせていきますよ！

次話をお楽しみに！

封じられし赤黒の焔（前書き）

6話です

2話連投です

## 封じられし赤黒の焰

皇甫嵩が村に泊まり、立ち去って二日

村の前に社率いる義勇兵が集まっていた

皇甫嵩との約束通りに戦いに参戦するためである

「私達はこれより皇甫嵩殿率いる官軍と合流します！黄巾賊に大打撃を与える戦いです！気を引きしめておいてください！」

「」「」応っ！」「」

「それでは村の守衛、頼んだぞ」

「大丈夫ですお館様 例え襲撃されようと黄巾賊ごときに遅れはとりません」

社は村に兵を千五百の兵を率いて向かうことに決めた

残りの五百は村の守衛に残し、茜のように抜きん出た強さの部隊長をおいてある

社の鎧兵团は実質、社を武将と、本来は部隊長の茜を副将とする軍団として動くことにしたのだ

歩兵が大半を占め、騎兵を社が弓兵を茜がそれぞれ直属の兵である弓兵も左腕から左手まで巨大な盾と化した籠手と肩当てを身に付け、左の籠手には矢筒としても機能している

また弓も普段のより大型に、それでいて上部は刃が付いており接近戦までこなせるように抜かりがない

黒い鉄の軍隊は山を抜けて戦場に向かって黙々と進軍していた

漆黒の鎧兵团を率いる黒鉄の鬼が鉄の翼を広げるその時はすぐそこまできていた

「義勇兵総勢千五百名、皇甫嵩殿率いる官軍の援軍として参上した！お目通り願いたい！」

とある平野の砦

そこには皇甫嵩の率いる官軍と董卓軍が本陣として駐屯していた

社は砦の門の前にて叫ぶ

暫くすると重い扉が開き中から皇甫嵩が自ら迎えに現れた

「よく来てくれた鉄羽殿」

「こちらからお願いしたのだ　これからよろしく頼む」

「ああ、こちらこそ共に勝鬨を上げられるよう頑張ろう　早速このあとに軍義がある　鉄羽殿にも出席してもらいたい」

「分かった　茜、兵を皆に収納しいつでも動けるよう待機してくれ」

「はっ！」

黒い鎧兵達の異様さに沢山の兵の奇異の視線が刺さるが全員どこふく風に入っていた

特に鎧兵達の中で抜きん出た異形の鎧を纏う社には兵達は陰で話題にする

義勇兵の割りにとてつもない存在感を放っているのだ

異民族では？と声が上がりがける

そんな会話を小耳にはさみながら社は兜の中で異民族は俺だけだがな呟いていた

やがて、一際大きな天幕が視界に入る

どうやらここで軍義が行われているようだ

「軍義の時、俺は何処にいればいい？」

「そうだな…私の側に立っていて欲しい」

少し考えたあとにそう答える皇甫嵩

彼女は無意識のうちに彼と離れたくなかった為にそういつていた

それを聞きながら社は一度、纏っていた外套を外して近くの兵に預けたあとに彼は天幕へ足を運んだ

「兜は脱がないのか？」

「一度戦場に入ったらそこは秩序なき畜生の世界、戦場にいる間は戦鬼であれ、終わるまで脱ぐことは許されない…というのが俺の信条だ　自己意識の切り替えと言っちゃった」

兜を小突きながらそう喋り、皇甫嵩の後を追うように天幕へ入っていった

天幕内には、皇甫嵩の配下の将や小柄な少女二人と袴と晒しを巻き、外套をかけたただけのような女性が席についている

皆、入ってきた皇甫嵩、社に視線が行き、配下の老将が一同の疑問を代弁した

「將軍、後ろの者は誰ですか？」

「事前に話した義勇兵の将、紫芝鉄羽殿だ。私の友人で今回の討伐戦に助力してもらおう事になっている」

皇甫嵩の紹介に社は軽く頭を下げていると

「へえ〜…なんや、えらいゴツイ鎧やなあ…それ暑くないんか？」

「ちょっと！いきなり失礼な事言わないの！」

晒しの女性が何故か日本の特徴的なしゃべり方で話しかけ、眼鏡をかけた方の少女が注意した

「…風通しは出来る限りよくしているが普通の鎧よりは熱がこもるから暑いな」

「ってあんたも真面目に答えなくていいでしょっ！」

そういえば少し、通気性を改善しなければならぬな等と考えてたりする社に少女は思わず突っ込みを入れてしまう

皇甫嵩は咳払いをして空気を戻して自分の席に歩いて行った

それに続き、社は皇甫嵩の後ろに腕を後ろで組んで佇んだ

表情の分からない兜の奥で彼らを観察する

先程の老将はともかく、皇甫嵩軍の配下だろつもの達は皆やる気を感じられない

士気も十分とは言えず、恐らくあの男の息がかかっていると思われる中には社を睨み付けたり、親の敵のような視線、義勇兵であるところから見下したような視線をぶつけていた

対して少女達の方を見ると儂げな少女はこの乱を鎮めようとする決意を感じられる

何より眼鏡をかけた少女は自分を見定めようとしている

面白そうに自分を見る晒しの女性はかなり腕のたつ武人であることが一目で分かった

(今のところ俺を除いてあの三人とそこの老将は、信頼出来る…他は駄目だな…欲に塗れた目ばかりか…)

今回の戦いに不安材料が多くなる

自分の思い通りの戦いが出来るのか考えていると皇甫嵩は辺りを見渡して訪ねる

「綺羅の奴…また来てないのか？」

「ふふっ、あのようなものがいようと軍義は始められますよ將軍」

「…彼女には私が後でお伝えしましょう　今は時間が惜しい」

「仕方ない、か…これより軍義を始める」

老将の言葉にやむなしと皇甫嵩は軍義を開いた

「…それでは、我らは自陣に帰らせていただきますかな」

「それではわたくしめも」

次々と天幕から出ていく者を見たあとに眼鏡の少女は作戦地図の乗る机を思いきり叩いた

「あの馬鹿共っ！こんな軍義じゃないわよ…！」

「詠ちゃん…」

天幕には老将、皇甫嵩、三人娘に社だけが残っていた

中で眼鏡の少女が憤慨するのは先程出ていったもの達が原因である内容はまず、敵の立て籠る廃城の前線軍がこちらを攻撃しようとする為に行軍しているのを斥候が確認したことから始まる

主力部隊が揃っているとの事なのでこれを壊滅させることになった軍義を始めたときに眼鏡の少女は黄巾党を皆に引き寄せて弓を掃射、浮き足だったところを山中に隠した別動隊に後ろから突撃し直ぐに退却、更に晒しの女性、張遼率いる騎馬隊が散々に崩して撤退を促せる

それを伏兵をもって壊滅させて戦力を一気に減らすことをあげた社や老将が全面的に賛成したが、他の将が黙っていない

一部は張遼の武勲の独り占めだの賊相手に策など不要だの籠城して援軍を待つだの

更に矢が勿体無いなどといい始める将まで現れた

これには皇甫嵩は呆れ、社はいつら皆殺しにしてしまおうかと物騒なことを考え始めるぐらいである

「私は貴女の策に従う…どうか、怒りをお鎮め願いたい」

「…あんだこそ、柄を掴んでるわよ」

「…私の言えた義理ではなかったな…失礼した」

社は無意識の内に小太刀に手が掛かっていたので離れた

それほどまでに不毛な軍義であった

そんな重くなつた空気を変えようと社に話しかけるものが現れる

「そつえば…自己紹介がまだでしたね…」

儂げな方の少女は社に歩み寄ってくるかと名乗り始めた

「姓は董、名は卓、字は仲穎です　これからよろしく願ひしますね」

「私は賈馱、字は文和よ」

「さっき賈馱つちに言われたけどウチは張遼、字は文遠やよろしゅうな」

「紫芝鉄羽だ　寡兵ながら助力させていただく」

内心、こんなにも有名な人物皆が女性であることになれてきてしまった社だが、流石に董卓に関しては違った

董卓は史実のような暴虐を働くような人物に思えない程に心優しい人物だったことに驚愕を隠せなかったりする

兜を被っててよかったと何故か思う社だった

各々名前を告げていると天幕の中を一人の少女が入ってくる

「綺羅！何処に行っていたんだ！」

「別にいいだろ燦　あんな奴らと軍義なんかしたかねーんだよ俺は、ふああ…」

「皇甫嵩殿、彼女は？」

「…彼女は朱雋…今回の戦いの仲間の一人だ」

皇甫嵩の言っていた綺羅というのは朱儁の真名だった

老将は朱儁に今回の軍義の内容を伝えるとみるみる内に不機嫌になる

「おい、燦！いい加減にあいつら斬り捨ててしまつていいか!？」

「落ち着きなされ綺羅殿　そんなこととしては勝てる戦も勝てなくなりそうです　それにまたしたくもないことをするはめになられまするが」

「ちいつ！…あの木偶の坊共は戦死すりゃいいんだ…」

社は史実を思い出す

征伐失敗の責任をとらせるべく死刑になる筈のある人物を朱儁は賄賂を送り、その人物を救ったことを

その人物はお礼をしたくともついで自分を救った人物が誰かわからなかったらしいが

恐らくこの朱儁のやりたくないことはその賄賂の事だったのだろう

見た目はだらしなく着崩した着物と鎧を纏った言わば不良のような出で立ちだが、裏腹に義に厚い人物なのかも知れない

そんな朱儁は社の存在に気付くと皇甫嵩に聞く

「燦、この趣味の悪い鎧着てんの誰だ？」

「…失礼だぞ綺羅、彼は紫芝鉄羽殿だ　　以前話した義勇兵の将だ」

「へええ…こいつが、燦の想い人か」

「な、違うと言ってるだろ綺羅！」

からかう朱儁は表情を引き締めて社の鎧を叩き、小声で話した

「燦の奴を裏切らないでくれよ？お前も木偶の坊と同じようなら俺はお前を殺すからな」

「ふっ肝に命じておこつ」

「それでいい、あいつは俺より敵が多いんだからな」

「何を話しているんですか朱儁さん」

「いんや、何も無いよ董卓様」

「で、ここに来たのは何かあるんでしょ？」

「ああ、俺んとこの斥候が奴らの主力軍に増援が入ったって話だ」

その言葉に全員の顔が険しくなる

士気の低いこちらでは策を成功させれるかも分からないのだ

そこに敵の増援では勝率が下がるといふもの

「不味いな…もし、合流したらどれだけになる？」

「二万までいくんじゃないかと俺は踏んでる…増援以外にも敗残兵を吸収して増える可能性が高い」

それだけの規模にまで膨れ上がれば敗北したときに周辺の村に甚大な被害が及ぶのが目に見えていた

「絶対に勝たなあかんか…」

次第に回りの空気が暗くなり始めた時、社は口を開いた

「ならば、私が、いや俺が何とかして見せよう」

「な、何を言ってるのあんた！」

「そつや、死に急ぐもんやで？」

社が無謀な事を言ったのはある考えがあったからだ

それを見ていた老将と朱儁は何を思ったのか

「義勇兵だけに任せっきりってのは良くねえな 俺も付き合っぜ」

「この老いぼれめも協力しよう」

「ご助力、感謝する」

「鉄羽殿…何か勝機がおりなのか？」

「今日は日差しが強く、空気もよく乾燥している…奴らを迎え撃つ平野に藁をしき、火計を放つのだ その為に足止めをする」

「そんなの無茶ですよ！それに火を放つとしても回りが遅ければそれだけの犠牲を払うことになってしまいますよ！？」

「しかし、策に素直に動くような者がいない今はこうするしかない  
まい」

「それは…」

「優しいのだな董卓殿は、義勇兵や我らを心配なさる…」

董卓の頭を一撫でしたあとに社は背を向けて天幕の外に向かって歩み始めた

朱儁と老将も出ようとすると

「ああ、もうっ！霞、貴女も彼らを手伝って上げて 火計は本陣が傾合いを見計らってするから」

「分かったわウチもそのつもりやったし 協力したる」

「感謝する、張遼殿、賈馱殿」

天幕を出た社は兵から外套を受け取り、素早く身に纏い、四人は自陣に出陣の準備の為に別れた

黄巾賊との戦いはすぐそこまで迫っていた

「結構無茶をするんですね　今に始まったことじゃありませんが」

「ならばここで残るか？」

「ご冗談を何処までもお供しますよ社さま」

元々、手勢が少ないこともあってすぐに出陣の準備もすぐに終わった  
今回、初めて大きな戦を体験することになったために皆、緊張して  
いるかと思っただがその心配も杞憂に終わる

今回の言わば自殺行為に近い戦いをすると説明したときも誰も臆す  
ることなく俺に忠を尽くすことを告げたのだ

俺の皇甫嵩を救いたいという自己満足の延長上として黄巾党と戦う  
のに誰も文句を言わない

兵の一人は、

「お館様に村を守っていただいた恩を返せる機会を得たのです  
お館様にご助力出来ることを私は誇りに思います」

ここまで言われてしまえば俺は必ずやこの戦に勝ち、皇甫嵩を救って見せなければな

砦の門の前にいると張遼が最初にたどり着いた

張遼は馬上から手を振り

「鉄っちい！待ったかあ？」

「て、鉄っち？社様になんて呼び名を…」

「構わん茜　張遼殿も我らも今しがた着いたところだ」

張遼殿の到着を皮切りに朱雋、あの老将と順番にやってくる

「全員、揃ったようじゃの」

「さて、それぞれの手勢を確認したいが…茜」

「は、我々鎧兵団は千五百程でございます」

「ウチんところは三千や」

「俺のところは二千五百だな」

「わしの手勢も張遼殿と同じく三千程ですな」

「と、なると一万程か、個々の練度があるうと我らより更に一万多いのだから互いを意識しなければすぐに押し潰されかねん…だが、烏合の衆に簡単に討たれるほど情弱ではない」

「は、上等や！張文遠の騎馬隊なめてかかると痛い目見るで」

「俺だつて槍さばきは負けないさ…あそこで縮こまつてる木偶の坊達なんかよりはな」

「わしらも老兵とはいえ、まだまだ黄巾を巻いた小童どもに劣らんわい」

「士気は十分、負ける要素などまるでない」

「不義を働き、堕ちた外道がこのもの達に勝ることはないだろう」

「朱儁殿が我らの大将として動いて欲しい　他のものに依存は？」

「あるわけないやろ？」

「ワシも同じく」

「俺が大将か　へっ皆、ついてこいよ？全軍、黄巾賊を蹴散らすぞ！出陣！」

砦から離れた丘

黄巾賊が視認できる距離まで迫っていた

隊列も何も無い有象無象

「全軍、剣を抜け！槍を突き出せ！弓を構えろ！黄色の畜生どもに蹂躪されるということを思い知らせる！」

朱雋の声が響き渡る

俺は馬の上で鉄槍を構える

黄巾賊の進軍経路を塞ぐように朱雋と老将が正面に陣取っていた

奴らが数に任せて突っ込もうものなら老将と俺、徐晃、朱雋軍から矢の雨を降らすことになる

そして遂に接敵する

「弓隊！はなてえっ！」

浮き足だった前線には、怒号を上げながら突っ込む張遼に散々に蹂躪された

歩兵が主な黄巾賊はその神速に馬に蹴り殺され、槍に貫かれていく  
しかし、黄巾賊は後続の兵によって勢いを盛り返し始める

何時だって数に任せた戦いを見せてきたのだ、当然と言えば当然か  
一度引き返す張遼に代わるように再び矢を降らして足を止め始めた  
黄巾賊を見て俺は叫んだ

「不義を働く黄巾賊に情けなぞ不要！俺達は地獄への水先案内人だ  
！地獄に突き落としてやれ！死ぬなら道連れにしてやれ！業火に炙  
る前に己の手で葬るのだ！全軍突撃！」

「徐晃隊も突撃！不義を許すな！泣き叫ぼうが全てを斬り捨てよ！」

「「「うおおおおっ！！」「」」

地の底から響く叫び声

鉄槍を振るい、黄巾賊の首を跳ね続ける

次第に黄巾賊の方も弓矢を射始めてきた

狙いも何も無い弓は味方すらも葬っていくというのが分からないか

その分誤射しようが頑丈な鎧に任せた俺達義勇兵は全くの無傷なのだから哀れだ

ここにきて兵差の優位を生かしきれない相手の頭のなさが露呈したな  
以前より統率力は上がったが、纏めきれていない

所詮は付け焼き刃ということだ

「うおおおっ！！」

馬を走らせて次々に命を奪う

次第に気分の昂りが俺の封じた力、技の数々を引き出し始めた

「むー」

いきなり馬が立ち上がる

どうやら槍や矢に貫かれたらしい

飛び降りて、回りの雑魚どもを一度散らして横たわる愛馬に駆け寄った

「傷が深い…助からんか…今までよくここまで俺ときてくれたこの戦が終わりに次第、丁重に葬ろう 共に駆けた日々を俺は忘れんぞ」

傷付き倒れた愛馬に背を向けた時に悲しげに嘶く

ここまでしか駆け抜けられず無念だと言っているように聞こえた

「これが、戦場だ…共にいたもの達が倒れふしていく…」

長刀を抜いて小太刀の柄尻に合わせる

その状態で小太刀を鞘から抜いて双刃の薙刀を右手に携えた

「…行くぞ賊ども…中途半端な力を得た貴様らは更なる力に押し潰されるのだ」

「死ねえ！鎧野郎！」

数人の兵が襲いかかってくる

しかし、

「遅い！」

得物も鎧も紙を着るかのように絶ち斬る

腕や足だけでなく、胴体すらも泣き別れに両断してやった

血飛沫が舞い、血の雨を被る

「ひ、ひいっ！なんだこいつう！？」

「怯えたな？戦場で一度怯えたものは…」

体をバネにして槍を投擲する

本気で放たれた槍は黄巾賊の頭の半分が弾けとんだ

槍は更に奥の弓をつがえていた黄巾賊に深々と突き刺さり倒れた

「怯えたものは…生き残れん…！」

薙刀を振り回してさらに斬り刻み尽くしやる

数がいる分、適当に振るうだけで死んでくれる

もうこの戦いで殺した数は三桁にまで及んでいた

そんな中、目の前の黄巾賊が纏めて吹き飛ばされる

その方向を見ると茜が数名の兵と共に黄巾賊を始末していた所だった

「社様！無事ですか！？」

「…茜か…俺がそう簡単に討たせてやるものか」

「些か突貫のしすぎです！後方の被害が大きいので下がりましたよ  
！」

「む…」

どうやら大分前まで独りでに進んでいたらしい

「逃がすと思っ たか鎧共！」

そこを数で塞がれるがその黄巾賊はいきなり腹部などから槍やら矢  
が生えて絶命していった

背後から突き殺していったのは朱雋達だった

「おい！鉄羽！ジジイ見なかったか！？」

「あのじいさんだけ無事が確認できへんのや！」

「なんだと？」

「不味いですね…将が討たれては士気に影響を及ぼします」

茜の声からは若干不安の色が混ざる

「くそっ！鉄羽達も見てねえってならどこ行きやがったんだ…！」

「落ち着け朱雋殿、二手に別れて彼を探すぞ　茜は張遼殿と共に  
行け」

「御意！社様もお気を付けて！」

一体どこへ行ったというんだ彼は…

二手に別れて、立ち塞がる黄巾賊を次々に斬って行くが一向に見付  
からない

何より火計に必要な風が先程から弱まっていた

「やべえ…これじゃ戦線を維持する意味がねえ…！」

「弱気になるな！もう少し、もう少し耐えるんだ！」

老将を見付けられない事と風が止みかけていることが次第にこちらの士気を奪っていく

視界の端に自分の兵が八人もの黄巾賊に槍を隙間に突き入れられているのが見える

疲労に膝をついたものは首を跳ねられた

はやく、はやく、早く見付けねば

自軍の兵が無惨に命を落とす光景をこれ以上見たくはない

しかし、風は止んでしまった

「くそっ…堀のある場所まで戦線を下げるしかねえ…異論は無いだろ？」

「ああ、徒に仲間を失いたくはない」

まだ戦える…だが回りがそうではないのだ

戦場に秩序はない

狂気に飲まれた者、足を止めたものはこの渦に飲み込まれ脱落する

特に劣勢であればその被害は甚大になる

どうして、こうして傷付くものがあるのに朝廷は権力争いなんかに力をいれているんだ…

怒りが沸々と沸き上がり初めて俺は、この時代の英雄達のように台頭しようと思った

この時代は、あまりにも欲にまみれ不義を増長している

ならば一度国を滅ぼし、全てを白紙に戻さねばなるまい

そう思っていた時だ

「ぐあっ!」

「朱儁殿…!」

朱儁に矢が肩に刺さり倒れた

俺は急いで彼女のもとに向かおうとするも雑魚ばかりが行く手を阻む

「そこをどけえっ!!」

双刃から二刀に持ちかえて擦じ伏せるがいかんせん数が多すぎる

くそっ!この調子では俺は皇甫嵩を救う以前に目の前の朱儁すら救えていないではないか!

「朱儁將軍!その首級もらい受ける!」

「ちいつ!」

振り下ろされる剣を防ぎ蹴り飛ばした朱儁は何とか片手で槍を振るう

しかし、倒した雑魚の先に弓を構えた黄巾賊が

「逃げろおっ!朱儁!!」

「くっ!」

放たれた矢は真っ直ぐと

あの老将を貫いた

「な、じ、ジジイ……」

「どつ、やら……間に合った……ようじゃの……鉄羽殿……朱儁を……たの……」  
「……」

力があるくせに手が届かない……

いや、俺は自分の力を封じた状態でも救えるとたかをくくっていた  
のでは？

俺は自らの慢心を恥じた

ならば出し惜しみをする必要などなし

あの老将は朱儁とどんな関係があったのかは知らない

だが、忠を尽くして、命を懸けてまで守りたい者なのであるのだろう

その老将は俺にたくした

守るには理由は十分

もう力を抑えることはやめよう

かつての俺に戻るのだ

ただそれだけの事

「貴様らあ…皆殺しだあつ！！」

全身から一度封じた赤黒い焰が噴き出した

諸刃の刃、神々廻の炎（前書き）

連投7話です

## 諸刃の刃、神々廻の炎

SIDE 茜

「はあっ!!--!」

斧を薙ぐように振り払い、黄巾賊を蹴散らす

いつまでこうしていればいいのだろうか

この戦いでたくさん斬ったが、いまだに戦いが終わる兆しが見えない  
それにあのお爺さんも見つからずに、事態は悪化していく

142

「徐晃つち! 限界や! 一度後退させるで!」

「くっ…わかりました 全軍、後退してくださいっ!」

こちらも被害は少なくない

これ以上は全滅しかねない

そんなときだった

「貴様らあ…皆殺しだあつ!?!」

「な、なんや!?!」

「社様!?!」

突如、戦場の一角から炎が上がる

いや、あれは炎なのか?

赤く黒い炎なんて見たことが無い

しかもそれは社様の体から燃え上がっている

一体どうなっているんだ

社様は平気なのだろうか?

そして社様が霞んだかと思うと

賊が次々に血飛沫を上げていった

S I D E 社

力が全身を駆け巡る

もう一族再興の時以来、使うことは無いと思っていたがこの時代は使わずにして事を成せる程甘くないようだ

紫芝一族、いや神々廻一門が扱う気功術、神々廻の炎

俺はある欠陥と才が無かったから修めきる事は出来なかったが、纏うことで全身の限界を超えることが出来る

今の俺を誰も殺すことは出来ない

時間切れまで存分にその命を散らせ黄巾賊よ

踏み込み、すれ違うものに一太刀浴びせる

それだけで爆ぜるように血を噴き出していく

手始めに、朱雋の回りに群がる賊から血祭りにしたてあげた

「よ、妖術使い!？」

「に、人間じゃねえ!」

「茜!聞こえているなら、朱雋殿達を下がらせろ!この先は俺が殿を務める!」

「は、はい!」

「来い!雑魚共!暴力とはどういうものか俺が教えてやる!」

俺が叫び、一步前に出ると賊は俺を恐れたのか後ずさり始めた

不義を散々行っておいて命の危機が迫るとこれだ

あまりにも無様だ

「おらどけ!へん!そんなはったりが俺に通用すると思うなよ!」

賊の中を割ってでるように大剣を持った黄巾賊が現れる

それなりに血を浴びておりこちらの軍を相当斬ったのが伺える

「俺様の名は何儀！この部隊の将だ！てめえはさっきから官軍に混ざっている鎧共の将だな？」

「そつだと言ったら？」

「あいつらが一番邪魔なんぞでな！先に始末してやることにしたんだよー！」

何儀は剣を俺に叩き潰すように振り下ろしてきた

それを長刀と小太刀を交差するように防ぐ

「このまま真っ二つにしてやるぜえー！」

「馬鹿め」

「あ？」

交差した剣を振り抜く

大剣は半ばから切断されその一撃を出すことは叶わなくなった

「なにい！？」

咄嗟に後退しようとする何儀

判断力は他のものよりはるがあるようだが

「所詮はその程度か！」

「くっ！」

何儀は切れた大剣を盾にする

それを見て俺は長刀を大剣ごと何儀を真っ二つにしてやった

「すまん　俺が真っ二つにしてやったようだ」

「う、うわあああっ！何儀様がやられたああっ！！！」

恐慌状態に陥り始めた黄巾賊は逃亡を開始し始めた

「ぐっ…少し、出力を下げるか…」

このまま後退が終わるまで斬り尽くしてしまいたいが、久々に気を

解放したせいで早速副作用が出始める

この体から吹き出るのは神々廻の炎

神々廻の炎は己の生命力を削り、気の力を高める気功術だ

本来なら生命力のほんのわずかな量だけしか削れないのだが、俺は武に才があつたが一族の中では炎が強すぎて他の人物より生命力を極端に削ると言う欠陥持ちの体だった

よっぽどの事がなければ命の危機に陥らないはずの神々廻の炎は俺に対しては諸刃の剣と言える

この体は満足に使うことも修めることも出来なかったが、発火より純粹に力を極限まで高めたおかげで一族では誰も炎を纏った俺の一撃を防ぐことは出来ない

しかし、流石に錆び付いていたようで目眩と強烈な嘔吐感が俺を苦しめる

「俺は…まだ倒れん…」

深呼吸をして二刀を構える

逃げ出すものがいようとここは戦場、逆に討ち取らんと迫る者もいる

ならば死力を尽くし、相手をするまで

もう一度、気を使おうとしたときだった

風が、強くなり始める

「来たか……！この風を待っていた！皇甫嵩殿、出番だ！」

俺は気を解放して地面に長刀を走らせる

爆発のような土埃を上げて黄巾賊の視界を奪うと俺は急いで後退した

暫く走り続け、離れると勢い付いた黄巾賊は進軍を再開し始める

俺達は確かに今この瞬間は敗走した

だが、それはこの為の敗走

ある程度まで進軍した黄巾賊は突如上がった火に包まれた

阿鼻叫喚をあげる様は地獄絵図に等しい

背後を見ると砦の門は開き、皇甫嵩の本隊が出陣する

「これが、不義を…働いたお前達、への報いだ…」

普段はさほど感じない疲労は気を使った影響で立つのも困難にさせる

小太刀を取り落とし、長刀を地面にさし杖がわりにさせる

まったく…これは気の使い方をもう一度鍛え直すしかないな

俺はゆっくりと前に倒れ

「社様！」

「鉄羽殿！」

地面に倒れるはずの体は両側からそれぞれ茜と皇甫嵩に腕を掴まれ、  
支えられる

「社様…さっきのは何だったのか教えてもらいますからね？」

「こんなになるまで戦わせてしまったのは私の力不足だ…すまなかつた…だから今は休んでほしい」

「皇甫嵩殿は謝るな…だが、流石に…今は退く」

小太刀を拾い上げて長刀と共に血を払い、鞘に戻して自軍に戻っていった

この戦いは、俺達の予想以上の奮戦の後に火計を浴びせられたお陰で黄巾賊の侵攻部隊は殆どが壊滅

率いていた黄巾賊側の将、波才は敗走し、黄邵、張曼成、何曼の三人は張遼と朱儁に討たれたことによって勝利を勝ち取った

俺はというと気のダメージを抑えて、砦にある天幕に来ていた

「失礼する」

「おう…鉄羽か…」

天幕には、朱儁と彼女を庇った老将が寝台に横たわっていた

「おお、鉄羽殿…無様な真似を、さら、して…申し訳…ない…ふふ…老いると…思う、よ、うに…体が、動かん…ろくに働けん…か

ったのが、心、残り…じゃのう…」

「いや、貴方は最期まで戦い抜いた。俺では手を伸ばしても届かなかった朱儁殿をその身を呈して守った貴方はもつと誇っていいはず」

「ごぶっ…げほっ…その、朱儁…なんじゃが…あの、ような、性格じゃから…皇甫嵩將軍、のように…敵が多、い…お主、は、皇甫嵩、將軍から…義に厚い、男と、聞く…」

老将は今すぐにも息を引き取りそうだと云うのに最後の力を振り絞り、俺の鎧にしがみつくように懇願した

「後生の頼みじゃ…！どうか…どうか朱儁の…朱儁の味方でいてくれ…！」

その必死の願いは、俺が皇甫嵩を救おうとしているのと同じなのだならば俺は彼の想いと意思を汲むのみ

「分かった…貴方のその願い、この身が朽ちるまで味方であることここに誓おう」

「そうか…ああ、最期に…よい男、に…会えて…良かった…」

老将は心の底から安心したのだろう

力を失った老将の腕は寝台の上に落ちていった

「逝ったかジジイ…」

朱雋は老将の側に歩んでくると静かに彼に布を被せた

「ジジイは、私に将としての基礎を叩き込んでくれた…礼を返しきる前に逝っちまったが…」

語る彼女の目はただ悲しみには囚われていなかった

むしろ以前より輝いて見える

「礼の返し用はいくらでもあるし、今はこの戦を終わらせる。その後、ジジイを丁寧に埋葬するさ」

「朱雋殿は強いのだな」

「ジジイに色々鍛えられたおかげさ。お前もさつき無理したみただから今のうちに休んどけよ？俺は兵の様子を見に行ってくるから」

朱雋が、天幕の外に走っていく

彼女もまたこの理不尽が横行する朝廷に負けないようにしてあげねばなるまい

三國の英雄達は、心強い武将達や軍師が居たからこそ名を轟かし、戦い抜けることが出来たのだ

だが、皇甫嵩や朱儁は朝廷に仕える身

腐敗した朝廷に振り回されるのは見てられない

皇甫嵩以外にもまた守るべき者が出来てしまったが、彼女らに振りかかる火の粉は俺が全て振り払おう

「ぐ、あつ…、があ…！」

体に激痛が走る

額から汗が滲み出てるのが分かる

天幕から出た俺は自軍の陣地に戻り、俺の天幕に逃げるように入る  
兜を寝台に脱ぎ捨て、外套を寝台にかけて俺は汗を拭い、体の気の流れを整えようとする

「ぎ……あああ……が、は……」

その場で血へどを吐いて寝台に寄り掛かった

頭のこめかみの血管が波打つ音が聞こえる

「ううっ…がぼっ…こぼっ…ぐうっ…ふう…ふう…」

神々廻の炎はどうやら内臓まで傷付けてしまったようだ…

中々吐血が止まらない

暫く気を回し続けて治療力を促進し続けなければ

ここまで自分を追い詰めてしまったのは稀だ

これからは神々廻の炎の使い方を見直して自分の命を焼き付くすこととの無いようにしなければ…

「社様、董卓様と賈馱様が訪問されましたのでお会いしていただけないでしょうか」

「！ま、待て…茜っ…天幕には入れるっ…がふっ…げほっ…ぐ、あぁあっ…」

「社様！？一体どうされたんですか…！」

「なん…でも、ないっ…！…はあはあ…ううっ」

「社様入ります！」

薄暗い天幕に日が入り、茜が入ってくる

血に塗れた俺の鎧を見て彼女は慌てて俺に駆け寄った

「社様！何ですかこの血は！まさか傷を」

「はあ…はあ…大丈夫だ…傷なんか負っていない…少しだけ気の使い方を誤っただけだ…」

「使い方を誤った…？そんなっ…こんなになる程の誤った使い方があるわけありません！あの時の炎が原因なのですね！？」

「…ああ、神々廻の、炎は…命を燃やし…気を高める…俺は…どういうわけか…一族の、中でも異常に…命を削る体質なのだ…だからこれは、俺が下手を打っただけ…気に病む必要はない…！」

力を振り絞り、寝台に何とか腰かける

足も腕も動かしくなくなっている

やはり、内臓だけでなく筋肉をも痛めたようだ…

先ずは足と内臓だけでも早く治そうとすると茜は何を思ったのか、俺の頭を抱き締めた

「そんなに…辛い思いをして…気に病むなんて無理ですよ…」

「…すまん…」

顔をあげようとしたときに滴が落ちてきた

それは茜の涙だった

暫くの間、力を使うなどが、もつと体を大事にしてくださいとか、皆を頼ってくださいとか色々と言われ続けた

特に、神々廻の炎が使われないように自分達が頑張っで見せると

彼女はこんなにも俺を想っているのか…

「今は済まないが…董卓殿らには一度お引き取り願ってもらってくれ…今は、意識を保つのもつらい…当分の指揮はお前がとってくれ…」

「御意…今はゆっくり休まれて下さい…」

茜が離れた後に寝台に横になる

このあとの追討作戦までにはこの傷は出来る限り治っていればいいな  
そう思い、一度俺は瞼を閉じた

## S I D E 茜

社様は目を閉じるとそのまま静かに寝息をたて始めた

私は社様の頭を撫で、近くにあつた布で汗を拭った

死人のような血の気の無い顔を見ると自分達の力の無さが彼をここ  
までにしてしまったのではないかと思ってしまう

後退する自分達に変わって殿を務め、さらに相手の將を逆に討ち取る

そんなの並大抵の事ではないはずだ

加えて他の方達より前線に出て他の兵の被害が少なくなるように倒  
していったという

彼は一族の再興の時もこうやって戦い抜いたのでしょうか？

ならばこれ以上、彼があのかを使わないようにしてあげるべきだ

以前話された力の話を思い出す

「私達も極限まで力を高めれば負担は減る…ならば私たちの力はこれからは貴方を守り支える力を極めましょう…貴方の敵は私達が葬りましょう…この不義が多すぎる世の中で彼を支えるには…：…：貴方の教えに生きる国を作りあげる…その国という大きな力で支え上げて見せます…」

乱世という泥沼に片足を突っ込んでしまった私達には相応の力が必要

ならば少し、個人的に董卓様と良好な関係を築き上げましょうか

思えば社様は誰かの味方になりこそすれ社様の味方は少ない

社様の味方も増やさねばいずれあの力に頼りその身を何度も焼くつもりなのが目に見えている

そんなことは私が絶対にさせません

董卓様の優しさを利用するような考えだが、恐らく今回の件で少なくとも社様はあの役人の部下の目に止まったはず

ここから先は社様は否応なしに敵が増えていくことになる

その時に董卓様と私が個人的な繋がりを持ち、その繋がりで支援し

ていただけるようにする

ただ、賈馮様は董卓様の軍師

利用するような真似をするのを許さないかも知れない…きっと彼女の説得が一番骨が折れそうだ

それでも私はやるんだ

社様の為にも

私は外に待たしている董卓様と賈馮様に会いに行った

S I D E 社

「…」

おぼろ気な思考を何とか纏める

何とか体を起こして状況の整理を務めた

「…ごほっ…そうだ…確か、治癒のために眠ったんだっただな」

からだの中の気を活性化させたままだったからすっかり忘れていた

見渡すと枕元に桶に塗れた布が入っていた

吐血し、汚した鎧も綺麗になっているところから茜に磨かれたのだらう

彼女には心配をかけさせたな…

とにかく、どれだけの時間がたったのか知りたい

外套を纏い、二刀を腰に差して近くに置いてある水を飲み干すと兜を被りなおして天幕を出た

「お館様！？お体は大丈夫なのですか！？」

「大丈夫だ、まだ戦は終わっていないだろう？部下に任せきりにはしたくない…ところで俺が眠ってから戦はどうなった？」

「は、まず皇甫高將軍、朱雋將軍は敗走した波才の軍勢の追撃を開

始、さらに別の場所で黄巾賊の本隊を滅ぼした陳留の刺史、曹操が援軍としてこの追撃戦に参加し黄巾賊の波才を討ち取りました

その後、敵の兵糧を溜め込まれている糜城を現在包囲されています

落城も目前かと　また、董卓軍の援軍、呂布將軍が三万の黄巾賊を滅ぼし合流、この砦に守衛として駐屯しています」

「そうか…茜はどうした？」

「徐晃隊長は現在、亡くなられた將軍の兵をまとめ上げて朱儁將軍の指揮下の元に従軍しています」

ふむ、俺が眠っている間は相当事態は進んでいるようだ

「鎧兵団は今どれだけ残っている？」

「九百ほどです」

「随分逝ってしまったか…」

「自分達はお館様に進んでついでにきたのです　命を落とした同胞達を想ってくれるのは嬉しいですが、あまり自分を責めないで下さい」

「そうだな…悲しむのは後にしよう…今は、皆の帰りを待つとしようか」

茜には心配を掛けさせて俺の代わりに出陣してくれたのだ

それに率いているのはあの老将の兵か

彼らをこの戦が終わった後、どうするのか朱雋と相談する必要があるな

この戦いが終われば、主力を討たれ、兵糧を失った黄巾党は次第に減っていくだろう

まさか曹操が既に本隊を滅ぼしているとは思わなかったが、やはり名を大きく残した英雄はその功績は大きいということか

何より今この砦に呂布がいる

その武勇は既に董卓の元で頭角を現していたか

この戦いが終わった後に曹操と呂布、二人がどのような人物か人目見ておくのでしょうか

今はただ皆の帰りを待つとしよう



## 諸刃の刃、神々廻の炎（後書き）

最新話お待たせしました

最近風邪をひいては寝込むことが多かった分、何度も修正するはめになりました

後、気とか使ってるんじゃないやねえよ！どうせ最強なんだろう！？と少なからず思ってる方が少なからずいると思います

先に言っておきます

彼は一族最強であって、この話で最強には絶対になれません

まず、呂布には絶対に勝てません

武将一人や二人ならともかく、リンチされると死ねます

瞬間的に呂布にギリギリ届くか届かない程度です

そして、社君はこの力のせいで戦線離脱をしょっちゅう起こす可能

性が高いです

後は、この2話を通して社、茜がそれぞれ自分から国作っちゃえと危ないことを考え始めました

この先、群雄割拠の時代に入るのに宙ぶらりんなままではオーホッホッホとかにあっさり滅ぼされるのでしっかりと己の道を決めさせました

こんなんですかね

次話は紫芝が生んだ殺人マツシーンと霸王様が出会ったり、飛將軍を撫で撫でするんじゃないかと

ちなみに黄巾の乱そのものは終わりますが、社達の中の黄巾の乱はまだ終わりません…

邂逅、帰還、…うごめく悪意（前書き）

八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千  
八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千八千

8話アツ！

お待ちせしました8話でございます

ちよつと難産でしたが…お楽しみ下さい

邂逅、帰還、…うごめく悪意

SIDE社

天幕にて二刀の手入れをしていると一人の兵が入ってきた

「お館様ご報告します 先程皇甫嵩將軍の伝令が到着、黄巾賊を制圧されたし、まもなく全軍帰還することです」

「分かった…このあと、帰還する兵は疲弊しているはずだ 炊き出しの準備などをして労ってやってくれ」

「はっ！それでは私はこれにて」

これで黄巾の乱は終息に向かう

民達の不安は一時的に収まるだろう

しかし、この乱があったことで一部の者は朝廷への不信感から不満を爆発させることにもなる

だからこそその英雄達の台頭なのだな

俺も今回のこの軍の解散前に見ておきたいものだ

とにかく今は、この戦いの勝利を喜ぼうか

俺も炊き出しを手伝いに行くでしょう

天幕を出て、自軍の陣地を歩いていく

そんな中、赤い髪の少女が炊き出しの様子をじっと見ているのに気付いた

「…」

「どうした？炊き出しの様子を見て」

俺は近付いて話かける

声に気付いた少女はこちらに振り向いた後に炊き出しの方を指差す

「恋も、食べていい？」

恋…というのは真名なのだろう

迂闊にも呼びそうになりながらも俺は首を横に振る

「悪いが、この炊き出しは皇甫青殿らの軍の為のもの…食べさせる

「ことは出来ん」

「ん…」

しゅん、と目に見えて落ち込んでしまった少女は何処かに歩いていこうとする

ふむ、何か悪いことをしてしまったような気分になってしまっな

俺は彼女の肩を掴んで立ち止まらせる

「…なに？」

「そこで少し待っていてくれ？すぐに戻る」

「？」

俺は一度自分の天幕に引き返して俺が食べるはずの肉まんを持ってさっきの少女のもとにやって来た

「これだけしかやれないが食べるといい」

「ん…ありがとう」

「恋殿おおお！どこに行ってしまったのですかああっ！」

肉まんを受け取り食べ始めるときに何やら遠くに小さな女の子が彼女の真名を呼びながら走り回っているのが見えた

「そのの！君が探しているのは彼女ではないか？」

「おおっ！そうなのです！探しましたぞ恋殿！」

「…ちんきゅ」

ちんきゅ…？

まさか、陳宮のことか？

こんな幼い容姿までの子が名のある人物だとは…董卓、賈馮の時といい、つくづく訳のわからない時代に来たものだ

8年の月日でも驚くことはまだ多い

…ん？陳宮？

じゃあこの肉まんを食べてる少女はもしや

「つかぬことを聞くが、君は黄巾賊三万を相手取った呂布殿で間違いないか？」

「ん」

「おおっ！恋殿のご活躍がもう知れ渡ったのですか！」

…いい意味でも悪い意味でもだがな

悪い意味は無論役立たずの高官共のこと

それにしてもこの二人はいくらなんでも純粹過ぎやしないだろうか？

その分董卓のところにいるのだろうか

そんなことを考えると誰かの腹の虫がなる

音の出所は顔を真っ赤にさせた陳宮だった

「こ、これは別に！ねねは腹など空いて無いのです！」

「それでも食べるといい」

迷わず自分の分の肉まんを渡す

「し、しかし、これは」

「俺のことはいいんだ　君が呂布を支え続けるのだから万全は期しておくものだぞ？」

「う…あ、後で返せと言われても返さないですぞ?」

「言わないさ、それはもう君のものだ」

やや、遠慮しがちだったが頬張り始める

余程腹が空いていたと見える

二人が、特に呂布の食べている様にどこか癒しを感じていると砦の門が開く音が聞こえた

どうやら到着したようだな

「俺は皇甫嵩殿達を出迎えに行く、ここも兵で溢れかえるだろうから自分の陣に戻るといい」

「分かったのです　恋殿戻りませぬ」

「ん」

呂布と陳宮を見送り、砦の門に向かう中あることを考える

慈愛の董卓と純粋な呂布と陳宮

どうしても史実の最期を迎えることは無いはず

そもそも悪逆非道を行えるはずの無い董卓が悪政を敷くはずもない

ここまで人が違えば、反董卓連合が起こるとは思えん

…だが、史実通りの流れは無くとも黄巾の乱は起こった

記憶を辿れば、朝廷に潜り込んだ黄巾党幹部が部下に密告され凄惨な最期を迎えたことにより計画が破綻

首領の張角が計画を前倒しにしたことにより始まったはず…

しかし、その朝廷に潜り込んでいる筈のその人物の名は一度も聞かず、乱も気付いたら始まっていた

…流れは違えど乱が起きたことから反董卓連合そのものも起こるの  
だろうか？

「ふっ…考えすぎか…俺らしくもない」

口に出して言うってみてもどこか嫌な予感もする

俺は、それを振り払うように門に急いだ

門に着くと真つ先に茜を見付けた

「社様！お体は平気なのですか！？」

「ああ、あまり無理をしなければ数日で完治する　それよりも俺の不在の中、よく頑張ったな」

「は、お褒めの言葉、ありがたき幸せ」

「そんな堅苦しくするな…それで、あの老将の兵を率いたそうだが…」

「それは朱儁様の命令がありました…」

「おおい！鉄羽あ！」

茜の後ろの兵達を見ていると兵の合間を縫って朱儁と皇甫嵩が現れた

二人とも泥にまみれながら戦ったところから相当激戦だったか

「鉄羽殿！？倒れたとお聞きしたが出歩いて大丈夫なのか！？」

「茜にも言ったが数日すれば完治する　俺はそこまでやわではな  
い」

「よかつたじゃねえーか燦、想い人が無事でよ？」

「き、綺羅！」

「朱雋殿、あまり皇甫嵩殿を苛めなさるな」

「分かつてるよ　それで、徐晃と二人でなに話してんだ？」

「茜が率いたこの兵の事なんだが、彼らはこの先どうすればいい？」

「ん？ああ、こいつらか…こいつらは全部俺が引き取るよ　ただ、  
一部の兵はお前に着いていきたいってやつもいるんだ」

「俺にか？何故だ」

「なんでも、お前の戦いぶりに憧れを抱いたやつが居たみたいだな  
ほら、あの変な色の炎」

「あれか…あれは俺達神々廻一門の人間にしか使えんのだがな」

「まあいいじゃねえか？お前んとこの兵は元々少ねえんだからよ」

茜を見ても引き入れることに同意しているようだ

兵の減った今では村の防衛力にも不安が残る

ならば彼らを引き入れるとしようか

「綺羅、そろそろ行くこうか」

「あ？はあ…嫌なんだがなあ…それじゃ、俺達は事後処理みたいなもんがあるからじゃあな二人とも」

皇甫嵩、朱儁の二人を見送り俺達も自陣に戻っていった

そつえばやるべきことがあるな

兵を何人か呼んである命令を下しておいた

これだけは必ずしておきたい

「何を命令したのですか？」

「今回の戦で出た死者達全てを村に連れ帰る」

「全てって…出来るんですか？そんなこと」

「今回の行軍で兵糧を運んだ馬車に空きがあるはずだ　それを使えば何とか運べるだろう」

「…分かりました　新参者の兵にも手伝って貰いましょう」

皆で自陣の退去の準備を始めていく

次々と運ばれる死者にこないだまで同じ釜の飯を食ってきたという  
事実を思い出すと涙が流れた

そして、個人的に頼んだことも兵が叶えてくれた

それは目の前の何頭もの馬の遺体

その中には俺が今まで乗っていた愛馬もいる

「流石にこの子達までは…」

「…ここで焼いて灰にし、持ち帰る　軍馬とはいえ、生まれ育つ  
たあの村に埋葬してやるべきだろう」

「…分かりました準備させます」

「…いや、これは俺もやろう」

この軍馬達も共に戦場を駆けた俺達の仲間なのだ

兵達同様、手厚く葬ってやりたい

戦後処理を終え、一段落着いた時に朱儁が訪れた

どうやら俺に用があるらしい

「護衛もつけずにどうしたのだ朱儁殿」

「正義も大義も無い木偶の坊とは顔を会わせたくねーよ」

「…怠けたということか」

「そついうこつた」

溜め息をついているとこちらをじっと見ているのに気付いた

何か言いたいことがあるようで少し考えた後に口を開く

「…燦…皇甫嵩のやつから聞いたんだが、お前は不義を許さずって  
教えに生きてるんだよな？」

確かに、それだけは無くさぬように俺は今日まで生きてきた…今ではこの義勇軍の掟のようなものにまでなっている

「そついう生き方してきたお前に聞いてえ…鉄羽にとって、正義ってなんだと思う？」

正義か…そうだな…こんな生き方をすると俺はいろんなものを見てきたわけだが

「俺なんぞではいい答えは出ないかもしれんぞ？」

「構わねえよ」

「そうか…じゃあ遠慮なく言わせてもらうが、俺は正義は皆、同時に悪であると考えている」

「同時に悪？」

「正義は自分の価値観や道理で勝手に悪を決めて、否定する…正義は悪がなければ成立しないものだ…だから価値観が違えば互いを悪と呼び、己こそ正義と信じるものが溢れる…つまるところ、見方を変えれば世界は正義に満ち、悪に溢れているのだ とはいえ時に行き過ぎた正義は狂気にすら転じることもある…だから俺達は正義を語るよりは自分達の価値観で不義を定義して対立するのさ…俺達は時として正義を成すのではなく悪を成すのだからな」

「なんか、自分達の都合のいい言い訳にも聞こえてきたよ…鉄羽の教え…」

「そうだな…俺の遠い先祖は言い訳したくないのかもしいないな…だから正義を打ち立てたのなら俺は否定されようが貫くものなのではないかと思う」

「貫く…か…」

何か考えるそぶりをした後にうんうん頷く朱儁

こちらを見た朱儁は驚くべき事を言ってきた

「鉄羽、俺はお前の義勇軍に降る」

「…な、に？」

「だからお前んとこの義勇軍に」

「ま、待ってくれ朱儁殿…それでは官軍をやめるといふことになるぞ？」

「いいんだよ別に  自分の正義が貫けりゃそれでいいんだ  腐りきった軍に無理して居る必要なんて無いしな」

「しかし、兵はそうもいかないのでは？」

「兵なら問題ねえ  燦のやつのように監視されてるわけでもないし、皆ついていける」

そう言う朱儁の目を見て彼女は本気だと分かった

彼女の意思を尊重するとしよう

「分かった…だが、いきなり兵を引き連れるにしてもそちらも戦後の措置などもあるだろう　それらを済ました上で村に来て欲しい」

「分かってるよ　あ、折角なんだし俺の真名、綺羅を受け取ってくれ」

「確かに受け取った綺羅　俺の真名は社だ　後日、我らの村でまた会おう」

まさか朱儁が義勇軍に降るとは…

史実通りにいかないのは俺という異物があるからなのだろうか？

立ち去る朱儁を見届けながらつくづくそんなことを思う

さて、そろそろ準備も整ったところだ

茜を呼びつけて帰るとしようか…

「社様を悪く言つなあっ！」

茜の怒号がいきなり響く

次いで鳴り響く金属音

慌て俺は現場にいくとそこには大剣を持った黒髪の女性と茜が切り結んでいた

S I D E 茜

私が村に帰る準備を整えていると部下の一人が報告にやって来た

「どうしましたか？」

「それが、曹操様にご訪問されまして」

「はあ、そうですね…私がいきますので貴方も彼らの手伝いを」

「御意」

曹操様か…あの人は今回の戦いで援軍として現れた

その時に彼女の軍の采配たるや筆舌し難いほどの精練されていて見とれてしまいました

率いる将も一騎当千の働きを示し、圧倒していく

社様と出会っていないければ、彼女の覇気に私は惹かれ仕えていたに違いない

それだけ私の中に鮮烈なまでに印象深く残ったのだ

部下に聞いた通りの場所に彼女はいた

そばには大剣を振るっていた女性と弓を使っていた女性が立っている

「これは、曹操様：我々の陣に如何な御用でございますでしょうか？」

「私はこのの義勇軍に所属している徐晃という子に会いに来たのよ」

…：そういえば私も兜で顔がわからないはず

今は兜を脱いで表情をさらしているので誰が誰かは分からないだろう

「私はその徐晃でございます曹操様」

「あら？貴女が？」

「普段は兜を被るので分からないかも知れませぬが…」

「…いいえ、そのたたずまいだけで十分よ」

…まさかたたずまいだけで誰が誰か分かるのか？

というより私が戦っている姿をずっと見られていたのでしょうか？

なんだかこの人少し怖くなってきた…

そんなことを考えていたら曹操様はとんでもないことを言い出す

「貴女…義勇軍に留まらせて置くには勿体ない才ね…どう？私のもとに来ないかしら？」

「は？」

「自軍の兵でないのにしつかりとした統率と指揮をし、広く戦場を見渡して有利に戦いを進める……加えて貴女の武、戦斧を舞うように振るう姿は素晴らしかったわ」

やっぱり物凄く見られてました、怖いです

それに舞うような戦い方は元々は社様の戦い方を真似たもの

まあ、社様に見られたときはそれはもう苛烈な指導をされたが

「お褒めいただき、恐縮にします…しかし、申し訳ございません…私は社様の斧にございます、社様以外の方には曹操様といえど斧を預けることは出来ませぬ」

「何故かしら？私のところにくれば貴女の才能をもっと伸ばすことさえできるわよ？」

「才能などあるうとなかろうと私は社様と共にあり続けると誓ったのです。ご用はお誘いだけでしたらお引き取り願います。私は帰還の準備をしなければいけない身なので…」

そう言って持ち場に帰ろうとしたときだ

「待て貴様！聞けば最後の戦いの時に貴様の主は戦場に現れなかったぞうだな！最初の戦いさえも敗走し、貴様にあとの事を押し付けた腰抜けに仕えてなになるのだ！」

黒髪の女性が、突っかかる

だが、お前に何がわかる？

敗走した私たちを逃がすために、火計を成功させる為に自らを省みずに戦った社様を…腰抜けだと…？

彼は腰抜けなんかじゃない…

社様は私達を想い、誰よりも前に出て、傷付きながら戦っている…

そんな社様を…！

「社様を悪く言うなあっ！」

叫び、側にあつた兵達の予備用の戟を手に取り黒髪の女性に斬りかかる

黒髪の女性も突然のことに驚いていたが、大剣を引き抜き一撃を受け止めた

「なにも知らないくせに勝手な事を…！」

「勝手も何も、事実ではないか！義勇軍を率いておりながら、何故自分だけが本陣に引つ込む！お前に兵を与えずに戦場に行かせるよ  
うな奴に忠義を尽くす必要など無いだろう！？」

一度武器を弾いて距離をとる

戟を構えて私は突貫した

「貴様……！社様に謝れえっ！」

「愚物に下げる頭なぞ無い！」

「っ！」

振り上げた大剣に戟は大きく弾かれ、刃が砕かれてしまった

「っのっ！」

直ぐにもう一本戟を取り、振りかぶる

「こうなれば無理矢理にでも華琳様のもとに連れ行けるように目を  
覚まさせてやる！」

「はあああっ……！」

大剣と戟が振られて当たろうとしたときだ

風を切る音と共に黒い鉄槍が互いの得物を弾き、地に叩きつけた

とてつもない衝撃に腕が外れそんな錯覚を覚える

相手もいきなりの事に驚いているようだ

「…戯け！双方退かないか！！」

目の前に黒い外套がはためいたかと思うと気づけば社様が立っていた

「社様…」

「誰だお前は！」

「紫芝鉄羽…この義勇軍の責任者だ　いかに曹操殿の御前といえど、勝手な私闘をするならば双方容赦せんぞ」

「…っ！はっ！」

「くっ…！」

表情は兜で見えずともその凄まじい怒気と威圧感に武器から手を離してしまっ

相手も無意識か、構えを解いていた

それを先程から黙って見ていた曹操様は頭を下げた

「私の部下が失礼したわ…ごめんなさい」

「それは俺の方だ、部下がそちらの家臣に斬りかかった事は事実、申し訳無かった…」

「か、華琳様…！」

「社様！」

社様と曹操様は互いに謝罪した

その事に頭の冷えた私は自分のしでかした事に後悔した

私も頭を下げる

「曹操様…貴女様の家臣に斬りかかった事、申し訳ございませんでした」

いざ冷静になれば自分がどれだけ軽率な真似をしたか

相手は正規軍、私の行動で社様の立場を悪くしかねない

社様の顔に泥を塗ってしまった事に顔をあげることも出来ない

「貴女は、悪くないわ　主を貶されて怒るのは当然の事、春蘭」

「…済まなかった」

このまま私はしばらく謝り通しだった

互いの非を認めてお咎め無し

そのあとに軽い雑談、どうやら社様の容態についてやら私の指揮についてやら話していたらしい

らしいというのも、自分の失態に私は茫然自失なままでいたから…

「茜…おい、茜」

「あ、はい…なんででしょうか」

「…さっきので気に病むことは無い　お前は確かに軽率だったが俺を思つての行動をとったのだ　自分を律することをこれから学ぶといい」

「社様…」

自分を律するか…これからは恐らくこのような場面が起こるかもしれない

この失敗を繰り返さないように、律することを出来るようにしまし  
よう

「さあ、俺達の遠征は終わった　村に帰るぞ」

「…はっ！」

私は歩き出した社様の背中追って歩き出した

村に帰って、両親に無事な姿を早く見せないと

S I D E 曹操

「紫芝鉄羽か…」

私は、帰り道に先程まで話していた男を思い出す  
全身を鎧で纏い、顔すらも見れない義勇軍の大将

表情がわからなかったこともあり、彼には得体の知れないなにかを感じる

何より春蘭や徐晃に向けられた威圧感人は人が出せるものなのか疑問ね

彼の義勇軍は活動範囲が狭いものの彼自身は私の治める町にまで知れ渡っている

その将は見たこともない漆黒の鎧に身を固め、怒りの形相を浮かべた異形の兜を被り、黒い翼のような外套をはためかせる

戦場に立てば鉄槍で次々に敵を串刺しにし、黒い二本の剣を振るえば竜巻のごとく

引き連れる軍団や戦いぶりに真つ赤に血塗れになることからの様相も相俟って、戦鬼と賊に恐れられている

一体どれだけの人物がこの目で推し量ろうとしたが、当の本人は負傷したのか部下に任せて最後の戦に参戦したなかった

代わりに配下の徐晃と言う優秀な人材を見付けたときは彼女が欲しくなっただわ

今のところ当面は、徐晃を引き入れたい

「そういえば秋蘭、貴女に聞いておきたいのだけれど」

「なんででしょうか華琳様」

「貴女の目から見て彼、紫芝鉄羽はどう写ったかしら？」

「そうですね…彼は何儀を真つ二つに斬ったというところと、あの槍の投擲から噂通りの武人だと思います 現状はそこそこの武将

しかし、将としては些か未熟な面こそあれ底が知れませんが  
敵対するのであればあれは非常に警戒すべきかと」

「そう、分かったわ ありがとう…春蘭、さっきから腕を押さえてどうしたのかしら？」

「い、いえ、なんでもありませんっ！」

「…春蘭」

「はいっ…実はさっき剣を弾かれたときの腕の痺れが残ってまして…」

あの飛来した槍、相当の力が込もっていたようね

医療兵を呼んで春蘭を見てもらいましょう

紫芝鉄羽、これから訪れるであろう乱世にどう立ち回るのか

それとも私に立ち塞がるのか…

これから先が楽しみね

S I D E  
o u t

紫芝鉄羽を含め、朱儁、董卓、曹操が砦を発った後

皇甫嵩軍も間もなく撤収する頃

ある1つの天幕に数人の男が集まっていた

「紫芝鉄羽め…朱儁を味方につけたか…」

「義勇軍の分際で、将を討つと言う功績を挙げている…」

「奴には目立った功績は少ないが、火計での立役者にして勝因を招いた者として名が広がるに違いない　どうする？」

「なに、気にせずとも奴が兵を率いて村から居なくなった時点で我らの勝利よ　皇甫嵩殿につきまとう青二才は討たれるのさ」

「それにしてもあの徐晃とやら、兜の下はよき女子だったな」

「運が良ければ手込めに出来そうだな」

「くくくつ…その時が楽しみだ…」

「ふふつ…我々もまた出世できるに違いない」

「その為にもあの方の策を続けるぞ」

「…全ては馬元義様のために…」

外に出た彼らは天幕を解体し何事もなかったかのうように軍に戻っていった

うちに抱える悪意を誰にも悟られることなく…

漆黒の鎧兵团に悪意が忍び寄る...

邂逅、帰還、…つごめく悪意（後書き）

あれ…

華琳とか春蘭とか秋蘭とかなんか難しいぞ…

もう少し見直さなきゃなあ

そんなわけで8話でした

いかがでしたでしょうか？

実のところ突然の高熱にあんあんうなされていたせいで休んだ講義とか課題どうしようとかすげえ焦ってたり…

ステイルボールラン終わっちゃったよおおっ！ジョジョリオンが気になるよおおっ！とか…

話のネタというかいろいろ探してたら8話を作るのが大分ゆっくりになっちまりました

それにしても話で少しずつ明かされてる主人公の経歴ですが、全部明かされるのは反董卓連合中になります

それともう一刀君出すことに決めました

ただし、サノブ式一刀君にされてるのではぼオリキャラですね

できる限り原作らしさは残そうと頑張りますが、こいつ誰？え？一刀？そんな馬鹿な…になります

簡単に言うと主人公と因縁を持たせ、主人公とは違うベクトルで壊れた考えのやや硬派な女好きといったところですよ（ただし強さは普通）

所属は蜀になります

変にアンチではなく社君と一刀君の意思のぶつかり合いになると思っています

まさにダブルヒーロー？ダブルアンチ？

それを中心に反董卓連合を描こうかと

劉備？おっぱいは知らんとです

…空気になる恐れがあるのでまじで知らんとです

それにしてもこれハーレムってより一途な人になりそうな…

第一次社ヒロイン決定戦が始まりそうだ…

皇甫嵩が段々社の嫁に見えてきた

徐晃はどうも妹な…

ちなみサノブは周泰、明命みたいな小動物みたいなのがいいですな

こんな勢いで次話の執筆に勤しみに行ってまいります

なんかアンケートみたいな

ハーレムするしないは置いといて社君のヒロインは誰が似合っている？

1 徐晃

2 皇甫嵩

3 朱儁

4 原作キャラ（名前も入れてね）

間違っても、一刀とか何処かの漢女とか無しにしてください

…ふざけておまけで書くかもしれんが



最後の黄天、鉄の翼の空に牙を剥かん（前書き）

9話どうじゃします

超展開…

ぐああああああ

## 最後の黄天、鉄の翼の空に牙を剥かん

S I D E 社

「社様、お体の調子は大丈夫ですか？」

「ああ、村に着くまで後二日　その前までには全快だが…それにして心配しすぎだぞ茜」

砦を発つて4日

途中、黄巾賊の残党や山賊に襲われるも難なく撃退しながら村に向かって帰路についていた

目立った事もあまりなく、割りと穏やかな行進だ

ただ、俺が倒れたことを受けて皆が過保護になったのがここ最近の悩みだったりする

戦闘においても何をすることも茜や兵の皆が

「社様が出るまくもありません！直ぐに蹴散らしてまいります」

「お館様！私達が夕飯を食べさせてあげます！」

「お館様！徐晃隊長が行軍指揮を執るので馬車でお休みください！」

「お館様！」

「お館様！」

「「「お館様！」」」

むう、最近のお館様コールと茜の呼ぶ声がひっきりなしに聞き続けている

病み上がりといえ、そこまで手厚く労られては何処か落ち着かないな…

野営をしていたときに刀を振るって体を鈍らせないようにしたかったがまさか武器を隠され遠ざけられるとは

「俺はそこまで弱っているわけではないんだが…」

「社様は御自分では気付かれていないのですか？」

「ん？なにがだ？」

「はあ…これは重症ですね…」

何故ため息をつかれたかは全くわからん

俺が何かしてきたのか？

「社様、もう少しお体を労り下さい…この八年は村のために尽くしてくれたことに感謝しています　ですが、社様は他の兵達より多く鍛練をこなしては村の人と共にそのまま畑を耕す…」

ふむ、そういえばいつもの日常として過ごしていたからな

鍛練も畑仕事も全て俺の趣味のようなものなんだが…

「加えて、行商の方と交渉や義勇軍の調練、村起こし、山賊対策の外壁建造や新たな土地の開墾と家屋の建造…私を含めて村の者は社様の休まれている姿を見たところがございません…これを機に何日かなにもしない休みの日をお作りください！」

「休みの日と言われてもな…」

俺はワーカーホリックに映っているのだろうか？

先に言ったように畑仕事と自己鍛練は俺の趣味のようなもの

それをなくせと言われては俺は何をすればいいのだろうか？

実際、昔からこんなことを言われていたがそのときも何をすればいいか分からなかった

「休むことか…難しいな…」

「なんで難しいんですか…」

話を聞いていた他の兵も次々にため息をついていく

表情が見えずとも全員呆れているのがわかる

…なんでそうなるんだ

なんだか、茜達が絶対休日を作るぞ！とか怪しい日が定められよう  
としているのが聞こえるんだが

まあいいか、俺の為にしてくれているのだし、やめろとは言えん

そんな様子を見ながら馬車の中でこっそり気の鍛練を始める

また吐血するほど事態に陥らせないように体をならしておかねばな  
らない

あの戦いだって何処かで慢心していたのが原因

8年も気の鍛練をサボったツケが今になって来ただけの事

何気なく、手のひらに小さく炎を出す

赤と黒の混じる、一見禍々しく思えるこの気功術

今にして思えば俺の大きな失敗はこの力が絡んだり原因だったりすることが多いな

「今も昔も変わらん…そういえばあいつと喧嘩別れしたのもこれが原因か…」

思い出されるのは一人の後輩

自分の力に見合う訳もなくいろいろと首を突っ込んではいろんな人に怒られる

俺も何度も怒鳴ったがついぞそのくせは治らなかった

そのぶんがむしゃらに力をつけようとしては師匠に殺されそうになったり…

一方であいつの甘い考えが思わぬ功績を残したことにはいろいろと学ばされた事もある

炎を消して瞼を閉じれば喧嘩していた時の事はよく思い出せた

『なんでも力だけで押さえてはダメなんだよ先輩！ちゃんと自分の考えや想いを伝えれば先輩についていく人はいるんだ！』

『馬鹿な…今の紫芝でも恐れられているのに俺個人についてくるものなどいるものか！俺は復讐者でもあるんだぞ！？相容れるわけがない！』

『そんなことはない！俺が祖父と一緒に先輩の良さと力、願いを知らしめてきます！』

『ふざけるな！お前は神々廻の分家を甘く見すぎている！』

『じゃあ先輩だって甘く見ています！そんな自分を死に追いやりかねない力ばかりなんか極めても先輩は一人じゃないですか！一人で出来ることなんてたかが知れています！それに一人だけで分家を再興したって一人のままだってわからないんですか！？』

『お前に何がわかるかと言うんだ！お前は汚い、自分の手を汚さなくせに綺麗事ばかり並べる…！お前は並の偽善者じゃない、壊れているぞ！』

『先輩だって…！身も心も悲鳴をあげているのに無理矢理鬼になり続けてる…そんな異常な生き方は間違ってる…！』

「少しは直したつもりだが…俺はそれでもこんな生き方しか出来ないのだ…わかるだろう？………一刀」

S I D E ?

何か、懐かしい声が聞こえた気がした

思わず足を止めて空を見上げる

だけど、ただただ優しい風ばかりが流れるだけ

「ご主人様？いきなり足を止めて、どうしたの？」

「あ、いや、なんでもないよ桃香」

「早くいごうよ！皆が待ってるよ！」

「そうだな」

もう一度空を見上げるが、もう風は吹いていない

懐かしい声が一体誰のものかは分からない

でも、気のせいだろう

今は桃香達と一緒にこの世界を歩み続けるだけだ

誰もが笑顔でいられるいられるように

そして、誰かと一緒に笑い、笑顔を見ることが出来るように

この先も流れや細かい点は違えど反董卓連合が起こるはず

そのときまで、少しでも強くなる

「帰ったら愛紗に稽古でもつけてもらおうか」

遠くの皆の背中に向かって俺は走り出した

S I D E   o u t

とある城の中に忙しく部屋を一人の男が歩き回る

顎髭を撫でながらその表情には焦りが浮かんでいた

「くっ…他のやつらに任せてたらまさか本隊まで失うとは…これでは計画が台無しだ」

「どうなさいますか?」

「このままでは正体がバレてしまう　ならば目障りな奴を消して上が来る前に行方を眩ますしかない…暫くは今まで貯めた稼ぎに頼ることになるが、またやり直せばよい　よし、そろそろ奴も村に着く頃、戦と雲隠れの支度をしておけ」

「はっ」

男は部下に告げると鎧を着込む準備を始めた

元々楽に甘い汁を啜る手段をとることに長けていた男は今後の身の振り方を考える

男は今でこそ朝廷に仕える身だが、男にはもう一つの顔がある

そのもう一つの顔は今の生活を手に入れるために部下を連れて村や町を襲うことを繰り返していたこと

男は賊だったのだ

蓄えを貯めては朝廷の高官に献上することで取り入り、自らの保身を図る

気付けば逆に彼が高官達の地位を手に入れるまでに至った

同時期に賊としての自分の稼ぎが悪くなった

どうしたものかと考えていたときに自分の町に訪れたある三姉妹の言葉を聞いたときだ

大陸を手に入れる

そこで思い付く

最近はこの三姉妹を取り巻くように黄色い布を纏う賊が各地を騒がしている

その規模は官軍すら蹴散らすものに膨れ上がっていた

ならば彼らに加われれば己の力を増やし、さらに大きな町を襲うことが出来る

しかも自分は朝廷の高官

内部情報を駆使してやれば事を円滑にも進められる

そしてこの三姉妹を利用していけば本当に大陸をとれるのでは？

そこからの男は勢いづいた

一方で黄巾党を討伐してるように見せかけてこつそりと保護、解放しては情報を横流し

黄巾党内で自分に味方しない者や邪魔になった者、裏切ろうとした者は役人として真相を知らない手込めにした部下に討伐させてきた

こつすることによって黄巾党内で自らの勢力を強固にしてきたのだ

成功し、優越感に浸るも男はあることが不愉快だった

以前立ち寄った村で出会った一人の少年

自分の配下がその少年と文通をしていたことを知ったときは憤怒し、  
今まで以上にその配下を汚して関係を断ち切らせた

自分の所有物に手を出した少年を初めから嫌っていた男は彼を始末  
する算段を取り始める

それでも中々倒せないことに業を煮やした男は新たに稼ぐための本  
隊とは別の最大勢力を誇る軍を利用した計画に少年を加えて消そう  
とする

だが、少年に関わった事で徐々に歯車が噛み合わなくなり始めた

敗走する予定の今回の戦いで黄巾党側が徹底的に敗北したのだ

しかも運が悪いのか、本隊まで壊滅

事実上、黄巾党は崩壊していた

自分の企みが大きく歪み始める

そして今、男は己の素性が発覚する前に逃げることにした

しかし、逃げる前にいつもの企みと違う少年を消す計画は諦めきれ  
なかった

もう一つの手段を用いて今度こそ討つ

そんなことを考えながら鎧を着込んだ男、馬元義は役人として最後

のつとめを果たすという名目で軍を出陣させた

彼は途中、遠征から帰還したばかりの配下、皇甫嵩の軍を取り込み  
一路あるところに向かう

そのあるところとは紫芝社が守り抜いてきた村だった

悪意に満ちた最後の黄天は、蒼天から鉄の翼が羽ばたく空に予先を  
変えて迫っていた

S I D E 社

もうすぐ村に着くというとき、体も完治してようやく皆の過保護状  
態から解放された

僅かな時間とはいえ暇なことを苦に思うのは初めてだ

今度、久し振りに将棋でも指すか

そんなことを考えていると突然前方の部隊が慌ただしくなった

「一体何事だ？」

「少し様子を見て参ります」

茜が馬を走らせようとしたとき、兵の合間を縫って一人の鎧兵が運ばれてやって来る

その姿は鎧は血塗れ、至る部位に矢が刺さっているという痛々しい姿だった

これはただ事ではない

急いで兵の皆に指示を出して治療の準備をする

「ま、待ってください…この傷では俺は死にません…それよりも今は俺の治療よりも報告が…」

「報告？」

「はい…落ち着いて聞いてください…俺たちの……俺たちの村が焼かれました…」

一度俺は自分の耳を疑った

村が焼かれただと？

何故だ

一体何が起こった？

「な、んで…なんでですか!？」

「落ち着け茜、詳しく聞く必要があるようだな」

「村人に関しては全員無事です…ですが、予想外の数に部隊長は皆、村人達を守るために殿を務めて討ち死になされました…」

村にはもしものためにと避難経路とその為の隠れ家を用意しておいてある

村での戦いにまで発展したときに守りやすくすると混乱による乱戦を防ぐためだ

緊急時に対応し守りきって見せた部隊長達には感謝せねば

村人が無事ということに多少安堵した茜は冷静になったのか疑問を

眩いた

「しかし、村に攻めてくるなど一体どこの賊なのですか…」

「それが、違うんです…奴らは官軍でした」

「なんだと？どうして官軍が…」

そこまで言つて一人の役人の顔が浮かぶ

「奴らを率いていたのは太守様です…俺達に過剰な戦力と装備が黄巾賊との共謀、謀反の疑いありとして突然攻め立てられました…」

「あの役人め…！我々が靡かないことにたいする報復をしに来たということですか…！」

「ただ、一つ情報がございます」

他の兵に支えられながらも体を起こした兵はあることを伝えた

「奴らの兵に紛れて黄色の布を巻いた者がいたのを確かに見ました…太守様…いえ、あの馬元義率いる官軍のほぼ全てが黄巾賊に加担しています…」

「何ですかそれは…まさか朝廷の高官が賊だった…？」

そういうことが

ようやく納得がいった

村は太守などでなければ場所をあまり知られない隠れ里のようなもの  
山に囲まれているぶん、賊が迷いこまなければ平穩なはずのこの地  
に黄巾賊が困うように現れたのは太守に扮した馬元義の指示か

馬元義は史実で朝廷に入り込んだ黄巾賊

黄巾賊を呼ぶのは奴でなければ出来ない

史実通りではない、だが奴は実際に朝廷に入り込んでいた

恐らく途中から黄巾賊に加わったのだろう

黄巾賊の壊滅によつて後ろ楯を失い、捕らえられた者達から名が露  
見することを見越して村を襲ったか

皇甫嵩の軍を黄巾賊の軍勢と無理に戦わせたのは、何かしらの企み  
があつたかに違いない

何にせよ、奴は朝廷の役人であるならまだしも黄巾賊であるなら斬  
れる口実ができたというもの

「茜、悪いが全軍に戦の準備をしてほしい」

「わかりました…しかし、どうするんですか？」

「何がだ？」

「皇甫嵩將軍のことです馬元義は腐っても官軍…皇甫嵩將軍との激突は免れませんよ」

そう、一応馬元義の配下として彼女がいる

彼女を思えば対峙はしたくはない

だが…もう限界だ

今のままでは彼女の願いは決して叶わないのだから

「皇甫嵩殿には悪いが理想を否定してでも連れ出させて貰う 官軍なぞ知ったことか、俺に刃を向けるなら力を持って搦じ伏せるまでだ それが例え皇甫嵩殿を傷付けることでも」

「戦うことを選ぶんですね社様」

「圧倒的に不利だが、彼女を助ける機会は今しかない どのみち馬元義の奴と戦うのは避けられないこと、行くぞ…今日までに鍛えられた力を振るうときが今だ 全軍、馬元義に鉄槌を下すぞ！」

「「「応っ!!」」」

黄天が俺達の空を簡単に奪えると思うなよ

皇甫嵩を散々弄んだ貴様らが染める天など全て否定してくれる

**最後の黄天、鉄の翼の空に牙を剥かん（後書き）**

なんという超展開な…

この話を作ってる間、この調子で行ったら鎧兵団の行く末がとても心配になってきた…

最近、仮面ライダーとか、ネギまとか、なのはとか、いつか投稿しようとかまちまちま書いてます

特にネギまが一番先に投稿される予感

恋姫が何話か進んだときに投稿し始めるかと

また話からわかるように黄巾党編のラスボスは馬元義です

言っちゃ悪いけど、社の敵じゃないくらい弱いわけですが…一体どんな最期を遂げるのでしょうか

皇甫嵩はどうなってしまっやら

この黄巾党編はまだ数話続きます

終わった後に束の間の休息、反董卓連合編、そして神々廻編という謎の話に続いて行きます

社達鎧兵团はどうなっていくのか…

…少し体調の悪さとリアルの忙しさに更新がさらに不定期になりますがこれからも鎧兵团をよろしく願います

それでは次話までさようなら

煌めく光は鉄の翼に包まれる(前書き)

いい台詞だ、感動的だな

だが10話だ

煌めく光は鉄の翼に包まれる

SIDE社

村を見下ろせる森林の隠れ家

兵を控えて俺は兜の中から奴らを睨み付けていた

曇天の空の下、眼下の村は馬元義の兵に完全に占拠されている

せつかく立て直した村は火矢でも放ったのか幾つか焼け落ちてしまっている

畑も何もかも荒らされ、これからの戦いを考えるともうここで村を再興するのは叶わないかもしれない

「……………」

立ち並ぶ牙門旗の中に村の外を守るようにいる皇の字を見つけてしまおう

やはり彼女の軍もいるのだな…

まだ心のどこかでその事実を否定したかったのだろうか

彼女の軍もあわせて数は大体八千くらいといったところ

一部の奴らは俺の部下達の鎧を着てみたり、捕らえられたのかぼろ布に着替えさせられた女性兵を幾人か連れて家屋に行く兵も見られた

「ここまで踏みにじられて…黙って見ている事しか出来ないのでは  
ようか…」

「この策は俺が考えたんだ…俺を恨んでもいいのだぞ？」

「そんなことできませんよ…決断なされた社様が一番辛いはずですから」

茜が耐えるように強く柄を握り締める音に想い知らされるこのまま  
なら無い状況

関係無いものさえ巻き込む世界の在り方

そんな世界だと理解していたのに力を示せない己の無力

今俺は、自分の願いを見つげる前のように全てが憎かった

今は新たに参入した兵に使者と偽り、工作のために村に向かわせた

が…

奴らが緩みきつたところを火計で村ごと全てを焼き付くすという無茶もいい戦い方

手勢は参入した兵とあわせて二千五百だが前述の策の為、元々の鎧兵達で戦うことになっている

始めに捕らえられた捕虜を救出

直後特大の火計で焼き払い、参入した兵は直ぐに撤収

策の遂行中、俺は皇甫嵩に直接一騎討ちを仕掛けるつもりだ

彼女を説得する意味合いが強いができれば寝返らせて奴らを包囲したい

茜が策を成功させるまでが制限時間

それ以上はもう戦えない

兵の疲労や兵糧を考えて短期決戦になる

本来なら馬元義を真っ先に斬りたいところだが兵差を考えてそうもいかない

村を見下ろし続けてようやく合図の狼煙が上がり始める

「準備は整った！全軍生き残ることを考える！不義を働く奴らから同胞を救いだせ！行くぞおっ！！」

「っっっっっっっっっっ！！！！」

村に侵入するために俺が手勢を率いて皇甫嵩の軍を引き付けなければ後を追うように茜は俺の手勢を率いて貰うことにしよう

勝利条件は皇甫嵩の救出、馬元義の抹殺

劣勢の中、負けられない戦いが始まった

気づけば曇天はいつしか雷鳴を伴い始めていた

紫芝鉄羽が攻めてきた

いや、この地に帰ってきたと言うべきか

この村の者を見逃し、村人達と何処かに落ち延びて貰いたかった  
だが彼の性格を考えれば必ず攻めてくるのはわかっていたこと

「鉄羽殿に討たれるのだろうか…私は…」

私は朝廷を建て直したかったのにその願いは叶わなかった

それどころか彼の敵である不義の片棒を担いでいる

泥沼にはまりにいった時点で私は彼に斬られる運命だったに違いない  
腐りきった朝廷で青い考えしか掲げない私では初めから生き残れる  
はずがなかったのだから

ただ彼に引導を渡されるならそれでいいのかもしれない

思えばこんな私を最後まで応援してくれたのは綺羅を除けば鉄羽殿しか居なかったな

ああ、嫌な思い出ばかりだったのに彼と共に飲み明かしたあの夜を思い出す

あれだけは鮮明に思い出せる

それを思うと死にたくない、まだ生きたいと思う

何て浅ましい女だろうか

この身は穢れている

あの男に穢されて、踏みにじられて、弄ばされた

今この天幕に戻る前でさえ、部下の命を盾にされ抵抗できない私をあの男は愉悅に染まった表情を浮かべながら寝台に無理矢理押し倒し、欲を満たすべく強引に快楽を与えてきた

嫌なはずなのに、あのときに上げた嬌声に耳を塞ぎなくなる

地獄に等しい時間の間、自らの上げた声も何もかもが消えてなくなればいいと何度も思ったのに

それなのに

死にたくないと

生き恥をさらすより死んでしまいたいはずなのに

死ぬことがたまらなく怖くなった

彼の表情を声を思い出すから

結局私は彼のことか…

だけどあの男は私に彼を討てという



それでも部下の命がかかっているから

私はもう何がなんなのかわかっていないのか

気付けば己の得物を手に眼前に迫り来る漆黒の鎧兵達、その先頭で黒き双刃を振るう鬼を見据えていた

そして彼は私の前にたどり着く

全ての感情を隠し、怒りしか浮かべない鉄の表情に向かって口を開いた

「待っていた鉄羽殿……………さあ、どうか……………私を……………」

「  
… 殺してくれ」

S I D E 社

「どけええええっ!!」

次から次へと立ち塞がる兵を次々に薙ぎ倒していく

黄巾賊と違い、官軍である分兵の練度が違う

それでもこちらの兵が圧倒的に強いのだが

村入り口近くまで差し掛かった時に後続の茜達が突撃を開始する

それを確認して暫く相手を引つ掻き回すように動き回る

しかし、ついこないだまで友軍だった皇甫嵩の兵を斬ることになるとは思わなかった

だからと言って手を休めることはない

皆も同じように心が痛んでいるはずなのに俺だけが感傷に浸るのは筋違いだ

突きだされる槍を避けては踏みつけ、首を跳ねる

それにしても妙に兵の動きがぎこちない

まるで兵が好き勝手動いているように見える

皇甫嵩にかぎってここまでの事があるのだろうか

兵を斬り続けていると遂に皇甫嵩を視界に捉えた

「ここからは俺の戦いだ　お前達は茜の指揮下に入り、策をこなせ！」

「御意！お館様も御武運を！」

兵と別れて俺は一直線に皇甫嵩の元に駆け出す

彼女を守ろうと立ち塞がる親衛隊を組かかるように倒し、踏み台にして皇甫嵩の前に飛び降りた

彼女の顔を見ると相当憔悴しており、その目には光がとっていない

……………無理もない、己の願いを叶える前に外道に肩入れしてしまったのだから

「待っていた鉄羽殿……………さあ、どうか……………私を……………」

「……………殺してくれ」

「っ!?!」

どれだけの絶望を感じてきたのだろう

彼女の口から聞きたくもないその言葉に既に心が死にかけているのがわかる

揺れる瞳に俺を写す彼女は俺に何を求めているのだろうか

彼女は鉄鞭を引き摺るように駆け出し、轟音を上げて振り上げてきたそれを受け止め、流そうとするが即座に左手で引き抜いた剣が俺の首を目掛けて迫る

双刃から二刀に切り替えて寸前に食い止める

「俺だけが武器を二つ操るとは限らないか」

「はあぁっ!!」

甲高い音を立てて互いに距離を取る

皇甫嵩は直ぐに体勢を整えて鉄鞭と剣を巧みに操りながら攻めたてるだがそこには必殺の一撃を繰り出せる筈の鉄鞭には正確な一撃を感じられない

何処かちぐはぐで理性の感じられない戦い方に思わず戸惑ってしまう声をかけることさえ躊躇いかねない

「くっ！」

何をしているのだ俺は

彼女を助ける為に来たんだ

傷付けてでも助けると

だが傷付きすぎた彼女に俺はさらに傷付けるつもりなのか？

ここにきて鈍る決心に好機と見たか肉を抉りかねない鉄鞭の鋭い突きを俺の顔に目掛けて放たれる

当たる寸前に咄嗟に避ける

兜の右側が耳障りな音をあげながら砕ける

鉄片が頬を切るのを感じながらも彼女に肉薄する

剣がぶつかり、鏢迫り合いになり彼女を間近に見る

「……！」

彼女は顔を涙で濡らしながら戦っていた

そんな彼女に刃を振れるのか俺は？

「怖いんだ…私は…」

「…怖い？」

「戦うのも生き残るのも傷付けるのも死ぬのも…！」

「皇甫嵩殿…」

「朝廷を建て直し、乱れた世の中を今一度、太平の世に導き直す…その為だけに歩みを止めることを止めなかった。だが私がたどり着いたのは…」

「…同じ畜生に堕ちるといふ絶望…」

「本当は嫌なことは忘れたかった…封じて生きて良かった…とりかえしのつかないこと…それでも私は進むしかない…！でも道を踏み外した私が進む資格はない…」

「だったら俺が共に痛みを背負う！踏み外した道から引き摺ってでも連れ戻す！そんなになつてまで一人で立てはしない！俺を頼れ！」

もう抱え込むのはやめるんだ……」

「私は……」

「怖いのだろう？だから……殺してくれなんて言っな……」

「う、あああ……鉄、羽殿……助けてくれ……」

力が抜け始める彼女を抱き抱えるように受け止める

説得できたかはわからない

だが戦う必要はもうない

回りにいた兵は戦意を失ったのか困惑していた

同じタイミングで村に火の手が上がる

向こうも策を成功させたか

「聞け！皇甫嵩配下の兵よ！自分のしでかした過ちに罪悪感を感じるものは償いたくば馬元義に反旗を翻せ！」

煌めく光は鉄の翼に包まれる（後書き）

知床半島

……無意味に言っただけです

そしてサノブにとって残念なお知らせ

カーペットと布団がカビだらけになりログアウトしました

しかも誕生日に

現在自宅で何故か寝袋生活です

どうしてこうなった

後は特にねえですな

じわじわと最初に考えてた流れからずいぶん変わったんですよ鎧兵团  
そうじゃないとどうあがいても絶望な勢いで人がバタバタ死んでい  
くところでしたので…

気合いでハッピーエンドの目指します

それでは次話に

焼け落ちる黄天（前書き）

先に注意書を

今回の話は猟奇的かつ狂気的な描写が含まれており、読者に嫌悪感をもたらし恐れがあります

その事を頭の片隅に置いてからお読みください

それでは11話始まります

## 焼け落ちる黄天

### SIDE 茜

皇甫嵩軍が馬元義に反逆した

ただ皇甫嵩軍内部にまで馬元義の部下が入っていたせいで軍が二分されてしまったらしい

社様と皇甫嵩將軍が心配になる

とはいえ火計を放ったあと今は急いで離れなければ私たちまで焼け死んでしまいます

敵を蹴散らして、一応は村の外まで出れましたが既に火の手は目前まで迫ってきてます

しかも火の手は皇甫嵩軍を飲み込むように燃え移ってしまいました

一ヶ所だけ燃えていない場所がありますがそれも時間の問題

そういえば何故か村の中には馬元義の部下ばかりで肝心の本人が見当たらない

まさか本人だけ逃げ出したのだろうか？

いや、それよりも何か嫌な予感がする

私達は村人達のこともあるためにこのまま隠れ家に退かなくてはならない

早く馬元義を討たねばならないというのに…

「た、隊長！」

「どうしましたか！？」

「む、村を囲うように大量の黄巾賊が出現！その数およそ一万です！これではお館様が！」

「伏兵！？そんな！！！」

初めからこれが狙いか！？

ダメだ、距離が離れていて今から反転して来た道を戻っても今までの疲労と無理をして特攻、退却をしたせいで限界の私達じゃ戦えない

黙って退くしかないのですか！？

「社様あつ!!」

私は燃える村に向かって叫んでいた

S I D E 社

火の手の回りが恐ろしく早い

勢いが在りすぎてこのままでは皇甫嵩軍が焼け死んでしまう

「うあつ!!」

「皇甫嵩殿!!」

先程まで無理をして戦っていたせいで彼女の体力より気力がつきかけている

もはや部下を守るために戦うという想いだけで再び立ち上がる彼女は足元がおぼつかない

俺は彼女の手を取り、引つ張りあげながら走る

その間に手のひらを返したかのように馬元義の部下達は彼女を一方的に攻撃する

雑兵相手にすら苦戦しかねない彼女に代わり、親衛隊の兵達と共に戦っていた

「死ねえ！鉄羽あつ！」

「その首貰うぞ鉄羽あつ！」

「っ！？黄巾賊か！邪魔をするな雑魚がああっ！！！」

突然、現れた黄色の布を纏う兵達が行方を塞ぎ始めた

相手は馬元義

黄巾賊であるのだから当然か

俺は皇甫嵩達より前に出て突進する

双刃に組み換えて武器も鎧も両断していく

時折、皇甫嵩に碎かれてむき出しになった顔の部分を狙ってくるものもいるが、初めからそこを狙っているとわかれば避ける、或いは防ぐぐらい容易いものだ

木の割れる音、兵の怒号に混じる、空を切る音に反応し顔を傾けて死角からの攻撃を避ける

「当たると思ってたか！」

振り向き様に振るい、賊の顔が吹き飛ばした

数の有利を生かして懐に飛び込んでくる賊達には貫手で心臓を抉り、飛来する矢は近くの賊を無理矢理盾にした

それでも相手は怯まない

「まだいるのか…これでは茜と合流できん…」

これだけ相手からすれば忌避するような戦いかたをしているのに恐れずに挑んでくる

仕方がない…治ったばかりで使わずに行ければよかったのだが

「ううううおあああああああああああつ！！！！」

全身から再び神々廻の炎を出した

二刀に組み替えると包囲するように突き出された槍の穂先を斬り捨て、続く炎で黄巾賊を焼き殺した

俺は親衛隊が無事に通れるように露払いをすることにした

後のダメージがどれだけのものになるか分からないが、こつする他無い

「はあああつ！！」

刀を振ったとは思えない歪な音をあげて眼前の黄巾賊は肉塊と灰に成り果てる

込み上げる血の味を我慢しながら俺はただひたすらに修羅と化していた

「あそこだあつ！あそこから脱出できるぞ！」

親衛隊の一人の叫びにその方向を見ると、まだ焼けていない場所を見つけた

あそこからとにかく皇甫嵩を連れ出さなければ

しかし、皇甫嵩の元に行こうとしたときに奴は現れた

「弓隊、射てえい！」

皇甫嵩達に目掛けて矢が降り注がれる

俺は視界に捉えた後は勝手に体が動いていた

凹ませるほど大地を踏みしめて一瞬にして皇甫嵩達の前に飛び出る

「うああああああつ！！」

刀に炎を纏わせて矢に向かって大きく振りかぶった

刃先から放たれるは巨大な炎の斬撃

矢を全て焼き付くして一応の脅威を払う

「じはあっ…うっっ…」

一気に気を解放したせいで内蔵が弾けたかのような痛みが襲い、同時に吐血した

そのあと一瞬の気の緩みからか、いきなり視界が横転する

「ぐあっ…がっ…」

地面を転がり、全身を鈍い痛みが走った

いったい何が起きたんだ？

蹄の音に何とか顔をあげると皇甫嵩と親衛隊が騎馬隊と交戦しているのが見えた

さっきの衝撃は馬に轢かれたのか俺は

兜を脱ぎ捨て、馬による衝撃に砕けた部分の鎧が地面に落ちていく

「ぐああっ…！」

「ぎゃああああっ……!!」

「くっ! 貴様らあっ!」

次々に散っていく自分の兵を見て皇甫嵩は鉄鞭で馬の足を砕き、落馬した兵を次々に吹き飛ばし始めた

「はあっ……はあっ……皇甫嵩殿……」

「まだ生きてたか小僧……」

「……馬元義……!」

長刀を杖に何とか立ち上がると背後に馬に乗った馬元義が現れた

俺を見るや否や憎悪の形相になる

「お前さえいなければわしは全て成功していた!なのにそれを全て台無しにしおって……! 貴様だけは必ず殺す! 皇甫嵩も渡さんぞ!」

「はあっ……はあっ……言いたいことはそれだけか……?……豚が鬼を殺すなどと笑止……はあっ……貴様に俺は殺せん……それに皇甫嵩殿は貴様の物ではない……貴様のような屑が、汚していい女性ではないんだ……!」

「小僧おお……！言わせておけば……わしの野望の邪魔をした貴様は徹底的にいたぶってくれるわ……！紫芝鉄羽あつ……！」

「……………こいつ……！外道、馬元義いつ……！」

必殺の一撃、馬元義は槍を構えて突進してきた

俺は槍を紙一重で受け流して、槍と馬の足を斬り裂く

失速し、泥に向かって馬元義は崩れ落ちる

何とか奴を追っていくと馬の下敷きになった馬元義が這いずり出てくる

馬の血と泥に塗れた姿はまさに馬元義の醜さを体現していた

「ま、まだじゃああつ……！」

青竜刀を抜いて再び立ち向かってきた馬元義

「……斬ッ！！」

青竜刀ごと馬元義を袈裟斬りに吹き飛ばす

血飛沫が炎の中に舞う

青竜刀は半分に折れ飛び、火の中に消えていった

「がふっ……！ぐっ……ぐふっ……くそっ！浅かったか……！？」

馬元義はその肥え太った体の傷を押さえながらも未だに倒れていなかったのだ

脂肪が邪魔だったことと神々廻の炎のダメージに力が入りきらなかったからだ

「い、痛い…おのれ鉄羽…！」

「…だが、次で貴様を確実に葬ってくれる…覚悟…し…ろ…が、げえ…！」

「こんな時に…！」

再び膝をついてしまう

くそ…！あと一太刀、一太刀いれればいいんだ…！

「ぐあ…！」

「！？皇甫嵩殿おっ…！」

皇甫嵩の苦悶の声に彼女の方を見る

脇腹を槍が貫いていた

「どけいっ!」

「ぐっ!」

あまりの出来事に呆然としてしまい、その隙に蹴り倒された

よろめきながら皇甫嵩を刺した黄巾賊に向かっていく馬元義

「この阿呆め!」

「ぎっ、ば、馬元義様…なに、を…?」

「はあっ…はあっ…皇甫嵩を汚してよいのはわしだけだ…」

馬元義は皇甫嵩を貫いた自分の部下を折れた青竜刀を突き立てて殺した

怒りも憎悪も何もかもが馬元義を本当の畜生に仕立てた

髪の毛は白髪へ急激に変わり、目は血走って狂気に染まっている

「ふ、ふひっひひひひひっ！ひひひひひ、皇甫嵩を汚してよいのはわしだけなのだ…」

「ぐ、が、あああああああつっ！?!?!?!」

壊れた馬元義は皇甫嵩を押し倒すといきなり槍を乱暴に引き抜く  
痛みに皇甫嵩は絶叫をあげる

「くそっ！このお…外道があつ！！」

ふらふらになりながら立ち上がり助ける為に皇甫嵩の元に向かう

「何をやってる！お前らわしを守れ！」

「は、はっ…！」

「っ！お前らあつ！！」

まだ黄巾賊が豹変したこの畜生を守るように立ち塞がるか

皇甫嵩の親衛隊達も黄巾賊に阻まれて助けられない

「ああ、皇甫嵩…美しいのう、ひひひっ…愛しい愛しい皇甫嵩よお…」

「うああああああつ!!!!」

皇甫嵩の突き刺された箇所指を這わせ直接傷を開く

彼女の紅い命が流れ、手に付着した血をなめとっていた

「そ、そうじゃ、皇甫嵩よ!い、今からわしの子を成そう!わしはこの国を統べる、お前は王の妻になるっ…ふ、ふふひひやはっ!愛しておるぞお皇甫嵩う」

「い、嫌だ…やめ、ぐ、うあああつ!!!!う、ぐうっ!……助け、て…」

拒絶すれば皇甫嵩の傷をもてあそぶ

自分は今何をしてるかわからないくらい滅茶苦茶に叫んでいた

どうして彼女ばかりがこんな目に遭う?

どこまで彼女の運命を弄べば気がすむんだ

「が、がふっ!?!」

「!?!」

突如、馬元義から槍が生える

突き刺したのは二人の親衛隊

彼らは既に死に体

それでも皇甫嵩を守るために死の淵から戻って見せたのか…

二人は槍をさらに深く刺して抜けないようにしている

「お、おまえ、たち…」

「我らは…貴女と共に…戦えて光栄に、思います」

「この畜生は、俺達…が…鉄羽…殿……皇甫嵩様を…」

「よ、よせえ……皇…甫嵩……」

二人はそのまま馬元義ごと自ら火の中に入っていった

馬元義はそれでも皇甫嵩に手を伸ばそうとしている

俺は黄巾賊が使っていた槍を拾い、馬元義に向かって投げ付けた

あともう少しで手が届きかけたところを槍は手を貫き、焼け爛れた顔面に突き刺さる

「…終わりだ…！」

馬元義は、火の中に消えた

俺はかすれながらも声を張り上げた

「聞け！馬元義は…紫芝鉄羽が討ち取った！これ以上の戦いは無意味！焼け死にたくは無いは早く逃げるがいい！」

叫んだあと俺は地面に倒れる

俺の言葉に次々に馬元義の部下は逃げ出した

「な、に…?」

だが、戦いが終わらない

残った黄巾賊が暴走し始めたからだ

奴自身が完全に指揮権を持つてると思ったが…こんな状況で少ない手勢の俺達を殺すことをえらんだか…

薄れる意識の中、親衛隊達が前に立つのが見えた

「鉄羽殿…我らはここまでのようです…」

「ですが、どうか…皇甫嵩様と鉄羽殿だけでも…」

そんな言葉だけ聞いて俺は意識を失った

S  
I  
D  
E  
  
O  
U  
T

## 焼け落ちる黄天（後書き）

この小説を読んで皇甫嵩のファンになった方々、どうもすいませんでした

ちょっと話を作る内にどうやって敵側の非道を行わせるか考え続けた結果が、ぼくのかんがえたくされげどうを搭載した馬元義のけなしの理性が吹っ切れた結果がこのさまです

ごめんよ皇甫嵩、馬元義の活躍（暴走）の為の踏み台にして

もう完全に皇甫嵩はヒロインですね

このあと話はどう転がって行くのかはまた次話に

後数話で一端ほのぼのとした話になります

その時に何とか皇甫嵩を幸せにいいいい

光と共に翼は一度、折り畳まれん（前書き）

駆け足12話

光と共に翼は一度、折り畳まれん

土砂降りの雨の中、山中の戦いがあつた場所

そのことごとくが焼け、未だに戦いがいかに激戦だったかを物語るように夥しい遺体がさらされていた

その村の中に幾人かの人影が立っていた

一人は兜は脱いだ者の鎧を未だに着ていた茜

もう一人は朱雫だ

茜は撤退している最中に朱雫の軍と合流

彼女が社に降ることを知ると鎧兵団を隠れ家に帰らせたあとに朱雫と多数の兵と共に村に引き返した

ほんの僅かに生き残った皇甫嵩の兵を道中保護しながら

未だに帰らない社と皇甫嵩を探して

「くそっ！何でこんなことになってんだよ…徐晃…見つかったか？」

「まだです朱儁さん…」

山中周辺も兵が何人か探し回る

彼らが死んだとは思えない

死んだという事実を否定したいから

「見付かったのはこれだけ…」

朱儁が持つ、鉄羽という彼の名になっている社の二振り刀

そして茜が抱き締めているのは所々に亀裂の入り、一部分の砕けた  
鬼面の兜

その中は大量の血がこびりつき黒く固まっている

これだけ血がついているのに茜は一つの考えに至っている

（あの力を使ったのですか…社様…）

軋む音をあげながら兜を強く抱く

まるで彼女の心の悲鳴のように

「徐晃、一度戻ろう 周りの山が崩れかけてやがる…これ以上探すのは危ねえし、お前はずっと休んでないんだぞ？体を壊してまで探そうとするな」

「はい…」

徐晃の弱々しい姿に朱雫は目をそらしてしまう

もう一度村を見て朱雫は二人の無事を信じて祈り続ける

そして後ろ髪引かれる思いで二人は村を立ち去った

いずれ再び社に仕えられることを思う

「徐晃、今は行き場がないんだろ？」

「はい…このままでは村人が飢えてしまいます」

「そうだな…なら一つ行き先があるんだが行こうか？そこを拠点にして鉄羽と燦の奴らを探そう」

「わかりました…」

消え入るような声をあげる徐晃の肩を抱きながら朱儁は兵の撤退を指示した

S I D E 社

夢を見ている

燃える武家屋敷

回りには、紫芝を陥れた他の分家の裏切り者達の遺体

俺はこの景色を覚えている

「  
…  
」

そうだ、

俺が最強の地位を手に入れる前…

焼けた木材が遺体を下敷きにしながら火の勢いは増していく

その火の中に四つの人影

その一人は鉄槍を手にしたまだ未熟者の俺

一人は俺に守られるように抱えられている俺の師匠

もう一人は神々廻一門の裏切り者、後に神々廻の恥さらしと伝えられる満身創痕の悪鬼

そして最後の一人は鉄羽を握る、俺の兄

「全員、苦しみ、むせび泣いて死ねやあッ！」

「!!!社おっ！」

「  
あ  
」

声が重なる

目の前には

鉄の針に全身を貫かれた兄が

これは、

己の弱さを呪った記憶

兄の姿が突然ぶれる

そこにいたのは

槍に貫かれた皇甫嵩が

「あああああああつっ!?!」

「つっ!?!?!」

体を起こす

回りは何処かの建物にいるのか、簡素で質素な作りの部屋にいた  
体はぐっしょりと汗をかき、体を強烈な痛みが襲う

さっきのは夢か？

だとしたらなんて質の悪い夢だ…

何故、あのときの記憶を

「そつだ…皇甫嵩殿…！」

戦いはどうなったんだ？

あのあといったいどうなったんだ！？

何故、俺は生きてる！？

皇甫嵩は、皇甫嵩は無事なのか！？

寝台から何とか立ち上がり、壁に手をつきながら歩き出す

おぼつかない足取りに苛立ちながらも扉に一步ずつ足を進めた

「ぐ…くそっ…」

また変に力を使ったせいで治った傷を再び増やした

痛みが焦りを募らせ、その焦りに思考と記憶が纏まらない

それでも、ただただ皇甫嵩のことを思う

せつかく繋いだ糸を気を失ったせいで千切れていたら、俺は一体何のために戦っていたのか分からなくなる

足がもつれ、その場に倒れた

衝撃だけで全身が引き裂かれ、捻きれそんな感覚に意識を飛ばされそうになる

しかし俺は悶えることよりも結末を知るためにゆっくりと這いずっていった

不意に、扉の開く音がする

顔をあげると右目を覆うように包帯を巻いた、まだ幼さを残したような顔つきの青年がいた

手には桶と手拭い、水差しが見える

青年は、俺の状態を見て固まっていた

「あ……」

「……済まないが、手を貸してくれないか？」

「……………はっ！た、たたた、たつ、隊長おおっ！！鉄羽様が、鉄羽様が目覚めましたああっ！！！」

自力で立ち上がれそうに無かったので手を貸して欲しかったのだが、意識を取り戻した彼は脱兎の勢いで駆け出してしまった

という声が大きすぎて五月蠅いな

とりあえず、近くの壁にもたれ掛かっているとドタドタとやかましい音をたてて幾人が部屋に入ってくる

その中には

やつれていたものの、先ほどの青年に支えられながら立つ皇甫嵩の姿が

彼女は俺を見つけるとゆっくりと歩みよってきた

「鉄、羽…殿…？」

彼女は俺の前に力無く座る

あの戦場で見た弱々しさに拍車のかかった彼女

俺は無意識のうちに手を伸ばしていた

彼女の肩に触れる

ビクリと震えたが、そのまま俺は自身に抱き寄せた

「…こんなに弱って、駄目じゃないか…ちゃんと、健康に気をつかわなくては…」

「…っ鉄羽殿…一月も眠られて…私は、もう目覚めないのかと…」

「…一月も？…そうか…頼れといった矢先に辛い思いをさせて済まなかった…」

震える皇甫嵩を抱き締めながら、眼帯の青年の他に入ってきていたもう一人の青年を見る

「貴方が俺達を救ってくれたのか？」

「ああ、俺は華陀 医者をやっている…それにしても驚いた…よくもあれだけ身体を傷付けた状態で覚醒したな」

「悪運は強いのかもしれんな…そういえば一月眠っていたそうだが…一体何がどうなったのか教えてくれないか？」

戦いはあのあと、暴走した黄巾賊の残党から俺達を守るべく皇甫嵩の残りの兵全てが命を投げ出した

気を失った俺と重体になった皇甫嵩を救うべく親衛隊が強行突破

その中で眼帯の青年だけを残して親衛隊も壊滅

片目を失いながらもたまたま華陀の滞在していたこの小さな町にたどり着いた

「……それでは、皇甫嵩殿の軍は」

「…皆、逝ってしまったのだろうか」

最期の時まで忠義を尽くした

彼女と、彼女を助けた俺にしてやれる最大の恩返しだと彼らは言っていたそうだ

俺は、彼らまで救えなかったのに

俺達の村を壊した罪を償いたかっただとも言っていた

俺は、彼らを恨んでいなかったのに

皇甫嵩殿は疲れていたのか、別の部屋で休んでいる間に俺の眠っていた部屋で三人で話していた

わかったのは、俺は何一つ、救えていない

「鉄羽様…」

「皇甫嵩殿ばかりを救おうとして、回りを省みなかったとは…あげく、皇甫嵩殿ばかり辛い思いをさせる…最低だな…俺は」

「だったら、尚更お前が彼女の側に居続けなきゃな」

「華陀？」

「彼女は傷こそ治してきたが、心だけはそうはいかない　今の掘り所は鉄羽、お前だけだ」

側にいていいのだろうか

力が有るくせに何も出来なかった、馬元義を殺しただけの俺が

「鉄羽様、俺からもお願いします　隊長を今度こそ救ってほしいです！」

「しかし…」

「あの人は、ずっと馬元義に苦しめられてたのに俺達は何もできませんでした…それなのにこんな俺達をいつもありがとうって労ってくれてたんですよ……民は勿論、俺達の家族を大切にしてくれる、だからどうしても助けたかった…」

眼帯の青年は涙ぐみながらその頭を床に擦り付けた

「側にいてやってくださいっ…俺達はもう、力になれないんです、  
剣も折れ、盾も砕かれ、旗は焼けて…支える力が無いんです…ただ  
けど、鉄羽様なら…」

「俺が力になれるのか？支える力に」

「だって、誰にも弱音を漏らさないあの人があの村の戦いで初めて  
心を許したんです…あのとき確かに救われていたんです…」

「！皇甫嵩殿…」

全て諦めていた彼女を亡くすことを拒んで、拾い上げた

どうしても救いたいから

まだ、俺は彼女を救える

ようやく日の当たる場所まで引きずり出したのだ

ならその輝きを取り戻すまで彼らの代わりに力になる

戦いから離れて心の傷を癒すことに専念する

「頭をあげてくれ、俺がお前達に分まで、出来なかったこと全て彼  
女のために」

そう今は、彼女のために

剣を置こう

SIDE 茜

「ほ、本当なんですか！？その話！」

「ほんまのほんまや、こないだ寄った町に鉄羽と皇甫嵩の二人はおつたで？」

調練場で振るっていた斧が手から滑り抜けて壁に突き刺さったことすら気にもとめず、山賊の遠征より帰ってきた霞さんから聞いた話に嬉しさが込み上げてくる

村人達と鎧兵団、朱雉さん改め、綺羅さん率いる兵と共に私は董卓様に仕えることになりそこでずっと社様と皇甫嵩將軍の行方を探してました

手掛かりなんてものは無い状態、暗闇の中手探りする毎日

何度も不安に押し潰されそうになりましたが、張遼さん…霞さんがついに見つけてくれた

気付けばあの村の戦いから三ヶ月もたっていました

「ど、どうだったんですか!？」

「ちょっと！茜落ち着きい！顔近いっ!！」

「す、すみません」

「ふう、まず二人とも普通の町人として暮らしたわ　とりあえず会ってきただ？」

「それで!？」

「まあ、皇甫嵩はなんやしおらしくなってなあ、鉄羽はもの凄お優しくなってるし」

「こ、こうしてはおれません！早速董卓様に休みをとって会いに行ってきます!！」

二人の、社様の元気な姿をこの目で確かめたい

そもそもあの力を使ったのだから本当に心配なのです

それに何故、すぐに皆の前に元気なお姿を見せないのか

はやる気持ちを押さえること無く駆け出そうとした

「ちよい待ちい」

「ぐえっ」

しかし、服をつままれて思わず尻餅をついてしまう

少し首が絞まったせいで蛙が潰れたような声を出したせいか、なん  
だか回りの視線が恥ずかしい

私は後ろのつまんだ霞さんを思わず睨む

「悪いねんけど鉄羽のお願いやからな、いかせられへん」

「な…？何ですか？」

「ああ〜なんて言えばええんやろ…いろいろ今は神経質になってる  
からそっとしといてほしいんやて」

「なら尚更行つた方が」

「その代わりに伝言、あるねんけど…聞くやる？」

「伝…言…はいっ！」

「今は翼を休めろ…だがこの先、再び世に大きな不義がやってくる  
その時、どうしようもなくなつたとき俺の元に来い」

「……………」

「まるで占い師みたいなこといっとなけど確かに伝えたで？せや  
から今から準備するんは」

「はい、今はまだ鉄羽様に会うわけにはいきません」

「は？いいんか？あんなに探しとつたのにか？」

「いいんです…あのお方はいつも休まずに働いてようなお人です  
休めるなら今は休めさせたいんです」

「???ようわからんけど茜が言うならええか」

ただ再び私たちが立ち上がる時が来る

ならば私たちに出来ることは英気を養うのみ

貴方がもう一度羽ばたくなれば私達はいつでもお側に参りますよ……社様

光と共に翼は一度、折り畳まれん（後書き）

これにて社くんの黄巾の乱は終結です

後は二、三話だけ比較的平和なお話をして新章に突入していくかと

この先、社くんと皇甫嵩のいちゃいちゃラブラブしたものを書かないといけないとは

血涙が出る想いですはい

いちゃいちゃラブラブは言い過ぎかもしれませんが実際にそうなっていくと想ごと

血涙の滝が出る想いですはい

そんなこんなで皇甫嵩慰安話中心なんですな

茜が不憫です

さて、ここに来て眼帯の青年というおっちょこちょいで何処かお調

子者の三枚目みたいなイロモノ確実のオリキャラがでたわけなんです  
がっ

なんとサノブ、こいつの名前決めてねえです

なんてこった！

一応メインキャラの一人なのにつ！

しかも眼帯のお陰で余計に名前付けにくい！

誰かっ！この眼帯青年に素敵な名前をくださいっ！

それでは、次話にてっ！

新たな日常（前書き）

実は三話分あったものが原稿を無くしたせいで記憶を頼りに無理矢理繋ぐ羽目に

そんな13話なんだが、大丈夫か？

## 新たな日常

道行く人の穏やかな笑み

出店の威勢のいい掛け声

はしゃいで駆け回る子供達の無邪気な笑い声

世を騒がせた黄巾の乱が収まり、人々は少しずつだがゆっくりと、  
だが確実にかつての活気を取り戻していく

かつて大陸を覆った恐怖や悲しみ、絶望はその鳴りを潜み始めた

ある町もその例に漏れず、今までの悲しみを吹っ切るように明るい  
笑顔に溢れていた

その町のある料亭

そこには鍋を振るう紫芝社の姿があった

これは張遼が遠征からの帰還の為に立ち寄った一ヶ月前の話…

SIDE社

「よし、味付けはこんなものか」

「おうっ！鉄羽さんっ！次は麻婆豆腐を二人前頼む！」

「分かった」

一度出来た料理を配膳に渡して直ぐ様次の料理に取りかかる

今の時間帯ではたくさんの人がやってくるため急いで作らねばならない

厨房には俺を含めて八人も料理しているがギリギリ回っているような状況だ

次の麻婆豆腐を完成させると料理長に呼び出された

「社さん、今日はもう帰ってもいいですね」

「む？だがまだ仕事が」

「いいんだよ、いつもこつちは大助かりしてんだからたまにはちゃんと休まなきゃ駄目だぜ？」

料理長は給金の入った皮袋を渡してくる

しかし以前よりなんだか重いような？

「他の奴らがどこから知ったのかわからんがあんたの境遇に自分達もできることならって」

「…皆」

「さ、早く終わらせてやったんだ　あの人の側にいてやりなよ」

「分かった　ありがとう主人」

元々の服に着替えて歩き出す

町の道行く人々に肉まんやらなんやら貰いつつ俺は小さな家にたどり着いた

片手で器用に荷物を押さえて扉を開ける

「ただいま皇甫嵩」

「ん？お帰り鉄羽、今日は早いのだな」

「主人が何故か帰してくれたよ」

「ふう…またずっと働き詰めになっていたか」

「なにか言ったか？」

「いや何も」

そこには本を読む皇甫嵩がいた

そう、今俺は皇甫嵩と共に生活している

魔窟より救いだし、畜生を屠るだけでは意味がない

今まで苦しんでいた彼女に癒しを与える

そうでなければ本当に救ったと言えない

何より力を失い、願いは敗れ、苦楽を共にし、歩んできた仲間を亡くした

そして、一度に余りにも多くのものを失い、心が壊れてしまった…

旅に出てしまった華陀がまだ町に居たときに俺が生きていただけで十分と言って何度も自殺を図ろうとして、華陀と二人がかりで止めている

華陀と模索しながら彼女に正気を戻させて、欠片を拾い、繋ぐように彼女の心のケアをする

生きる意欲を取り戻すことが出来るまで油断できない毎日だった

後は消せない過去に囚われないように楽しい毎日を送らせる

俺を慕うようになった彼女は共に生活することにして孤独を味あわせないように

「そういえば仁がさっき来たのだが、会っていないか？」

「？いや、帰ってくる途中一度も顔を会わせていないが」

「全く、慌て者なんだから家にいればいいといったのに…と、噂をすれば」

家の外でどたばたと音がしたと思ったたら玄関の扉が乱暴に開く

息を切らしながら入ってきたのは眼帯の青年だ

「社さんっ！さっき店の主人に聞いて早く帰宅したって、さっそくいつものお願いしますよ！」

「分かった分かった　だから、一度落ち着け仁」

「それじゃ先に待ってますよ！ってうわああっ!？」

「はあ、だから落ち着けと言ったのに」

眼帯の青年、仁は再び家の外に飛び出すがいつものように足がもつれて転んだのだろう

その様子を想像したのか皇甫嵩がクスクスと笑う

いつものこととはいえ俺もつられて笑ってしまった

…笑顔を浮かべてはいるがその心に負った傷と絶望は深く、その影が未だにちらついていることに一抹の悲しさを感じながら

「鉄羽、今日は私も見に行ってもいいか？」

「ああ、別に構わないさ　しかしいきなりどうした？」

「あ、いや、実は昼食を自分で作ってみたんだ……仕事で忙しい鉄羽はいつも昼食を抜いているから帰ってきた時に食べてもらいたくて……駄目だったか？」

「ふ、そうか、ならありがたく頂こう」

だが、皇甫嵩も闇に負けないように前進し始めている

ならば俺も貴女を孤独にしないように今日も支え続けよう

彼女の作った昼食を詰めたものを持って裏の東屋に行く

「……鉄羽」

「ん？」

「……い、いや、何でもない……さあ、仁が待っている」

「??？」

目の前に拳を構えた仁と対峙する

軽く柔軟をしながら足を少し開く

目を閉じて一度深く深呼吸

そして軽く脱力して自然体に構える

「それじゃあいきますよ！」

「……………来い」

「うおおおおっ！！！」

地面を蹴りだし、仁は一息に俺との間合いを詰める

そして繰り出されるは手加減の無い相手を倒す為の拳の一撃

その一撃からいつものように、時折蹴りを交えた拳と肘の乱打が始まる

俺は冷静にいなして、拳を受け流し脇に挟む

そして相手の勢いを利用して後ろに投げ捨てた

「ぐっ…」

「また猪になっているぞ 自分の攻撃でどう相手が動くのかよく見る」

「はい！」

地面に転がる仁はすぐに立ち上がると再び駆け出す

何故、仁と組手をするのか

それは戦えなくなった彼が新たな力を望んだからだ

もう一度支える力になりたいと諦めきれなかった彼の訴えに応えた俺は新たに戦う術を与えることにしたのだ

彼の本来の得物は剣なのだが片目を失ったせいで距離感が掴めなくなり、まともに振るうことができなくなってしまった

その為に神々廻古武術鬼拳の型を彼に教えて無理矢理距離感を掴ませることにした

間合いが短くなり、命の危機が増し、危機回避能力を極限までに鍛えさせる

この体術は防御と回避と受け流すことに関しては群を抜いて多彩、この時代には存在しない銃弾の受け流しさえできるといふ

昔はその存在を聞いたとき鼻で笑ったが実際に一族に達人がいたから笑えなくなってしまうたな

視界の半分を失った彼にはいきなり身に付けるなどと酷な話だったが死に物狂いで身に付けていく彼の才能には驚いた

ハンデを持つ彼がまた戦う道で生き残るのは難しいと考えていたが、粗削りながらもモノにし始めている

ただ攻撃と受け身に関してはまだまだなのだな

「うおおりゃあああっつ！！」

飛びかかり、放たれる大振りながらも高速のフック

実際に受ければ人を軽く吹き飛ばすか首をへし折るだろう

それを上段蹴りで迎え撃つ

パーンっと小気味よい音

凄まじい衝撃を足に受けながら相殺し、押し返してやる

「うっとうとうっ」

ふらつきながら何とか着地して再び走り出す仁

そして

「はああああっ！！ってあれねえーっ！？」

「はあ…」

仁は走り出そうとして盛大に躓いた

高い身体能力に身を任せて勢いをつけているような仁は受け身で止まることが出来ず、まるで何かに激突されて吹き飛んだかのようにごろごろ転がりながら草むらに突き刺さって行った

上半身だけ埋まった間抜けな姿に溜め息をこぼしてしまう

取り敢えず引き抜いて転がした

「ぶはあっ！いやあまたやっちゃいました…へへ」

「へへじゃない 受け身をとれなければせつかくの防御能力を生かせなくなるぞ？後は自分の身体能力に頼りすぎるな 技の特徴をしつかり考えて組み合わせろ」

「はい、すみません！でも次こそは大丈夫です！」

「その言葉は何回言ったんだ…」

「えっと…七十九回です！」

「数えんでいい」

「いてっ！すみません！」

拳骨を落としてまた元の間合いに戻る

こうして暫くの間、仁が転がっていくことを除いて組手を続けた

短くも密度の濃い組手に投げられ続けた仁は大の字になって倒れている

それを放置して皇甫嵩の元に歩いていく

「お疲れ様、仁はどんな調子なのだ？」

「正直、覚えが良すぎて他の体術を教えたくなくなるな」

「ふふふ、そうか、さあいい加減腹も空いたろう？遅めだが昼食をとろう」

「ああ、いただきます」

優しく風が通り、少し火照った体にはちょうどいい

皇甫嵩の作った昼食はまだ初心者にしては中々の出来だ

彼女の手を見れば練習したようで切り傷が見受けられる

数は少なくはないところから相当練習したか

ならばこれからは仁に組手を教える傍ら、皇甫嵩に料理でも教える  
としよう

「ど、どうだ？」

「うむ、中々珍味な…」

「…え？」

「…冗談だ、美味しいぞ皇甫嵩」

「な、からかったな!？」

「はてなんのことか？」

「鉄羽！」

「ははははっ！」

少しからかいすぎたか

だがこうでもしないと彼女の無邪気な表情は見られない

そしてそれを見たくなくなるといふかなんといふか

彼女の自然なままの姿をこうやって取り戻していく

「いつも鉄羽は私をからかう…私のほうが歳上なのに」

「…あ

拗ねているも、クスリと笑うしぐさに俺は…

「？私の顔に何かついてしているのか？」

「あ、いや何でもない」

元々綺麗な顔立ちをしていたのだ

それを俺が見とれていたなどと言えるわけないだろう、恥ずかしい…

何よりこれまでの毎日に段々と彼女に惹かれていく自分がある

いつか茜達の元へ行かなくてはならないのに彼女の心に安らぎを与える今の生活を俺も楽しみ、そして長く続けばいいと思ってさえいる

もし、彼女が自分の足で自分の道にもう一度歩けるようになったとき俺は彼女と別れなければならないのだろうか？

305

「社さぁん、腹が減りましたぁ」

仁の情けない声に現実に戻る

見ればまるで生まれたての小鹿のように震える足でよろよろと変な動きをしながら歩いていた

その光景を見た後に皇甫嵩と顔を見合わせると可笑しくて二人で笑いだす

「仁、早く来ないと全て俺達で食べてしまつぞ?」

「そ、そんなあゝ…ま、まっってくださいいい」

そうだ

今は皇甫嵩を癒すことだけを考えよう

自分の気持ちに嘘をついてでも今を楽しむ

仮初めの平和がもたらした

この儚く消えてしまっような毎日、この時を

## 新たな日常（後書き）

眼帯よ

悪いが君にはまだ名前を出さないのよ

今のところははに丸さんの案のひとつを採用しようかと思えます

真名が先に出るといふ

眼帯は皇甫嵩とは親衛隊の付き合いが、社くんとは師弟としての付き合いで真名を交換してます

眼帯はギャグ担当です

強いけど

そして2話分消えたのにまだ必要な日常編が増えてさあ大変

茜達の状況とかも語った後でなければ反董卓連合は始まりません

そして反董卓連合はだいぶカオスに…

あ、気付いたら累計100000PV超えました

本当に読者の皆様には感謝しっぱなしです

これからも不定期ながらも更新頑張ります！

次話をお楽しみに

繋ぐ手、並ぶ肩、同じ道程を行く（前書き）

いろんなものを吐き出した暴れん坊難産14話

繋ぐ手、並ぶ肩、同じ道程を行く

SIDE 皇甫嵩

小鳥のさえずり

差し込む日差しに眩しさを覚えて目が覚める

「ん…」

寝台をゆっくりと起き上がり、側にある水を口にする

以前の戦場を回っていたときのようにいつ何が起きても対応できるように仮眠ばかりとっていた日々とうって変わって平和な目覚め

この部屋の隣に鉄羽がいることに私は未だに夢の中ではないのかと思うことがある

戦いから遠ざかり、慰安のためにこの町に住み始めて一ヶ月は過ぎたのか

私のために鉄羽も剣を置いたというのは驚いた

力に執着していた彼はもしかしたらこんな私に責任を感じているの

だろうか…

脳裏を

あの男が

縛られていたときの

記憶が

「っ…」

自分の体を抱きしめて過去の私を否定しようとする

以前は負の記憶すら呑み込んで歩いてきたのに

今までの呑み込んできたものが吐き出されるように余計に鮮明に思い出される

それが私の力の至らなさを知らしめていて

「死んでもまだ私を苦しめるか……馬元義……」

思い起こされる度に自分は酷く穢れていると

自分の招いた現状も合わさって私は彼に自分の想いも伝えられない

苛立ちと不安と恐怖

そして絶望の混ざった黒い考え

それを打ち消すように水差しをもう一度注いで一気に飲み干した

全く、朝から嫌な思いをしたな

今日は気分転換に町を歩いてみよう

立ち上がり、服を着替えると私は家の外に出た

SIDE仁

木々の間を次から次へと飛び移る

勢いを調節しながら飛びはね、逃げる獲物を追いかけ回す

そして隙を見せた獲物に向かって飛び掛かった

「とおうりゃああっつ!!！」

小枝を折りながら上げた両手を降り下ろし…!

そして、わしづかむ!

「捕まえたあっつ!!！」

「みゝいやああああっつ!!！」

「つてあいたああああっつ!?!落ち着けえ!猫おっつ!!！」

俺の顔を引き裂かん勢いで引つ掻きまくる

林の中を駆け回っていたのは町の住人の脱走した飼い猫探しをして  
いただけ

何度か転んで木に激突したが何とか無事に捕まえることが出来た

俺は自分の片目の距離感を取り戻すべく積極的にこういった小さな仕事をこなすことで常に変わる戦場に対応できるように訓練していた

それにしても今回は中々危なかった

何度も木にぶつかりそうになっただけは避けようとして別の木にぶつかったり

色んな意味で昇天しそうだったよ

町に戻り猫を飼い主に帰すとその場で一度体を伸ばす

「ここに住み始めて一ヶ月か…」

町に満ちる優しさ

それは確かに燦様の心を確かに癒している

勿論自覚してたかわかりませんが社さんも燦様のことぐさぐさぶ気にやんでいたようであつたので暫くの間、ずっと重い気持ちのまま過ごされてました

社さんも背負いがちなんだよなあ

戦場から離れて穏やかに暮らすことで以前のようない暗い生活では無くなりましたが

しかしお二人は気付いているのかな？

なんだか少しずつ二人が惹かれあつてるといふかなんというか

名前を呼ぶときでさえ畏まったものではなくってまるで友人、若しくは恋人同士で呼び会おうようだ

というかこないだお店で二人は恋人か夫婦かい？なんて訪ねられたことがあつたなあ

って俺に聞かれてもわかんないっての

でもそれっぽく見えるし…

まあ俺がそんなことで悩む必要なんで全く無いや

今日は家に帰って技の確認をしようかな

でも、欲を言うなら社さんに組手を頼みたいのだけけれど…

「ん？」

と、偶然に社さんが歩いているのを発見した

確か今日は非番だったはず…

よっしゃ！やっぱり社さんに組手を頼もう！

人混みの中に消えそうな社さんに声を掛けようとしたときだ

社さんは何かを見つけたのか歩む方向を急に変えてしまう

自分も急いで追いかけてようとするも姿を一度見失った

「あ、あれ？どこにいつちゃったんだ？」

人と人の間を掻い潜りながら歩いていく

暫くそうしているうちにやっと社さんに追い付き、今度こそ声を掛けようとしてやめた

誰かと楽しそうに会話をしている

その誰かは燦様だった

思わず建物の影に隠れてその様子を見守る

いったい何を話しているのかわからないが、これは確かに端から見たら恋人か夫婦じゃないか

しかしどうしようか？

その楽しそうな表情をしてらっしゃるお二人の間に入って組手を頼むのは失礼な気がする

というか邪魔をしていい訳がない

気付けばお二人は何か恥ずかしそうにし、歩き始めた

………待て、何で恥ずかしそうにしていたんだろう？

ま、まさかこれは逢い引きかっ!？

少し好奇心を刺激された俺はいつの間にか二人の後をこそこそとついて回った

正直、気になってしまったからだ

付かず離れず、手を繋げれる距離なのに触れない

というか燦様凄い顔赤いな！なんか見たこと無いくらい、いじらしいですよ！

社さんもなんだか少し落ち着かない様子

どうしよう、社さんと組手を頼むより様子を覗き…あ、いや、見守っていたい

「…こうなればとことん様子を見よう」

俺はそのあともお二人の後を追いかけて続けたのだった

## SIDE社

俺は今、皇甫嵩と共に町を歩いている

別にそこはいいのだ

俺は始め、彼女が珍しく外を歩いて居たのを見つけた

少し冗談半分で逢い引きでもしようかと口をついて出てしまっ

その時に

「……………別に好いた男となら断る必要もないだろう」

「……………え？」

あまりにも意外、そして予想していない返答に思わず間抜けな返事をしてしまった

見れば、頬を朱に染めて顔を背けている姿に一瞬俺は固まってしまっ  
そもそも今のは彼女の本心か？

内心冷静では無い俺は頭を掻きながら取り敢えず二人連れ添って歩  
くことにした

「ど、どうした？鉄羽、耳が赤くなってるぞ？」

「皇甫嵩だって顔が赤いな」

「……………」

「……………」

どうしてこうなった？

いや、自分の発言が招いた事とはわかってはいるが

今の状況に自分自身嬉しさもあるせいであんなにか言葉が出ない

ここはどうすべきだ？

なにか回りを見たりしていると皇甫嵩の視線が一つの書店に向く

そつえば彼女はよく本を読むな…

「寄っていくか？」

「いいのか？」

「ああ、構わないさ」

二人揃って書店に行く

多くの書が並んでいるところを見ると既にこの時代にはこれだけ多様な種類があったのだな

そんなどうでもいいことを考えていると皇甫嵩が熱心に見ているものがある

俺も一つ手に取り、中身を覗くと何やら男女の話、現代でいう恋愛小説に類するものだった

「皇甫嵩はこういうものを読んでいるのか？」

「い、いや、読んだことはないんだ…ただ、いつもは兵法書等ばかりしか読まなかったから」

「……………読んでみたいのか？」

「え？いや、別に読まなくなっちゃって」

とはいえ、物欲しそうにしているのはバレバレだな

俺は店の奥に行って買うことにした

「あの店の前にいる娘、あんたの彼女かい？」

「違う……」

「なんだか否定している割には余り嫌そうじゃないな」

「そう、見えるのか？」

「わしにはそう見えるね　はいお釣り、毎度あり」

なんだか恥ずかしい思いをしたな

そそくさと皇甫嵩の元に帰り、彼女に渡す

「これは？」

「買ってきた　読みたいものがあればまた買ってくるが」

「何もそこまでしなくても…でも私のために買ってくれてありがとう」

嬉しそうに笑う姿に自分も思わず笑みを溢す

やはり彼女は笑顔が似合っているな

今までの疲れたような顔をしていた頃と違い本当によく笑うようになった

二人でまた歩き出しては、色んな店に寄ったり余り歩かない道などを初めて行ってみたり

気付けば日が沈みそうになっている

俺達は丘になっている場所を上り、その沈む様子を二人で眺めていた  
夕焼けは、山々の間にゆっくりと落ち、赤い空と少しずつ降りてきた  
闇が混ざり、徐々に星空へと変わる

その幻想的でいて、現代日本に見られない美しい黄昏が広がっていた  
二人で言葉を一言も発することなくその光景を見つめる

「……………鉄羽」

「……………なんだ？」

「今日は本当に楽しかった…こんなことは本当に久しぶりだった…」  
「以前まではこの景色を見ることができない毎日だったのだ 楽  
しんでもらえたのなら幸いだ」

「鉄羽は…いつか鎧兵団の元に帰るのだろうか？」

「……………ああ」

俯いた彼女が何を言おうとしているのか

俺はそれを聞きたくない

「なら、私と共に居続けるわけにはいくまい……もう二ヶ月になるんだ……私なんか縛られてる必要なんて無い」

「皇甫嵩」

彼女の手を取ろうとする

しかし、彼女は俺の手を振り払った

「私なんか構っていても、教えを守れない……だからこれ以上、私の元に居てはいけない　頼む……私のような者を二度と出さないためにもう一度剣を」

「黙れ」

「え？」

「そうやって本心を殺して、何度も自分を偽って、幸せから遠ざかって、誰かの為に傷を負って……目の前にいる傷付いたお前を今

さら俺に見捨てると?」

俺が一步踏み出すと彼女は後ずさる

それでも構わず歩み寄った

「そうは言って無い…!ただ私は」

「俺は抱え込むのはやめると、俺を頼れと言ったんだ…俺は何を言われようが見捨てない、この手も離してやらない　なのに、もう、しがらみのない…今の日常が壊れるのが怖いくせにどうしてそんなことを口にする」

「!」

「それに俺は縛られているのではない…自分の意思でここにいて、側にいるのだ」

手を掴み、無理矢理抱き寄せる

腕の中に収まった彼女は離れようとするが離さまいと強く抱く

暫くそうしていると弱々しい声で話す

「鉄羽……私は…鉄羽が好きだ…好きだからもう一度仲間の元に居て教えを貫く鉄羽で居てほしい…」

「俺も皇甫嵩の事が好きだ」

「…っ！」

「皇甫嵩笑って生きてほしい　今まで自分のために幸せになることが出来なくて、誰かのためにその苦を背負ってきて………だけど今度は俺がいる、次から少しずつでいい　背負ってきたものを俺にも背負わせてくれ　だから一緒に…」

沈む夕日を受けながら俺達の影が重なる

一度離れて手を差し出す

あの悲しみしかない戦場で言った時は彼女の心のためにしかない

だが、今俺の口にした言葉はその意味が違っていた

「…燦…それが私の真名だ」

「我が真名は社…俺は燦、君の真名を確かに…」

「社…ありがとう」

輝く滴が彼女の頬を伝い落ちる

だけど嬉しそうに彼女は俺に真名をくれた

差し出された手を握る彼女に握り返す

まだ傷は癒えず、だがその痛みを癒すように俺達は二人で寄り添った

「…わー！わー！」

「!?!」

「なに?」

何かが折れる音、木の葉の擦れ、散っていき、いきなり後ろの木の  
上から誰かが落ちてくる

その誰かは仁だった

なんで木の上から?なんてことが浮かぶがそれよりも直ぐにある考  
えが浮かぶ

何か町を歩くときにやたらとついてきていた気配

なんの悪意なくついてくるものだから放っていたが…

まさか仁がついてきていたのか?

………ということとはさっきの全て見られて…?

「ひいっ!畜生!蜘蛛どっか行け!」

「おい」

「あ、えっと社さん?これはですね」

「今のやり取りを見ていたのか？」

「そりゃもう……って違つんですこれはあのそのですね！」

その台詞で俺は途端に恥ずかしくなる

ふむ、これは仕方ない

そう、本当に仕方のないことなのだ

「あ、あの、社さん？なにゆえこっちに来てるので

「……………」

「ちょ！何か行つてくださいよ社さん！」

とりあえず、俺は己の何かを守るために拳を振るつた

本当にやむを得ないことなので後悔していない

その些細な保身の帰り道、家につくまで二人で手を繋いでならんで帰つた

今まで頑張ってきたものが報われない

それは報いを誰かが、何かが与えるとたかをくくるからじゃないだろうか

それ相応に誰かが何かを与えると常識的に考えて、だがそれは何らかの要因が加われば成立しなくなると誰もがわかっていることなのに  
例えば、他者が認めない、成果を上げられない、結果を残せないなどのこと

なら彼女は、燦の要因はなんだったのか

もしかすると彼女は己が悪意に加担した偽善者だからと卑下していたからか？

だが、今となってはそんなことどうだっていい

光の中へ彼女を真っ直ぐな道に歩み出し、共にならんで歩く

闇の中で足掻いて、夢破れ、戦い終わった彼女に平穩を

その平穩には彼女の守ってきた笑顔があるはずだ

その笑顔の中で生きること、彼女の守ってきた笑顔が確かにあることを感じる事が今度は彼女がその笑顔を浮かべていられるようになる

そう、俺は信じたい

繋ぐ手、並ぶ肩、同じ道程を行く（後書き）

なんか色々と噴いたというかなんというか

今度はサノブの心が壊れそうになった

頭パーンツてホントになんなのよこの14話

いや、最初からこうするって決めてましたけど…形にするとね

もうね、とち狂ってひぎいって訳わかんなくなっちゃいそうなあば  
ばばばばばば

なにが言いたいかと言うと

「文才と経験足んねえ…！」

改めて絶望しました

二人をくつつけるだけでここまで苦しむとは

今回だけで四苦八苦していると出しちゃいけないものまで口から吐き  
そうすな

これもひとつの経験と受け止めておくとしまじょう

それでは次話にてまた

漆黒鎧兵日常録・双角鬼編（前書き）

15話だけどきっとこれはシリーズになるだろっ予感がしてこんな  
タイトルに

漆黒鎧兵日常録・双角鬼編

SIDE 茜

「うふふう…社様あ…」

「おい徐晃！朝だぞ！起きろお！」

「う、ううん…」

部屋の戸が壊れかねない勢いで開いた

そこには際どい服を着た銀髪の女性、華雄將軍がいた

はあ…またかあ

というか今日は非番のはずだからゆっくり休みたいのに…

のそりと体を起こし窓を見るとまだ日がやっと上り始めたばかり

視線を戻せば勝手に私の服を寝台の上に出してました

文官に混ざって徹夜して仕事を終えて…暫く寝ていたかったです  
が非番であろうと私はいつものように潰されるのです

これは私達鎧兵団が董卓様いえ、月様に仕える日々の記録

…ところで、何故私の服の収納場所を知ってるんですか？

あと鍵かけた筈なのになんで入ってこれたのでしょうか

最近華雄將軍が怖いです

場所は変わって訓練場

木斧を杖がわりに何とか立ち上がる

「はあ…はあ…今日は…これぐらいで許してやる」

「はあ、はあ…負けた人が言う台詞ですか」

地面に大の字に倒れた華雄將軍を見下ろしながら汗を拭う

この人との腕試しは徹底的にやらないと何度でも立ち上がってくる

から体力をこっさり奪われる

だが、これで眠れ

「お？なんだなんだ休みつて言いながら鍛練は怠らないんだな？」

「き、綺羅さん…」

調練場をあとにしようとする入り口で綺羅さんに遭遇してしまった

…むっ、相変わらず着物を扇情的に着崩し、私より遥かに大きく主張する胸

なんて羨ま…じゃなかった…破廉恥な

調練場の男性兵は皆視線がいつてるの丸分かりですよ

私を横切り、倒れてる華雄をじっと見ていた綺羅さんはこちらをとてもいい笑顔で振り向いた

物凄く嫌な予感がします

「華雄の馬鹿みたいな体力を削りきったか…ふん、面白そうじゃねえか 茜、俺にもちよつと相手してくれよ」

いや、もうこちらは無理ですって戦えませんって

しかし、嬉々として槍のかわりに棍を持って構える綺羅さん  
何ですかこれ

私、部屋に帰りたいのですが

じりじりと間合いを詰められていると調練場に今度は霞さんが

やった！あの人に助けてもらおう！

こちらに気付いた霞さん

私は彼女に懇願するようにつめて声を出す

「霞さん！」

「お？ウチも混ざってもええんやな？」

違あああうっ！！

なんでそう解釈したんですかあの人！

なんでこう、手合わせとかそっちに考えがいつてしまわれるのでし  
ようか

結局、私は続けざまに地に這いつくばることとなる

「痛たたた…少しは手加減してほしいです…」

余りの疲労に今度はお腹が空いてしまいました

眠る時間が更に削れるがここは一度、食事を取るとしよう

食堂に入ると直ぐに注文してぼうつとする

「もし…貴女が徐晃殿ですか？」

「はい？」

顔を向けると何かを言いたそうにしている文官の男性が

何か手元に木簡が見える

と言っか嫌な予感がまたしたのですが

「賈馱様がこれに目を通す様にとのことです」

「はあ…わかりました……」

うぐう

何故、また仕事が増えてしまうのですか

文官が去っていくのを見つめてもこの憂鬱な気分は晴れることはない  
やってきた朝食を食べながら休みを増やせないか考えた

ああ、そうだ

今日はちょっと町に行かなきゃならないことがあるんだったなあ

木簡を部屋に置いて町に繰り出す

行き先は鍛冶屋

何故来たのかと言うと鎧兵団に新参者が増えたからだ

あの特徴的な鎧を着て戦えられる者は少ない

元々、社様が自ら選定し新人を支障なく立ち回れるまでに鍛える  
だけど不在の今、鎧を着て戦えられるまで鍛えることはできない

それを踏まえて今回は私が既存の鎧を元に誰でも着て戦える鎧を  
綺羅さんと一緒に考えたのだ

それに加えて試作段階だけある鎧を着た部隊を作るつもりだ

「ごめんくださあい」

「おお！徐晃様、お待ちしていましたぞ」

「例の鎧は？」

「完璧とは言いがたいのですが、一応は形になりましたな」

「そうですか 一度見ても？」

「それではこちらに…」

全身をまんべんなく守るように部位が細かく組みあわさっている点  
は同じだが、致命傷や即死させられないように急所を中心に鎧が組  
まれていた

兜も口元が露出した仮面のようなものになっている

大体は最初の設計通り

あとはこれを店の主人と煮詰めていった

延々と話し込んでいると一人の男性がやってくる

そうか、もうそんな時間か

「すみません 今日はいままでです」

「そうですか それではまた後日ということですか」

「はい、失礼しました」

店を出て、人目のつかないところに男性と共に移動する

「…それで、どうでしたか？」

「は、残党兵を集めて再び攻めいることは明白、数は現時点では二千程かと…今なら容易に討てますが」

「いえ、相手が最大まで増えた後に軍を出すことにします 少ないうちに討つたとしても再び生き残った者が集まる 無駄な遠征を増やすことより一度の遠征で徹底的に叩かなければなりません」

彼は、私の隊とは別の私兵、いや間諜だ

彼は黄巾賊の残党の殲滅のために各地の小規模の賊徒に紛れてもらっている

それに彼だけでなく、たくさんの部下が各地に散って情報を集め続けているのだ

初めは詠様に頼まれて豪族や文官などに不穏分子がないのか調べることがきっかけで…

社様の行方を探すためにも使ってみたりしたこともあり、これはこの先にも鎧兵団に必要なことだと私は感じました

相手の情報をいち早く得ることで戦いを有利に運べる

相手の策に不足の事態を招く危険も減らせるし、その策を利用することだってできる

私はこの間諜を中心とした隊を鎧兵団に作ろうと思うのです

社様の行方を知った今はいつか戻られる日までにより精強になってお迎えしなければ

「それでは私はこれで」

「はい、後は帰宅しても平気です　お疲れさまでした」

男性が人混みに紛れて消えていくのを見届けて私も町に帰る

はあ、帰ったら仕事が残ってるのがなんとも言えない気分になる

私の休みどうなってるんだろう…

とりあえず一度帰ろうと歩いていると少しお腹が空いてきてしまいました

せつかなので近くの肉まんを買いにいったのですが

「……………」

「……………」

私の買った肉まんを見つめる一対の視線

ひよこひよここと揺れる触角のような髪の毛

私はあえて無視をしようとしていたのですが

どうもそうはできない

純粹すぎるその綺麗な眼差しに私の方が折れてしまう

「食べますか？恋殿」

「……………」

飛將軍呂布こと恋殿は私から受け取った肉まんを美味しくそうに食べる

どうやら彼女も帰る途中だったみたいで、私が肉まんを買ったところに遭遇してしまったようです

それにしてもずいぶん可愛らしく肉まんを頬張りますね…

なんとか癒されるというか

こんな彼女がいざ戦いになると誰も彼女に敵わないのだから不思議です

以前、私も挑んでみたのですがなんの苦もなく打ち倒されたときは本当に自信をなくして落ち込みました

その後によつてきた月様に慰めてもらったときは嬉しくも回りの視線が恥ずかしかったなあ

ほどなくして私が買った肉まんの殆どを食べ尽くした恋殿と帰宅した

日も沈みかけて、残った日の光が町を照らしいく

町にはぽつぽつと明かりが点り、かつて社様と見た蛭を思い出した

その懐かしさに少し切なさが入り込んでくる

そんなときに後ろから誰かに抱き締められた

「…茜」

「はい？」

「なんだか悲しい顔してた」

「……」

「悲しそうな顔はだめ、恋も悲しくなる」

「…はい、そうですね…すみませんね恋殿、心配かけて」

「そうだ、何より今は皆がいる」

「そもそも霞さんが彼らを確認しているのです」

「また再び必ず鎧兵団は立ち上がる」

「そのときまで綺羅さんと二人で立て直していかないと」

「…社様、私達は貴方の力でもあること…忘れないでくださいね」

「夕焼けを見ながら私は社様の帰還を夢見るのだった」

「ところで、いつまで私は恋殿に抱かれてるのでしょうか？」

「ん…」

「あつ、頬擦りしないでくださいっくすぐったいです」

「茜は柔らかくてきもちいい」

「ちよっ寝められてるのか分からないのですが、くすぐったいので一度離れっ」

「いや」

「れ、恋殿！待ってくださいっ！……あんっ…！」

……恋殿には良く抱き枕にされるので社様、本当に早く帰ってきてください

こうして私の休日は終わっていく

ちなみに今までの仕事量の問題から休みをもう少し貰うことが出来  
ました

これでやっとゆっくり眠れ

「おい徐晃！朝だぞ！起きろお！」

ませんでしたはい

せっかく頑丈な鍵をつけた扉に代えたのに平然と開け放つ華雄將軍  
の姿が

本当になんで簡単に開けられてしまうのだろうか？

華雄將軍が怖いです

それにどうやら安眠は当分できそうに無いようです……はぁ……

漆黒鎧兵日常録・双角鬼編（後書き）

茜はもちもちした柔肌持ちで小動物キャラだとサノブの妄想垂れ流  
してみました

気持ちの悪い作者ですなほんと

この小説の朱雫はきよぬーですはい

普段は着物を着崩した格好なのでぱっと見エロいな

太ももはちらりと見えて、胸は溢れそうです

前屈みになる男性兵は多いです

ちなみに

綺羅>茜>燦と胸のサイズがね

茜はあれだ

Working!のちっちゃくないよ!っていうちっちゃい先輩み  
たいな

燦はスレンダーだけど胸までスレンダー…

……頑張れ、燦

茜は恋の抱き枕になってます

羨ましいですね

自分は明命の抱き枕になりたいです

そついや鎧兵团って軍師が居ないや

今さら気づいたよ畜生

さて、これの次にあと一話落とせばついに反董卓連合編に突入します

これの次の話はそれに関連した話になりそうです

それでは次話にて

再会は運命か、宿命か（前書き）

THEピンクお目汚し注意16話

そして仁の名前…

再会は運命か、宿命か

S I D E 社

小鳥のさえずりに目が覚める

窓を見れば外が黄色く見えた

上る日の出は同じなのに何処か違って見える

というより状況が状況ですでに違うのだが

隣に顔を傾ければ、俺にしがみつき、幸せそうに眠る燦がいた

しかも一糸纏わぬ姿で

どうしてこうなったのか

そういえば昨日、久しぶりに酒を飲んだ後に珍しく燦が酔っていた  
時か

「なあ…社…」

「ん？」

「今日は…一緒に、眠ってくれないか？」

「ぶはあっ！？」

「汚いぞ仁…いきなりどうした？」

「いや…むしろこのまま私を抱い」  
「まてまてまてまて、  
落ち着け燦…  
本当にどうしたのだ？」

本当にいきなりすぎる

正直俺も仁と同様に酒を嘔きそうになった

顔を真っ赤にした燦はふらふらしており、今にも倒れそうな勢いだ  
そもそも今日の酒盛りは何故かいつもよりハイペースで飲んでいた  
わけて

そこまで強い酒ではないが、五本も休まずに飲んでいれば常人なら  
直ぐに酔う

まさか、今までしがらみから解放され、縛るものが無くなった反動でこんなことになったのだろうか？

だがそれなら今まで少しずつ発散してきたはずだが

仕方ない、今日の酒盛りはやめて寝るか

「燦、仁、今日はお開きだ」

「ん…」

「わかりました　それじゃ俺はこれで失礼します　また呼んでくださいね？」

「ああ、じゃあな…さてと…燦も部屋に帰って寝て…」

振り返ったら既に姿はなし

俺はてっきり自室に帰ったものだと思い酒を片付けて部屋に入った

「……………」

「……………すう……………」

何故か俺の寝台で寝ていた

てつきり入る部屋を間違えたかと思い確認するがどう見ても俺の部屋  
部屋に抱えて連れていこうとしたときにいきなりパチリと目が開く

「…社」

「部屋、間違えて…うおっ!？」

いきなり肩を掴まれたかと思うと寝台に引きずり込まれる

そういえば鉄鞭を片手で振り回せるぐらいの力を持っていたのを忘  
れていた

あっさり組み敷かれた俺の上にそのまま倒れた燦

本当に変なものでも食べたのか心配になる

「本当にどうしたのだ？」

「…私は…どうしても昔の時間が忘れられない……」

「馬元義の元にいたときか」

燦は小さく頷く

服を握る手は震え、残った傷痕がどれだけ深いかその一端を垣間見る  
どれだけ尽くしても癒ししか与えられない、治せない自分に悔しさを覚える

「今では夢にまでしつこく現れる…社…嫌なら嫌と言っていい…こんな穢れた私を…どうか…」

そうまで言って彼女の唇を奪う

実のところ、自分は初めどうすればいいかわからなかったのだが、自分を穢れたと言った燦の物言いに何処か怒りを覚えた

「燦、お前は穢れてなどいない　自分を卑下するな」

「社…」

「お前は自分がどれだけ美しいか分かっていない　今から嫌というほど教えてやる」

「…ま、待って………」

「お前から求めてきたんだ　俺は待たん」

「や、やしろ…あっ…!!」

そして気づけばこの様か

段々と昨日の恥態を鮮明に思い出してくる

結局、俺も酒が入っていたせいで何か強引といつかなんといつか

彼女の耳元で散々甘い言葉を囁き続けていたりしたなんて

なんだか昨日の俺を殴り倒したい

といつか燃やしてやりたい

もぞりと動き、燦も目を覚ました

頬を赤らめながらこちらに視線を会わせてくる彼女は大変いじらしい

そわそわして何か言いたげだが、口に出せずにいる

「…なんだ…その、すまなかった…」

……なんで俺は謝ってるのだろう？

もはやなにがなんだかわからなくなってきた

少し落ち着きを取り戻そうと水差しから水を二人ぶんの水を注ぎ、  
俺は一人で飲む

俺のさっきの言葉にさらに朱が増した燦はチラチラと見ながら

「……………社……………」

「…ん？」

「……………激しかった……………」

「……………」

俺は昨日に戻れるなら

自分を八つ裂きにして消し炭にしてやりたくなった

二人で起きた後に二人揃ってそそくさと今日すべき仕事に逃げてい

ったのだった

S I D E ?

「ご主人様、本当にここにいるの？」

「たぶんね…出会えたらいいんだけど」

「しかし、私には到底生きているとは思えないのですが…」

桃香と愛紗の二人を連れてお忍びである町にやって来ている

何故、天の御遣いの俺がこんなことをしているのかというそれは朱里たちとのある会話が原因だ

それは朝廷の高官が突然、兵を連れて逃げ出した話だった

「なんだよそれ…よくも朝廷に仕えられてたな」

「きつと、賄賂か何かでのしあがっていたのであろうな」

星と二人でそんなことを言っていると朱里が大量の木簡をもってくる  
二人揃って思わず顔をしかめてしまった

目の前で仕事をこなしていた雛里や桃香も思わず口を開けている

「実はですね　その彼らの治めていた町の住人全てが流れてきて  
しまいました、おまけに今まで隠していた仕事がかつちに流れてき  
てしまいました…」

朱里の申し訳なさそうなその言葉

実際今の俺は文字通り頭を抱えていた

外で鈴々と調練してる愛紗が聞けば激怒しそうな話だ  
何気なく木簡を見ると小さな案件から大事なものまで目をつむりた  
くなるようなものばかり

「ねえ朱里ちゃんその逃げ出した人達はどうなったの？」

「それが、ある村の義勇軍と戦いまして、滅ぼされてしまったよう  
です」

「これを見る限り、討たれるようなものだったのであろうな…義勇

軍の方はどうなったのだ？」

「義勇軍も行方知れずになりました…ただ、噂なのですが率いていた将が何処かに落ち延びていると」

朱里の話聞きながら木簡を次々に流し読みしていると一つだけ

おかしいものを見つける

「これ…日記…？」

「いえ、これは何かの連絡、取引の内容みたいですよ」

近くにやってきた朱里が言う

まだ完全に文字を読めない俺は虫食いの本を読んてるような気分で見ている

そして

「紫……芝鉄…羽…え？」

「どづした主？」

「紫芝鉄羽……」

「確かそんな名前の人ですねこれの持ち主を討ったのは」

まさか、いや、だが、俺というイレギュラーが確かにいる

そして紫芝鉄羽

いやこの人は紫芝社という人物ではないか？

俺がこの時代にくる前に突然行方不明になった人物

俺の尊敬していた先輩が

死亡したと伝えられているが、遺体もなにも残らなかったのだから

鉄羽なんて名前は彼しか名乗らない

「しゅ、朱里！」

「はわ！？な、なんですか？」

「この紫芝鉄羽って人の情報を集めてくれないか！？」

「わ、わかりました…あう、噛んじゃった……」

「ご、ご主人様？どうしたの？」

桃香が心配そうに訪ねてくる

そりゃいきなり人が変わったかのような俺にビックリするだろう  
生きているかも分からない人なのだから

だが、もし生きているのなら俺はもう一度彼に会いたかった

そして今日、俺は朱里の掴んだ情報を頼りにここまで来たのだ  
近くにいた人に話しかける

「あの、すみません」

「ん？なんだ坊主」

「この町に紫芝鉄羽さんって方がいると聞いてきたのですが」

「……おおい！閻忠！」

「はあい！なんでしようか！」

閻忠？たしか皇甫嵩に仕えていたんじゃない？

そんな疑問をよそに家の屋根から眼帯をした青年が飛び降りてくる

「馬鹿！あぶねえよ！」

「す、すみません！それで俺に何か？まだ屋根の修理が終わってないんですけど」

「お前、確か鉄羽の旦那と師弟関係だったろ　この坊主が探してんだと」

「はあ、社さんにですか？」

彼の言葉に確信した

やっぱり、先輩がこの町にいる！

「すみません！会わせていただけませんか！」

「……………えつとお、後で戻るんで、ちょっと彼らを案内してきます」

「おう、わかった」

「それじゃあ、ついてきてください」

案内されたのはどこかの裏庭

ここに来れば彼に会える

その期待に浮かれていた俺はこちらに迫る影に気付かなかった

「!!!ご主人様！」

「愛紗!?!」

俺を押し退けて偃月刀を構え、何かを防いだ

突然の襲撃者の顔を見て桃香は相手を見て声をあげる

「閻忠さん!?!どうして!?!」

眼帯をつけた人懐っこそうな面影はなく、俺たちに明確な敵意を向けていた

ってなんで敵意を向けられなければならないんだ？

拳を離れた閻忠さんはバック転をして距離をとると見覚えのある独特の構えを取った

「いきなりなんの脈絡も無しにあの人の元に来るなんて怪しすぎる…さては命を狙う刺客か!？」

「ちょ、ちよつと待ってくれ!俺は話がしたくて」

「ええい、問答無用!刺客ならなおさら会わせられない!」

ああ、物凄い勘違いされてる

桃香と愛紗も思わずあきれているようだ

まあ、俺も凄い脱力しそうになったんだけどそうはいかない所があるそれは片足を軽く浮かせた異形の構えが原因だった

「仕方ありませんご主人様、ここは痛い目に遭ってもらいましょう」

「片目を失おうとも鬼の気迫は衰えない!さあ、この鬼の拳を恐れぬならかかってこい!」

「ならいくぞ!」

「気を付ける愛紗!そいつの戦い方は」

俺が叫ぶも遅く

愛紗の鋭い突きを完全に受け流した

そして受け流した勢いにのりながら回し蹴りが迫る

なんなく防いだのも束の間、次は右フックを回転にのせて次々と回りながら拳、あるいは蹴りが迫る

反撃しようとするのを受け流し、さらに勢いを増した

初めは良く回る独楽のような動きから風を巻き込むような轟音をあげ始める

「！？なんだこの動きは！」

「おおおりゃあああっ！」

間違いない

これは、この動きは、昔に見た神々廻古武術鬼拳の型

初見の人間にはその異形の技の攻略は不可能だ

そもそも、眼帯を付けて視界の狭まってる筈なのに粗削りながらも使いこなし、愛紗の動きになんとか追い付いている

本気を出していないとはいえ、戦いの流れを完全に掴んでいる

このままじゃ愛紗が…！

「あっ」

「「あっ」

と、いきなり足が絡まったのか盛大によるめく閻忠さん

思わず桃香と一緒に声をあげてしまった

全員、呆然としたが愛紗がいち早く復帰する

「！隙あり！」

柄を強く握り直した愛紗は石突きを素早く繰り出した

唸りをあげたそれは腹部に吸い込まれるように決まる

瞬間、鈍い音

空気が漏れるような声をあげて彼は後退りする

ふらつく彼の間隙だらけの姿に立て続けに刃を返した偃月刀を薙ぎ払

った

「ぐえへーっ!!」

間抜けな声をあげながら吹き飛ばされているが、とてつもなく鈍い音がした

地面に落ちた今は立ち上がれないだろう

愛紗は偃月刀を突き付けて動きを封じる

流石に突き付けられ、愛紗から放たれる闘気に敗けを認めたようだ

「くうっ！よもやこんなときに敗れたとは、この閻忠、不覚！もう煮るなり焼くなり隙にするがいい」

なんとというか潔い以前にやたら暑苦しいというか…

そんな凄い悔しそうな彼に俺は口を開いた

「待ってください 貴方は一つ勘違いしている」

「勘違いだつて？」

「まずやし…じゃなくて鉄羽さんとは友人で彼の無事を知り、訪ね

てきたんです」

ある意味嘘はついていない

ちよつといざこざがあつて喧嘩別れしてしまったけれど、俺の尊敬している人が行方不明になつてたのは間違いないんだ

俺の言葉を聞いて何か考え込んでいるようだ

彼の答えを聞く前に愛紗はもう敵対しないと分かると武器を引いて歩いてきた

「愛紗ちゃん大丈夫だった？」

「はい、いたつて平気です　あの動きには驚きましたが…」

彼は鬼拳の型を使っている

やっぱり先輩が教えたんだろうな

それにしても俺はここまで来てしまつたが、会えたならなんて話せばいいだろうか？

肝心なことを忘れて、愛紗と桃香の会話を聞き流していると入つてきた道に見覚えのある人が入つてきた

撫で付けるようにかきあげられた黒の髪、額の左側の消えない傷

やっぱりそうだ

記憶に残る姿のままだった

「仁？こんなところで何を」

「あ、社さん…」

「先輩！」

「…！？—…刀…なのか？…どうして…？」

「こうして俺はこの世界で紫芝社と再開したのだった

S I D E  
o u t

今は翼を畳み、刃を置いて、牙と矛を隠した男

その男の背を追った天の御遣いを着飾る男

二人はこの外史に来るべくして呼ばれたのだろうか

彼らの間にあるのは運命か宿命

見えないうねりは二人を巻き込みどこへ導くのだろうか

目をつむりたくなるような強い風が辺りの木をざわめかせる

まるでそれは嵐の前の静けさのような…

ただわかることは

それはついにこの外史の本当の戦いが始まるということだった

再会は運命か、宿命か（後書き）

…あれ？

あと一話続く…

ということとは18話からじゃないと連合に本格的に入れそうにないです…

ついに社と一刀はあっちゃいました

これから二人はどうなっていくのやら

そしていきなりお目汚し申し訳ない

まあ、社くんと燦は生暖かい目で見守ってやってください

これからもあんな最初のような感じの話がちょこちょこ出ます

あまり期待しないでね

あと仁には参考にしたキャラがいます

わかる人いるかな？

あと名前は閻忠に決めました

閻忠おめでとう

連合をどんな話にしていくか考えるとどうしてもいくつか黒いサノブが出てしまう…

それでも読んでいただければ嬉しいです

気分転換の為の日常編ですが、何かこんな話が見たいとかあればネタをください

ネタに困るサノブはきつと書いてくれます

それでは次話にてまた

二極邂逅（前書き）

こいつはあれだ

一刀の皮というか着ぐるみを被ったなんかだ

そんな17話

一極邂逅

SIDE社

自宅にて

たった二人

ある人物と向かい合っていた

北郷一刀

かつての後輩

神々廻一門を知る数少ない人物の一人

それがどういうわけかこの時代、いや世界にいる

しかも一刀はあの劉備らと共に義勇兵を従えていた

先程、仁に偃月刀を突き付けていたのは関羽、桃色の髪をした方はその劉備だという

……それにしても仁のやつ、勝手な思い込みの勘違いから拳を振るうとは

既に拳骨を入れたが、今度の組み手でいつもより三割増しに痛め付けておこう

それはともかく今は一刀だ

別れて以来何があつたか記憶にある一刀と違い、雰囲気が変わつたな  
少し話をするために燦達には出払って貰つた

元々、俺達は時代の違う人間だ

燦達にあまり聞かせるような話ではないのだからな

「前よりはいい目をするようになったな一刀」

「そう、ですか？」

「無駄な悩みを抱えまくつた青二才だった」

「う、今はどうなんです？」

「……現実を少なからず直視するようになった青二才と言ったところか」

「青二才が消えてない!？」

「俺から見ればまだまだ青い……ところで一刀、お前、人を斬ったな？」

「っ!はい……」

ビクリと反応したところからまだ嫌悪感を拭えていないか

一刀の目を見たとき以前ほどの優しさが減った気がしたから問いかけたが

やはり優しすぎるこいつは受け止めていくのには時間がかかるようだな

お陰でやや暗さも見栄隠れする

というよりはいつにも増して青くなった

「お前はいつからこの世界にやって来た?なにをやっていた?」

「そうですね…来たのは本格的に黄巾の乱が始まる少し前からです

桃香…劉備達と桃園の誓いをして、俺は天の御遣いの名を使って義勇兵を集めました」

御輿になった、というところか

あの時の民の気持ちを考えれば希望になろうとしたのだろう

本当に、誰かに希望や光を与えることは変わっていないな

「先輩も義勇兵を率いているって聞きました……それですね  
俺は先輩にも加わってほしいんです」

「一刀のところにか？」

強くうなづく彼は、俺たちが何故この時代にいるのかその疑問と不安よりも目の前の現実をとっている

俺の見ぬ間に心は大分強くなった

脆さも増したが、どうやら支えてくれる者がいるように見えるからこそ俺は彼にこう答えた

「悪いが一刀、俺はお前達の前に行く気は無い」

「な、なんで……？」

「義勇兵に關してもご覧の通り、俺は今ただの一町人だ　いずれは元の鞘に収まる気だが生憎とここで過ごす間は刀を振るうつもりは一切無い」

「そう、ですか…」

「そもそもお前が戦っている理由はなんだ？」

「理由：俺は表にいる桃香の、劉備の夢を、皆が笑顔で幸せに暮らせる世界を作る、その為に戦います」

「皆が笑顔で幸せに暮らせる世界…か…一刀、今のお前にはあまり言いたくはないがそれは夢物語もいいところだぞ」

「わかってます…先輩の本家で嫌というほど否定されてきてますから」

苦笑しながらお茶を飲む一刀に本家の日々を頭に過る

一刀も思い出したのか、どれだけの数多の過ちと血が流れたのかをこいつは知っているからか、何処か懐かしく悲しい目をしていた

一刀は一息つくともた喋り始める

「夢物語でも目指そうとするのは悪いことじゃないと思うんです

実際に助けた人々がありがとうと言って暖かい笑顔を向けてくれる　それがあるから無駄なことなんて俺は思わない…明日を、日

々を繋いでいくのが天の御遣いとしての俺のすべきことですよ」

「その為に誰かの命を奪っているという矛盾を孕んでいるのにか？  
生かす命を選んでいるようなものだとかわかんお前ではないだろう  
？」

「俺達が生きる日々は落とした命達が必死に生きたかった日々です  
…どうやってその命と向き合っていけばいいか皆と相談してますが  
まだ自分には答えは出ていませんし、思案中です」

「……そうか」

「…普段なら先輩は今の俺を叱りそうなこと言っちゃったんですけ  
ど…？」

「普段ならな　だが、今はそれが限界だろう？お前の考えが聞け  
たならそれでいいのだ…：…なにも考えていなかったら不義の思想を  
語る小者として本気で殴り飛ばしていたがな」

「殴り飛ばされなくて良かったあ…！本気は絶対に死ぬる！」

少し引き気味になった一刀を見て笑いそうになる

昔はよく折檻として拳骨を見舞ったりしていたのが懐かしい

本当に、思いがけないとはいえ旧友と話をすると懐かしいことばか  
りを思い出してまるで老人だな俺は

それにしてもそうか

一刀の青さが増したのはその夢のせいということか

燦のより遙かに重い問題だというのに立ち向かう彼の覚悟は如何なものか

支える人がいるからこそ無謀にも夢へと歩みを止めないということなのだろうな

俺には燦や仁、茜達鎧兵団と教えを守ることと手一杯、己の実力でしか抱えられないもの以外まで抱え込もうなどと思えん

それは今の乱れた世から見たら卑怯に映るのだろうか

今は不義を打ち破り、抱えたものを守り抜くぐらいしか生きられない

落ち着けるようになるのはいつになるかわからないが、ただの慰安目的でなく、燦達と穏やかに生きる日々を目指すのも悪くは無いか…

「……そういえば」

「？」

「こんな乱世のことだから、神々廻の炎、使ってしまったりしましたか？」

「……黄巾党との戦いに一度、不義を働いた外道との戦いにまた一

度、使った」

「先輩……」

「大丈夫だ、この力で命を落として大切な者達を残す真似はしない」

「……本当に、よっぽどのがなければ使わないでください」

「わかっている　少々、俺の守りたいものが増えすぎたことだしな」

外に目を向ければ、仲良く劉備達と談笑する燦や仁が見える

それに茜達鎧兵团も、俺が過ごした村の人々も、何もかもが俺を生かす為の枷だ

そう簡単に死ぬつもりはない

「それじゃ、俺達は帰ります」

「町には泊まらないのだな」

「戻って政務に取り組まないといけないので」

「そうか…頑張れよ」

日帰りというか随分と忙しいようで、よくもまあ貴重な時間を割いてまで会いに来たものだな

わざわざ会いに来たのだから町の出口まで燦と共に三人を見送りにやって来た

どうでもいいことなのだが仁の奴は今この場にいない

というのも一刀の回りが女性に恵まれているのを知ったときに

「くそう…！なんでお前はそんなに囲まれてるんだ…！」

「あの、閻忠さん？」

「なんて羨まし…じゃなくて…けしからんお前の掲げる理想なんて俺は認めねえ！よってお前だけには真名は預けねえかな！？」

「は、はあ…」

「ちくしょーっ！覚えてろよこの女誑しい！次会うときは地に伏せさせてやるからなあ！」

何処か雑魚とか小者とかそんな単語が浮かびそうな捨て台詞を吐き、

嫉妬と憎しみのこもった睨みを一刀にきかせてものすごい早さで町を走っていった

羨ましいとか殆んど口から出かかっていたところから本当に悔しかったのだろうか

そもそも俺だつてこいつが綺麗な女性二人を伴つて、さらに二人を含めて普段からご主人様等と呼ばれていた事に内心引いた

煩悩まみれな一刀の性根を一度矯正として叩き直してやろうかと考えたのは俺だけの秘密だ

一刀が何処か冷や汗をかいていたように見えたが感付かれたか？まさかな

「あの、鉄羽さん？」

「ん？」

少し緊張気味ながら劉備が声をかけてくる

大方、何を言つて来るか予想がつきそうだが

「皇甫嵩さん達の話聞いて考えたんですが、よろしければ私達と一緒に行きませんか？」

「その件なら一刀にも言ったが、俺は共に刀を振るうつもりは無い  
何より掲げる理想の矛盾と未だに向き合えていない者の元に俺  
はあまりつきたくない」

「矛盾…？」

ふむ、彼女いや、関羽も矛盾に気付いてないのか

一刀が口を開こうとするが俺の視線に気付き押し黙った

この問題は己自身で自覚し、理解しなければ意味がない

誰かに教えられて気づく等と甘く優しい真似は問題の重みを軽くする  
如何に早く気付き真摯に向き合うか

「気付かなければ、逆に俺達は劉備殿に刃を向けることになる  
忘れるな、考えろ、己の矛盾という過ちを、向き合うことすらでき  
ていない者の理想はただの夢でしかないことを」

「は、はい…」

「……もしかしたらいずれまみえる可能性があるかもしれん　そ  
の時に貴女の考えを聞けることを祈っている」

「鉄羽さん……」

「それじゃあ先輩、また会いましょう」

「ああ、また会おう一刀」

こうして一刀達は帰っていった

まったく、喧嘩別れをした仲だというのに普段通りに接したとはな  
しかし、史実通りの流れに進むなら早い内にまた相對するはず

「敵同士にならなければいいんだがな…」

「???なんか言ったか社」

「いや、何でもない 俺達も帰ろう燦」

遠くなる一刀達の背中に一瞥をくれて燦と寄り添いあつように帰る  
のだった

S I D E   o u t

社と一刀が別れる直前

近くの茂みに男が一人、その様子を見ていた

二人が別れたのを見計らい、男も移動する

しかし、男は町に入るのでも街道を歩むのでもない

ただただ暗い森へと歩いた

そしてその先に新たに一人の男

二人は鏡あわせのような意匠の施された服を着、そして髪の色が赤と青の違い以外そっくりな容姿をしている

青い髪の男は口を開いた

「兄さん…やっぱりあいつの言う通りだったよお…兄さんを殺した

社に間違いないよあ…それになんかよくわかんないけど北郷のガキもいたよあ」

「弟よ…どうやら奴の言う通りのようだなあ…弟を殺した社に間違いないならあ…北郷のガキも目障りだなあ…だとするとあの男についてった方がいいなあ」

「「我ら兄弟を殺した社に復讐するために」」

二人は口から赤と黒の入り混じった炎をこぼしながら静かに闇に消えていった

「…!?!?」

「?どうした社?」

「いや…何でも、ない…」

町の外の森、その一点を社は見詰める

それは懐かしく、憎く、そしてあり得ないはずの気配を

(馬鹿な…今さっき…ほんの微かに神々廻の炎を感じた……だが、  
今のは…)

社にとって否定したい事実、だがもし現実であるならば

(少し、警戒しなければならぬか)

社は再び己が剣を握らなければならない日が迫ってきていると感じ  
ている

だがそれとは別に沸き起こった、いずれ己の身に降りかかるだろう  
問題

今は胸の内に留めておくにしても社は言い知れぬ不安を感じるのだ  
った

二極邂逅（後書き）

やっと投稿できた…

テストとかで更新が思うように出来なくて思わず焦りました

それにしても愛紗空気

すまんかった…

そしてなんか変態臭のする二人組登場

むしろサノブが変態臭だしてんじゃね

とにかく怪しい二人組を登場させたし、次回から心置きなく反董卓連合に取りかかれます

そしてオリジナルキャラの乱舞になるだろうというカオスっぷりで進めます

さて、連合は何話分になるんだろう…

とにかく次話にてまたお会いしましょう

再起飛翔（前書き）

反董卓連合編序章な18話

オリキャラがまた増えちゃった…

## 再起飛翔

ある時、大陸をある話題が瞬く間に広まった

### 霊帝の崩御

そしてそれを皮切りに朝廷内の権力闘争は激化、流血を伴うものになる

やがてそれは何進の暗殺へと繋がり、何進の部下は宦官の排除を試みた

もう既に漢王朝には力は無いのは各諸侯の目に見ても明白だった

宦官の抹殺より逃れた十常侍の張讓は、先の黄巾の乱において三万の軍勢を単身で討ち取った呂布や神速の張遼を抱えていた董卓に目をつける

強力な軍事力を手にいれることで外側を固める腹積もりだ

人の良さそうな印象を浮かべて董卓に上京命令を発する

一方でもう一人生き延びた十常侍の中心人物、趙忠は中の権力を完全に固めるべく暗躍

少帝に近い位置にいる張讓と趙忠を疎むものも多く、いつ今の地位を脅かされるかわからない

そこで何進の暗殺役や身辺警護をさせていたある人物に自分達にとつての障害を誰にも知られることなく始末させた

あの十常侍に刃向かえば何者かに殺される

その事があり、ついには張讓、趙忠の二人を中からも外からも失脚させることは叶わなくなってしまったのだった

しかし、彼らの権威の独占は長くは続かない

夜の森の中、傭兵の一団が歩む

皆、趙忠の私兵達である

それらは大量の物資、食糧、そしてまだ若い女性達が捕らえられていた

彼らは、ただの略奪をしたわけではない

張讓、趙忠に刃向かった文官を始末したあと、さらに見せしめとして家を没落させ、そこに私兵達に略奪をさせていたのだ

男どもは皆殺され、女性の僅かに付き従っていた侍女や文官の配下、妻子は皆捕らえられ私兵達の慰みものにされる

荷物扱いとして荷車の中で一人の幼さの残るある少女は絶望しかない空気の中これまでの自分を思い出す

自分の力を生かそうと仕官した

親や姉妹達皆含めて比類なき才を誇ると自負して漢王朝を変えることを夢見た

しかし、自分の主をわけのわからないまま失い、左遷させられ、そして彼らの残した家族をあの十常侍から遠ざけようと動こうとして…

「おのれ…我が大望も何もかも奪う気か…許さない……奴等は…奴だけは……いつかこの手で…」

得物なき今の少女は呪詛を唱えるように呟いていた

そんなときに荷車の揺れが止まる

「なんだ…？何が起きた…？」

彼女の疑問を浮かべる間もなく続く悲鳴と怒号

傭兵どもを狙って山賊にでも襲われたか？

そうならば他の女性陣が危うい

荷車の隅に彼女らを避難させて少女は守るように入り口を睨み付けた

そして現れたのは

全身に返り血を浴びた漆黒の鬼が、二刀を携えて現れた

恐怖の象徴のように見受けるそれは月明かりを浴びて逆に幻想的で  
まるでひとつの芸術のように見える

荷車にいた誰もが魅入られた

次は自分があるに殺されるかもしれないのにその魔性の魅力という  
のか視線を離すことができない

「…これは…奴隷商か何かに売り付ける気だったか…放っておく  
ことは出来んな……」

鬼が喋る

くぐ持った声の低さから男であることが分かる

「貴方は…貴方は一体？」

荷車の中で最も魅了された少女は目の前の鬼にそう言わずにいられた  
なかった

その言葉に答える間もなく荷車の外に鬼は出ていく

少女は慌ててそれを追って外に出、それを見た

隻眼の鬼、一角の鬼、片角の鬼

彼らを守るようにいる鬼兵

そしてそれらを束ねるようにさっきの鬼がいた

「鬼の…王…」

少女、司馬仲達は中心に立つ鬼、紫芝社をそう呼んだのだった

時は戻り、傭兵達が歩む道のりを見ることが出来る山道に場所を移す

傭兵達の様子を眺めている一対の眼差し

外套こそないものの、ただ一人陣羽織が組み込まれた鎧を着た社だ  
兜までは被ってはいないが、既に今の彼は在りし日の戦鬼・紫芝社  
そのもの

彼は董卓の元にいる茜達の現状を聞き及び、  
茜達には十常侍から董卓を守ること手一杯だと言っことを知らされた

そして賈馱のある命を秘密で受けた鎧兵団は茜を社に派遣、助力を願う

彼は洛陽に茜を帰し、綺羅に兵を町にこっそりと二百人程潜入させて再起する準備を始めたのだ

十常侍の私兵による文官達への抑圧、弾圧、略奪を阻止すること

恐怖による内部支配の助長を断ち切ることを承った社は遂に行動を開始したのだった

「数は五百ぐらいか…力量もバラバラ、雑多に兵を集めただけの烏合の衆か」

「だけど十常侍がなんの考えもなしに雇ってるとは限らねえぞ？」

「わかっているさ綺羅 武将格も混ざっているな」

一角の兜を被り、黒い鉄槍を肩にのせている綺羅が社の隣に立つ

そして右側だけに角が生えた兜を被った者が社の右手をそつと握る

「…戻ってくるのか この流血の世界に」

「大丈夫だ…私は待っているより共に家に帰りたいのだ」

「怖くなったら退けばいい 俺は、我らはお前の無事こそが大事なのだからな燦」

社は思い出す

己の再起の際に燦も戦場に戻ると言い出した時の事を

その決意は本物で社の説得も空しく、仁と綺羅に懇願されて折れる  
しかなかった

ならば必ず燦を守らねばならない

自分は戦場で倒れることは許されない

今まで教えに生きて男が初めて違う理由で生きることを決意した

それは誰にも悟られない彼の新たな楔

「お館様、閻忠様より準備が完了とのこと 何時でも行けます」

顔を覆うように捻れた角が巻き付いた隻眼の兜を被る仁が山中に兵  
を率いて潜む

傭兵達は気付かない

この道を既に鬼が囲っていることを

「よし、綺羅は持ち場に待機を」

「わかった」

「燦」

「ん？」

「本当に大丈夫なのだな？」

「ああ、大丈夫だ社」

一度燦を抱き締めて社は二刀を抜く

茜自ら届けた社の得物は月明かりに照らされて鈍く輝いた

燦も鉄鞭を握りしめる

そして始まる

表舞台への飛翔が

ある一人の傭兵は突然の事態にもひどく冷静だった

闇夜に紛れた矢が左右より降り注いだかと思うと次の瞬間には黒い鎧を着たもの達が声もあげずに襲いかかる

自分達の攻撃に一切怯むことなく、頑丈な鎧に任せて懐に潜り込んで一太刀入れてくる

一人、また一人と瞬く間に倒れていく

もはや勝ち目なしと逃亡を図った顔も知らぬ同胞は、何処から飛来した槍に貫かれて地面に縫い付けられた

そもそもこれまでの人生が上手く行きすぎたのだ

仕事は没落した家や雇い主に刃向かう家を襲うこと

自分にとっては簡単すぎる仕事でこなせば報酬は豪遊出来る程の資金を

何かがあれば蜥蜴の尻尾切り宜しく見捨てられるだろうことはわかっていた

今の目の前に広がる惨状を見てるようなことになるぐらいに理解していたつもりだった

しかし、傭兵であるはずの己が盗賊の様なことを続けていたのだ

どうやら天は彼らの死を前倒しにしたらしい

呆然としていると目の前に無駄に自信家な同業者が倒れ伏す

一番率先して非道に手を染めた彼は自分に手を伸ばして助けを求める

なんとも不様なものか

次には自分もあなるのだろう

そして彼の首は薙刀で払われた

当然の最期か…

他人事のように考えて目の前の鬼を見据える

陣羽織が取り込まれたような鎧姿

全身を血で濡らした鬼が己を冷たく睨む

気付けば回りで戦闘の音が聞こえるのにここだけは自分以外の仲間  
は誰も立っていない

「…どうした 得物は構えないのか」

「ん、抜くか抜かないかは自分の意思で決めるもんっしょ？」

「この中ではお前が一番強いはずなのだがな」

まさか話しかけられるとは

意外とお節介さんなのかな？等と考え出す

そういえば声がやんでいる

もう自分しか生きていないのだろうなと何処までも穏やかに思考し  
ていた

「それだけの力量を持ち得て居れば逃げおおせられたらう 何故だ？」

「なに、自分の仕事に嫌気がさしていてね まああんたが私のお迎えならば喜んで差し出すさ ってそもそもあんたみたいなのを目の前にして逃げれるわけないじゃない」

自分より遙かに上の力量を持っていることはわかっている

腕利きをなんの苦もなく切り伏せたのだから

その洗練され過ぎた腕前に勝てるわけがない

戦いを傍観していた傭兵は相手をそう見定める

「……………」

「ん？突然黙りこくっちゃってどったの？殺るならさくつと殺つちやいなよ」

「十常侍に関しての情報が欲しい お前は生かしておく」

「ああ、それなら、はい 縛るなりなんなり好きにしてよ 抵抗しないから」

何もかもが投げやりにな傭兵は大人しく降参した

あのいけ好かない雇い主の情報を聞き出そうとするといふことは、雇い主の失脚とかを狙ってるに違いない

そうなるならもう少し人生楽しめるかもしれない

こうして最後の傭兵は捕らえられ、回りに十常侍の私兵の一団は壊滅した

鎧兵団は夜闇に紛れながら再起し始める…

## SIDE 茜

最近、十常侍の二人の機嫌が日に日に悪くなっている

というのも全ては私と詠さんの細作に既にその様子は筒抜けになっていたりするのだが

さて、先日霞さんと恋殿の山賊討伐の遠征が帰還しました

そのなかには綺羅さんの隊も混ざっている

綺羅さんには山賊の遠征と見せかけて途中で社様の滞在する町に兵を移動させるからです

そういえば以前やっと社様に再会した時、嬉しさのあまりに抱きついてそのまま泣き崩れてしまっ…

回りの視線が恥ずかしかったです

それに皇甫嵩殿改め、燦さんには少し嫉妬した

だって社様とその、夜伽、を、…と、とにかくっ！私を差し置いてそんなこと羨ましいとかずるいとかやましいことは思っ…  
っ！

そ、それに私の方が燦さんより胸は大きいのですっ！

…でもどこか負けた気がしたのは気のせいでしょうか？

そこはまずおいといて

社様には詠さんより、十常侍の抱える私兵の排除をお願いしました

時間はかかりましたが社様も快諾し、遂に鎧兵団は復活

ただ二刀を振るう社様を間近で見られなかった…

間諜隊によると社様は少数の精鋭のみでこれまでに私兵の一団を七つも全滅させています

一方で突然、消息を立て続けに絶たれて十常侍が慌てふためいていい気味です

そして今日は詠さんと綺羅さんの二人に現状を確認しに行くことになりました

「綺羅もお疲れ様　どう？調子は」

「まさに破竹の勢いつてやつだな　傭兵の強さはまちまちだしそこまでの統率はないからこっちは今は誰一人として死者はいない　て言うか社の戦いをちゃんとみたのは初めてだったが…ありや修羅だな恋の奴と戦えるんじゃないか？」

「そんなに？まさか茜の鎧兵团つて凄いとこるなんじゃ」

「あ、そういやこないだ壊滅させたとこにいい人材を二人見つけたんだよな」

人材？初耳なのです

鎧兵団で武将として引つ張っていけるといことでしょうか

「あ、でも一人はこっちにつけてやりたいって社が言ってたな…名前前は高順って奴だ　元々あいつらの私兵だったが、俺達に協力してくれる」

「そう…今は十常侍達との関係を断ち切るにしても一人でも多くの味方が欲しいわ　僕がもう一度見定めてからどこに入れるか決めましょう　出来れば恋のところに入れたいわね…もう一人は？」

「ああ…性格に難があるというかなんというか…色々と目を離せない奴なんだよ」

と言ってこちらをみる綺羅さん

「ってえ？なんなんですかその目は」

「社狂いつてやつか？」

その一言に詠さんまでこちらを見る

「ちよっ！私はそこまで社様に狂ってませんよ！？失礼な！」

「ちよっ！社様への想いが激しすぎるとは多少自覚してますが引かれるほどのものではないですからね！？」

「俺から見た評価なんだが、今は社に心酔、いや、狂信してるがおりや人の下につくような娘っ子じゃねえ……あんな才能に溢れたやつはそう多くは見たことがない　ホントに底が知れないってのはああいうのなかねえ」

「それは謀反を起こすような人物でしょうか？」

「社がいる限りは大丈夫だと思う…たぶん」

「こ、怖いこと言わないでくださいよ」

「まあ、社からしたら何でも言うことを聞く第二の茜みたいなもんかもな」

なんてこというんですかこの人は

なんだかまるで私が犬みたいな言い方じゃないですか

そして忠を尽くすことに関しては問題はないという結論に

十常侍を失脚への準備がこうして着々と進んでいく

社様との再会した時に話された

「この大陸にあるもつとも巨大で不毛な不義を刈り取る」

月様への鎧兵団一同の恩義を返し、そして彼女らを救う

それが今の鎧兵団の目標

しかし、社様はそのあとのことを既に考えているのだろう

復活だけではない

きつと社様のことだ

あの目は確かに天下を見据えていたのだから

## 再起飛翔（後書き）

劇的と言つよりこそこそ復活しました鎧兵团

そして個人的に好きな司馬八達が一人が参戦

こいつの性格には戦国で婆娑羅なゲームの君子殉凶を参考にしています

参考程度でただのツンデレ風味な感じがするだけの仲達なだけですが

どうでもいいけど婆娑羅って狼藉って意味もあるからあのゲームはまさにいろんな意味で狼藉働いてるよね…

ちなみにサノブ的にオリキャラに関しては忠義に定評のある成公英を鎧兵团に迎えたかったりする

が、今は反董卓連合

今はこれ以上鎧兵团側にはオリキャラは擦り込まない

で、この作品もとい外史ではサノブ三国志と勝手に命名します

それぐらい話が暴れするからです

反董卓連合編がどれだけ続くか：

とにかく今回の話、社達鎧兵団はこれで完全に董卓陣営に入りました  
つまり敵は連合なんです、連合だけでなく十常侍がいます

社達にとっては二つの勢力を相手取ることになるのです

どの勢力が生き残るのか、それを楽しんでもらえるとサノブは嬉しいです

それではまた次話までごきげんよう

戦鬼帰参(前書き)

予約投稿19話

## 戦鬼帰参

S I D E 社

夜襲による奇襲により次々に私兵団を滅ぼして一ヶ月、その撃破速度は更に上がっていた

その最たる原因は二人の新たな参入者によるところが多い

一人は司馬仲達

つまり西晋の礎を築いたとされる魏の謀臣、司馬懿その人

まだ子供ともとれるほど幼さの残る少女（本人は大人と言っている）だが、少し細身の剣による高速の抜刀剣術を操り切り伏せていく

しかし、彼女の凄まじさはその武ではない

武など彼女にとって手段のひとつにすぎない

彼女の本領は軍師として用いられる策、司馬懿により遙かに戦いの運びが楽になった

勝利するまで徹底的に組み上げられた策に相手に抵抗を許さず、こちらには楽をして勝てるほどに効率がよくなった

そしてまた一団、壊滅させる

荒くれものの集まりに近い傭兵達はまさしく彼女の掌により転がされ、俺は思わず寒気がはしる

それほどまでに有能…いや、有能過ぎる

俺は彼女を御しきれんだろうか？

史実では常に誰かに謀反をいつか起こされるのではないかと警戒されていた

その事を知る俺には内心不安要素でもあり、彼女を手放すことが危険でもあると悟った

彼女の性格は本当に純粹すぎる

時折除かせる憎悪の感情さえ真つ直ぐすぎた

燦や綺羅もこの俺に対する狂信的な信頼には警戒心を感じたはずだ

そしてその性格が逆に彼女を一人にさせてしまいそうなのだ

抛り所も大望を失ったと語り、漢王朝に失望したとすら話していた

燦と違うのは、憎しみが異様に強すぎたこと

「向けられるのは漢王朝だけ…か」

本来大陸にないはずの抜刀剣術はそれほどまでに才能を感じられない  
ただ執念と怒りが研ぎ澄まし、憎悪と絶望が写し出されたかのようなそれはまるで凶刃だ

剣を抱き締めたまま睡眠をとる表情は僅かな休息を感じられるのか、  
年相応の少女のそれ

司馬懿……霊華の頭をそつと撫でる

霊華はくすぐったそうにするもすぐに穏やかな笑みを浮かべていた

独りにさせてはいけない

だからと言って俺に依存させるままなのもよくない

「社、この間保護したもんだは無事に長安の隠れ家に移動が完了したと仁が」

「わかった　今回の戦いであらかたの討伐は終わりだ」

天幕の中に入ってきた燦の報告を聞き、俺は霊華の元から離れる  
後ろの霊華を見た燦はとたんに不安な顔つきになった

「社…霊華のことだが…」

「不安か？」

「いや…あの娘はまだ全てが未熟だ…私あの娘に友が必要だと思っ  
思う」

「友か…むしろあの娘には本音を話せる親友が必要だろう 鎧兵  
団では隊を任せるつもりだが…あのままでは己の真意を語ろうとし  
ない」

「既に兵の中には彼女を警戒するあまり信用しきれん者もいる  
早い内に孤立を防がなければ派閥を作って内部争いに発展しそうだ」

「そうだな…俺達はできうる限りのことをしよう…燦もいい加減  
に今日は寝るといい」

燦が自分の天幕に帰ったのを見届け、夜間警護の担当の中にある人  
物の顔を見つけた

本来なら彼女も天幕内に寝ているはずなのだが、他の兵と雑談しな  
がら楽しげにしている

俺が近づくと兵は皆、注意されると思ったのか直ぐ様佇まいを直した

「そこまで気を張らなくてもよい 皆、今日の戦いの疲れがあるはずだ 人数を分担し、交代しながら適度に休息をとるのだ」

「「「はー!」「」」

「さて…何故天幕で休まんのだ?いつまでも起きていては体に障るぞ」

「ん?いやあちよいと寝付けなくてねえ…」

大剣を傍らに置いて焚き火に当たっていた

彼女は高順、かの陥陣営と恐れられる人物だ

呂布に信頼を置かれ、最期するときまで呂布に忠義尽くした人物なのだが何故在野、しかも傭兵という仕事をしていたのだろうか?疑問に思うがいつも言葉を簿化されてしまう

とはいえ、元々彼女は自分の武を預けられるような人に出会えなかったとだけ漏らしていた

恐らく呂布とは未だに面識は無い…ならば呂布に合わせるためにと引き入れた

想像していた高順と違い、やや軽薄な部分もあるがその性格が他の兵との隔たりを直ぐに取り払い、信を得た

戦いでは広く視野を持ち、兵をよく見ているようで不利になった兵を見捨てずに駆け付けて救いだしている

そして大剣を振るえば申し分の無い武なのだ

しっかりと将として鍛えれば、いずれ呼ばれる陥陣営の名のままに手腕を直ぐ様に発揮するだろう

ただ陳宮とは不仲だったこともあり、反目しあわないか心配なのだがなにぶんこの世界の陳宮の性格は呂布が至上のようなものだったはず…正史ほどの中の悪さまでいかないことを祈るしかない

とにかく司馬懿、高順の二人を得て、賈馱に頼まれたことはあらかじめ片付けたのだ

「恵、一度日を置いたら俺達は洛陽に入る…お前にとってはあまり嬉しくはなかるうが、ついてくるか？」

「何を今さら…十常侍の鼻っ柱折れるんならついていくな、何処までも…あ、靈華ちゃんならホントに何処までもついていくなありや」

確かに簡単に想像できてしまうな…

とにかく十常侍に近づくと機会が増えるだろう

どれだけ気づかれずに奴らの戦力を削いで近付けるかが問題だ

下手をうって董卓の首を絞めるような真似をしてはならないな

俺の予想だが反董卓連合は十常侍の権威の独占と不正を董卓に擦り付けられて始まるのではないかと思う

だがもし本当にそうなるなら俺は見過ごすわけにはいかない

あの儂げな印象を与える少女が訳のわからないまま殺させはしない

反董卓連合など根底から叩き潰してやる

S I D E o u t

日付は戻り、ある日の事

「ええい！どいつもこいつも役に立たぬ！」

「そう怒るでない趙忠……」

洛陽にある館の中で二人の男が話し合う

彼らは十常侍の張讓と趙忠だ

やっとの思いで自分達の地位を固めることが出来ると今度は脅かす存在を無くすために活動を始めた

だが趙忠の私兵が次々に連絡が途絶えていく

趙忠は貰うものを貰って居なくなったものなだと怒りを露にした  
実際は社達が私兵達を次々に壊滅させているだけなのだがそんなことは一切知らない

「最近董卓のそばにいる賈馱の奴が不穏な動きをしておる…何が起きるかわからんから備えていたものを」

「仕方ないな…趙忠よ、奴を久し振りに使う他あるまい」

「む？まさかあの者達か？」

趙忠は顔をしかめるも幾分か思案した後口を開いた

「しかしだな張讓 最近の奴らめ何かよからぬ事を起こしかねんぞ？」

「わかつている　今回は私兵の調査をさせておけ　裏切つて  
いるのなら始末しておけとな」

「なんだいなんだい？新しい仕事くれんのかい？」

突然部屋の中に一人の男が入る

ぼさぼさの髪を揺らし、無精髭を伸ばして、人の良さそうな穏やかな笑みを浮かべていた

しかし、爛々と輝く瞳の奥底には途方も知れない悪意が見え隠れしている

何枚もの汚れている着物を羽織り、縄のような布を腰に巻いている地面を引き摺ったかのようにほこりにまみれ、何故か所々が煤けている

一見浮浪者のように見えるが、背には大きな布に巻かれた何かの異常差を引き立たせた

その男を見た趙忠は何も言わずにただ淡々に先程の仕事を言いつける

「また話を盗み聞いておつたな？」

「いいじゃありませんか別に…自分達の仲じゃありませんか」

「なら言いたいことはわかるな？さっき言っていた仕事を貴様らにやらせる…」

「了解」

「…しくじるなよ紫波 惣次郎」

ニヤリと笑い、無精髭を撫でながら男は退室した

「…今さらだが聞き耳をたてるのをやめろと言わんのか？」

「無理だな、門前払いにしてもどうしてか事情を聞き出しているし、拒絶しようものなら立ち去ろうとする」

「まったく…どいつもこいつも扱いにくいものだ…」

男が消えた扉を見ていた二人は溜め息を吐いて酒を酌み交わすのだった

その男は館の敷地にある別の小屋に入る

そこには四人の男女がいた

その中で兄弟とみられる二人に惣次郎と呼ばれた男は言った

「獅子浜兄弟：仕事が来たぜ？」

S I D E 靈華

私の名は司馬懿、真名を靈華という

先日、助け出された後に己の力を売り込んで社様の率いる鎧兵団の  
武将として新たに入った

私は私の持てる力を全て社様に使うことにした為だ

十常侍の私兵を次々に破った現在、商人を装いながら私達は行軍す  
ることになった

閻忠：仁という男の案により、洛陽に入るために怪しまれぬように  
するべく出されたものだ

検閲されようものなら鎧やら武器の多さに流石に止められるかもし  
れないが、そこは洛陽にいる徐晃なる人物が手引きするから安心し  
るこの事

だから私も特に反対をしなかった

ただな？私は確かに背は低いし幼い容姿をしているのは百歩譲っても認めよう…

「だからと言ってこの姿は…」

いつもは必要最低限の動きやすさの服を着ていたが突然過剰ともとれるほどの華美な意匠を施されたどうみても体格のあわない着物を着せられた

普段はしない化粧もされて、商人の娘を演じると

「仁、なんとかならないのかこれは…」

「ごめんよ靈華…それしかなかったんだよ……」

正直、重すぎて服に押し潰されそうだ

私を見て笑う恵に小さな怒りを覚えるが表情に出すのも馬鹿らしい社様まで笑いを堪えているのが見えて恥ずかしくなった

私は直ぐに馬車の座席に向かって早足で行く

そんな私の後を追うように仁が走り寄ってきた

「仁……」

「本当にごめんってば！睨まないで笑って笑って！」

しかしまあ悪意が無いのは分かる

だが何故こつも私に構うのだ？

この鎧兵団に入り、何の警戒もなく接するのは社様を除いてこの男だけだ

何だか変な気分だ

怒るに怒れん

「……気にしていない……早く元の場所に帰れ　これはお前が言い出したことなのだからな」

「わかったよ」

ふう……頭を切り替えねば

社様の部下が手引きしているとはいえ演技はしておかねばどこで十常侍の配下と出くわすかわからない

細心の注意を払わないと目をつけられてしまうのだから

馬車から覗く景色に大きな町が見える

さあ、ここからが本番だ

私の邪魔をした十常侍を完全に葬るために

S I D E 社

遂に洛陽に入った

途中の検問に鎧兵団の古参の者や、見知った兵が担当し何事もなく通ることが出来た

俺達は兵の案内により予め決められた屋敷に入る

そこには茜が一部の兵と共に待っていた

茜達は膝をついて俺に頭を垂れる

「お待ちしてありました社様……」

「よく、俺の不在の中鎧兵団を纏めてくれた……よくやった茜」

「はっ！……社様、賈馱様より伝言が」

「ふむ、申せ」

「『三日後、十常侍討伐を開始する 夜に張遼を向かわせる』と  
のこと……急とはいえこれを逃せば十常侍を倒す機会はございません  
私は賈馱様と共に行きます」

「わかった……当日には燦とこの司馬懿を連れていく」

「「御意」」

「社様、何か連絡がありましたら彼らを使ってください 私の細  
作にございます」

茜の後ろにいた者達は彼女の直属の配下か

彼女は後ろの兵に言い付けて俺に向き直る

「……本当はもっと語りたいのですが、私には仕事がありますので  
ここまでです」

「そうか、忙しいところすまないな」

「いえ…社様」

「ん？」

「お帰りなさいませ社様」

「ああ」

茜の頭を撫でる

そうだ

俺は帰ってきたのだ

俺が立ち上げた鎧兵団に

戦鬼帰参（後書き）

友人の酷評を貰った後に更に酷評の感想を貰ってガリガリHPを削られたサノブです

下手くそだとはわかってるけど自分の実力に気分は最悪

それでも投稿するしかないのですが

て言うかオリキャラ出過ぎ

もうしゃしゃり出てくんなよと思ったが原稿を読み漁ると出るわ出るわで大丈夫かこれ

新しく加わった人物司馬懿、高順

司馬懿は朱里みたいにロリいです

茜よりロリいです

……ロリいのが抜刀術で戦うのって何か萌えませんか？

や、司馬懿はそこまで前戦で暴れませんが

高順はちんきゆうキックの的になりそうな人を目指します

ちよつと性格は歪んでますが

そして紫波惣次郎なるおっさんの出現

社とはすんごい因縁深い人とだけ言っておきます

十常侍？知らんでござる

そろそろ戦闘らしい戦闘を入れないと……

戦闘の描写って好きだけど一番難しい

文字だけでどれだけ迫力を魅せるのか

今一度勉強をし直してきます

それではまた次話にて…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4225t/>

---

漆黒の鎧兵団

2011年8月15日09時02分発行